



0057235-000

682-100

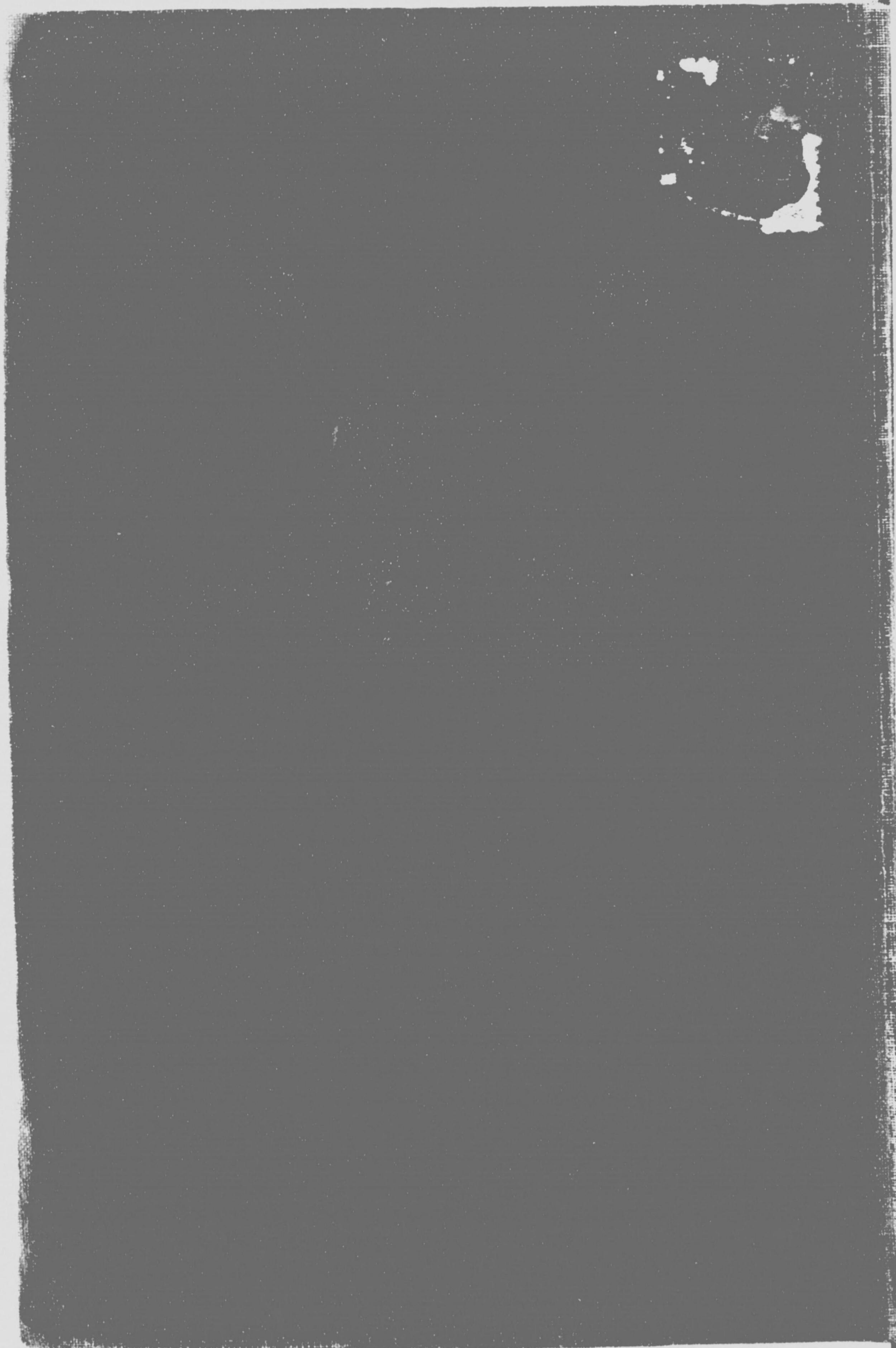
戦車戦

陸軍技術本部・訳

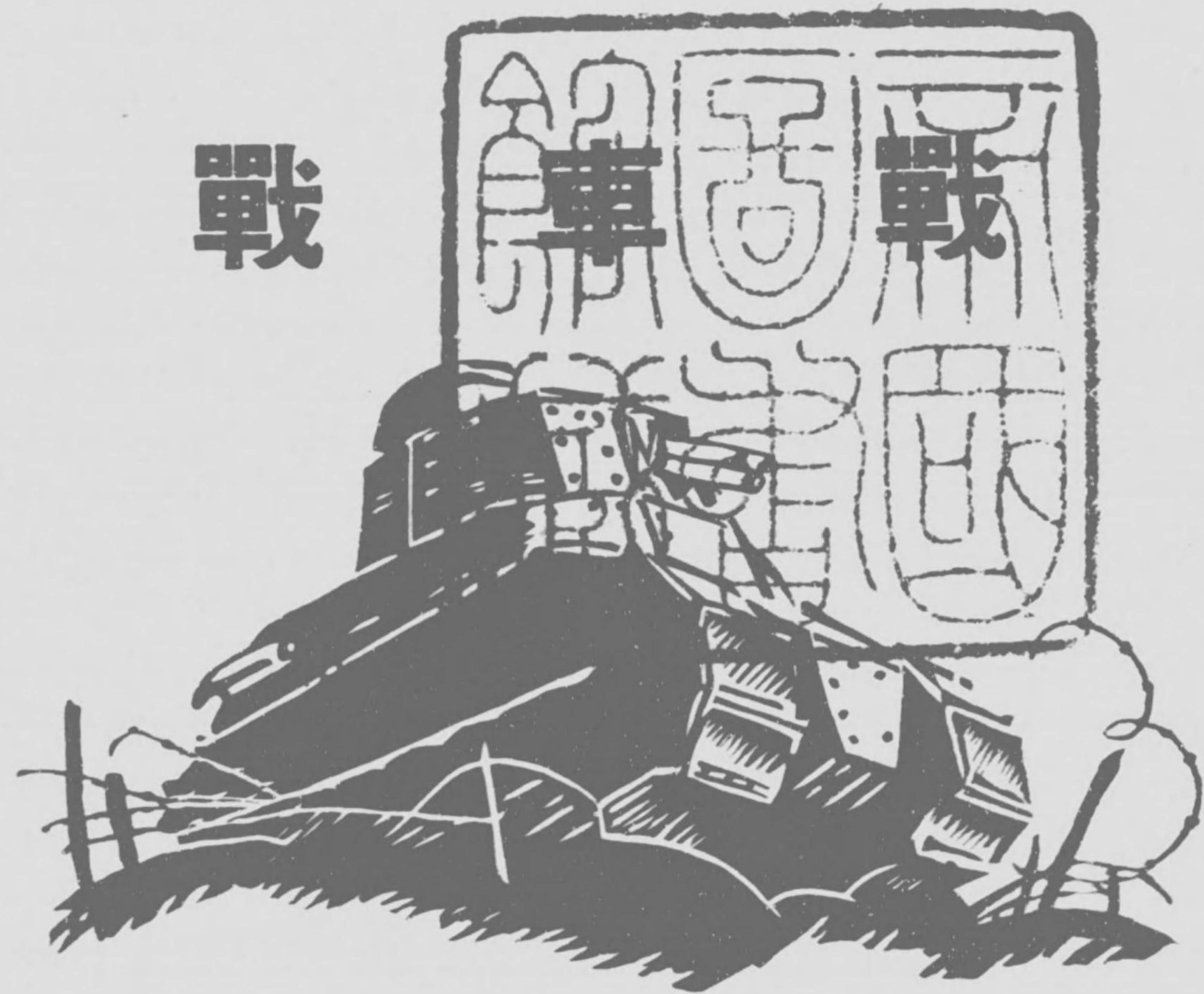
兵用図書

昭和10

AJF



戰



陸軍技術本部





進 慕



進 器

682-100

序

歐洲大戰も既に三年目を迎へた一九一六年の九月十五日は、歐洲大戰史上特筆すべき日であつた。夫れは、此の日英吉利軍がソンム河畔に初めて戦車を使用して、獨軍防禦陣地線の一角を突破したからである。

古來「兵は奇を尙ぶ」と謂ふ。而して近代戦に於ける所謂奇襲は、常に作戰の時機、方面等に於て敵の意表に出る許りでなく、獨創的裝備就中敵の豫期せざる新鋭兵器の使用によつて一舉に敵を殲滅せんとする傾向が極めて濃厚である。現今列強が擧つて敵の意表に出づべき獨創的兵器の案出に腐心しつゝある所以も亦茲にある。

英軍に於ける獨創兵器即ち戦車の使用は、單に獨軍をして周章狼狽爲す所を知らざらしめたのみならず、彼等の鐵壁と恃んだ陣地の一角に破綻を生せしめ獨軍の志氣を大に沮喪せしめたことは、何人も之を否定し難い事實であつて、獨逸のフォン・ヅウエール將軍をして「吾人はフォツシユ將軍の天才に敗れたるにあらずして、實に戦車將軍に敗れたるなり」と嘆せしめたことに徴するも明かである。

然しかうした戦車の偉勳の蔭には、之が考案設計乃至整備運用等に關して腦漿を絞つた人々の幾多の苦心と犠牲とが匿されてゐる。天上の飛行機と共に將來戦に於ける戦場の支配者たるべしと謂はれる地上の機械化軍、そのバック・ボーンを爲す戦車の歴史を緋いて先人の足跡を探ることは、近代軍を知り明日の戦争を理解する上に極めて必要なことであつて、かゝる所にこそ次期戦争に對する幾多の教訓が藏されてゐるであらう。

戦車特に其の構造性能等に關する文献は其數必ずしも尠しとしないが、之が使用状況就中戦車戦闘の實相を物語るものに至つては比較的少い。即ち西部戦線に於ける英軍の戦車戦史中、多數の實例に就て戦車戦闘の實相を紹介せる本書は、近代戦の容相を理解せんとする人士の爲好伴侶たるものと信ずる。

昭和十年七月

戦車第二聯隊長

陸軍歩兵大佐 木村民藏

戦車戦目次

一、戦車の濫傷……………一頁
 戦車以前の戦車——生みの親——ピッカウイリー型——リットルウイリー型

二、構造ミ性能……………二〇
 雄型と雌型——マークI型——乗組——武装——速度

三、初陣……………三二
 ソンムAの戦線へ——兵器的奇襲——獨兵の狼狽——英國兵の戦車観

四、奮戦……………四九
 雄型戦車の武者振——泥——雪と氷

五、戦車の改造……………五四
 缺點とその改善——マークII型——戦車隊の擴張——再び縮少

六、アラス會戦の戦車……………六〇
 敵線突破——長蛇を逃す——ルシタニア號の復讐——吹雪中の戦車戦——友軍

彈幕の犠牲

七、戦車兵教習所……………八四
 學科——術科——猛烈な教育振り——恐ろしい熱心——戦線へ

八、メッシーヌの戦闘……………一〇三
 マークIV型の出現——機密の保持——補給戦車——敵前上陸と戦車

九、イーブルの第三會戦と戦車(一)……………一一六
 パッサンゲアール——攻撃準備——十六日に互る準備砲撃——泥中の立往生——特殊火點の攻撃

十、イーブル第三會戦と戦車(二)……………一三四
 泥沼の戦場——泥との戦闘——戦車隊長の指揮法——救難中隊の活動

十一、カムブレーの戦車戦……………一五〇
 奇襲戦法の採用——ヒンテンアルグ線の突破法——企圖の秘匿——五百臺の戦車艦隊——陣頭に立つ戦車團司令官——燦たる戦果

十二、カムブレー會戦餘話……………一六九
 村落内の戦車戦——敵中に於ける故障——停車場から戦線へ逆戻り

十三、大退却と戦車……………一七九
 ロシアの崩壊——獨軍の大攻勢——退却の掩護——ホイツハット戦車

十四、戦車對戦車の戦闘……………二〇四
 毒瓦斯を肩して——獨逸戦車現る——戦車と戦車——ホイツハットの勇戦——無限軌道の破壊

十五、新式戦車……………二二五
 マークV型——獨逸軍の戦車——歩兵への示威——歩兵との協同——アメル
 攻撃

十六、アミアンの會戦(一)……………二四〇
 マークV型——攻撃準備の要領——偽騙秘匿——彈幕射撃の計畫——攻撃準備位置へ

十七、アミアンの會戦(二)……………二五九
 戦車陣——攻撃に前へ——鎧袖一觸——音楽箱號の奮闘——装甲自動車と機密書類

十八、アミアン會戦餘話(一)……………二七五

砲兵と戦車——戦車中隊全滅——鬼哭嘯々——倫敦の歡喜
 十九、アミアン會戰餘話(二)……………二八六
 美天下の戦車——跛行戦車——無抵抗の獨軍——パゴームの戦車——一人戦車
 二十、大戰終る……………二九七
 北方運河を渡る——驚ふ所敵なし——木造戦車と獨逸兵——休戦の鐘——戦車の損害
 二十一、英軍以外の戦車……………三〇四
 埃及に於ける戦車——佛國の戦車——米軍の戦車隊
 二十二、戦車の價值……………三一七
 戦車の功績——歩兵の衝角——獨軍の對戦車恐怖——英國戦車團
 二十三、大戰後の戦車……………三二八
 大戰後の發達——軍の機械化——水陸兩用戦車——飛躍戦車——四輪軌戦車
 ——ダブルアップヒ弾——將來戰

戦車戰目次

戦車戰

戦車の濫觴

戦車以前の戦車——生みの親——ヒック・ウイリー型——
 リットン・ウイリー型



戦車は、人類の最も最悪なる悪魔を發揮させる。だから、戦争の殺伐な迫力下に在る人間は、平時で
 世を平らに信じておられたいやうなことをやつて除けるものだ。あの世界大戰の時も、参加諸國の間にいろ
 いろさ左様な兵器があつたが、今迄にない全くの新兵器を造り出すことに成功したのは英國だけであ
 った。

戦車建造の抑、の目的は、敵火の下を前進する歩兵に、支援と掩護を與へようとするに在つた。
 この目的に對しては、遠い昔のアッシリヤ人やブリットン人の造つた兵車、西紀前一千二百年頃の支那
 の戦車、西曆一五九九年オレンヂ公の造つた謂はれる帆走戦車なき、古來幾つかの試みがあつたの
 だが、實際上その目的を達し得たのは、英國製のこの戦車が最初である。

此の種の考案の内でも、その運行に機械力を使はうとしたのは、キユニョーミ謂ふ佛蘭西人が一七六九年に發明したものが、恐らく始めてあつたらう。是は、四輪馬車の上に蒸氣機關を載せたもので、兎に角、一時間に四杆の速度を出すまでに漕ぎつけたのだが、走行二十分毎に停つて、蒸氣を造らなければならぬミ謂ふ代物であつた。發明者のキユニョー氏は、フランスの政府の代表者に對して、壁を壊したり柵を破つたりして此の蒸氣馬車の勇猛振りを示してやつたのに、政府は之に酬ゆるに投獄を以てした。

本當の戰車に進む研究の第一歩は、一八八八年にある米國人の發明した蒸氣馬車であらう。是れは既に一七七〇年に特許を取つてゐた英國人リチャード・ロヴェル・エツヂウォース氏の無限軌道を利用してゐた。

バッテリー氏の拵へた牽引車は、色々の點、就中その操向機構に於て、戰車の構造を豫言したものであつた。此の牽引車には、内燃機關のほか、軟い地面上を運行し得るやうにする爲に、車の重みを廣い面積に分配するやうにした無限軌道をも採用してゐた。

戰闘用ではなかつが、發動機で無限軌道を動かす牽引車は、大戰前、英國の陸軍省でも既に數次の實驗をやつてゐる。又様々なこゝを豫言したエツヂ・ヂー・ウ・ルス氏は、一九〇三年に書いた豫言的

物語の中に、戰車に似た戰闘用機械を活躍させてゐる。

もつミ珍らしいのは、奧國人エル・イー・モール氏の事である。同氏は一九二二年に、無限軌道で運動し、崖を攀つたり戰闘をやつたりする機械を、陸軍省へ提出したのである。此の機械は、前後の二部分に分れてゐて、この二部分を蝶番式に連結したり、曲線路上での操向を容易にする爲に連鎖式の無限軌道を使つたりしてゐる點で、寧ろ現在の戰車より優つてゐるのではないか、と思はれる程のものであつた。然し、この驚くべき提案も當局者の容れる所ならぬ、戰車の發明に對して何等寄與するこゝが出来なかつた。それは折角の考案を陸軍省で抛棄り放しにして置いた爲に、此の考案のあつたこゝは、世界大戰の終るまで全く世間に知られないで過ぎたからである。

又世界大戰の數年前に、ノツチンガムのある鉛職人が、装甲を施し且原野を運動するこゝの出来る機械の設計書を、陸軍省へ差し出したミ謂ふ話もある。此の鉛職人へは「受理した」ミ云ふ通知のほかには、陸軍省から何の音沙汰もなかつた。此の設計書は、大戰が済んだ後で陸軍省の書類棚から見出されたが、それには「立案者は狂人なり」ミ附箋されてゐたミ謂ふ事だつた。

獨逸人も「戰車の發明者なり」ミ主張する権利があるかも知れない。それは、一九一三年にギエーベルミ云ふ獨逸人が装甲車を考案して其の上に大砲を載せ、ポーゼン地方のピンネミ謂ふ處で、ピラ

ミッド型の障壁を昇降する実験をやつてゐるからである。同氏は翌一九一四年に伯林スタヂュームで是を多数の見物人の観覧に供した。此の時は傾斜約三十度許りの斜面を登り始めるに、ぢきに機械が止つて動かなくなつたので、氏は一生懸命で機械の調整に努めたが、その甲斐がなかつた。待ち疲れした見物人は、「入場料を返せ」と怒鳴つたり、いろいろ侮辱の言葉を浴せたりしたので、同氏は爾來二度に再び、此の發明を公衆に観覧させなかつた。

以上のやうな様々の豫備的の試舉が、孰れも何等獲る所なくして終つたのは、戦時のやうな眞剣な必要に刺戟されなかつた爲である。然しながら、あの世界大戰は、戦車の出現を遂に不可避のものにしてしまつた。

開戦後僅か二箇月で、西部戦線は既に伯耳義の海岸から瑞西の國境にまで擴がつて仕舞ひ、而も蜿蜒たるその全正面が、到る所デットロックの状態に陥つてしまつた。瑞西の國境から伯耳義の海岸まで殆ど塹壕傳ひに行ける程の塹壕網が展開した上、その塹壕に云ふ塹壕が、凡て幅の廣い鐵條網に機關銃や速射砲などで固められたので、敵も味方もお互に突破は不可能となり、攻撃して行く方は鐵條網に引懸つてまご／＼してゐるうちに、防者の機關銃掃射で殲滅されてしまふ。

一九一五年になるに、獨逸側は毒瓦斯を使つてイーブル附近の敵線突破に略成功したのだつたが、

海牙條約の侵犯行爲たる此の毒瓦斯は、程なくして獨逸軍自身の頭にもふりかゝつて來た。聯合軍は佛國戦線で獨逸軍に對し、折からの西風に乗じて毒瓦斯を使用した。そして獨逸軍は嘗てイーブルで聯合軍に與へた以上の大損害を受けた。併し、此の毒瓦斯に對しては、其の後、防毒面を謂ふ解毒法が發見されるやうになつた。

猛惡な毒瓦斯を以てしても尙ほ戦線のデットロック状態を打開するこゝが出来なかつたので、何か全くの新兵器を捜し出さなければならぬ破目になつて來た。

非常な先見の明に大きな想像力の持主である英軍のスウイントン中佐は、當時出征英國軍に従軍して政府の軍事通報員の任務に服して居たが、一九一四年の十月に、鐵條網を突破し塹壕を通過し又機關銃を破壊するためには、さうしても装甲機械が必要だに云ふ結論を下したのでつた。

心眼の鋭いスウイントン中佐は、既に大戰の勃發前から、敵の意表に出る方策に就いて、深刻な研究を終つてゐるのである。

是より先、スウイントン中佐は、一人の友人から米國のホルト牽引車に就て「惡魔のやうな攀登能力を持つ米國の牽引車」を謂ふやうな意味の手紙を貰つたこゝがあつたのを思ひ起し

「ア、塹壕を突破するものは是だ」

六
ミ考へて、一九一四年の十月二十四日、陸軍省へ裝軌式機關銃破壊車の製作計畫を提出した。是れは車に厚い装甲を施し其の上で大砲ミ機關銃ミを載せ、塹壕は跳び越え、鐵條網は切斷するか又は踏み潰すやうにしようミ謂ふのだつた。

此の著想から纏て戦車が生れて來たのだ。十五箇月の後に是が具體化されて、本物の戦車になつたのだが、夫れに至るまでの経過は、官僚に對する長い抗争の歴史である。

一體英國の陸軍省ミ云ふ處は、別に他意のある譯でもあるまいが、萬事につけて他人の創意を善意に解釋しない傾がある。此のスウイントン中佐の意見に對しては、上級官吏中に

「斯んな架空的な機械は、造るばかりでも一年はかゝる。それ迄には戦争なんか終つて仕舞ふ」ミ云ふ者もあつて、折角の計畫も、暫くは顧みられなかつた。

併し中佐は容易に屈しなかつた。

一九一五年の一月には、英國に歸つて前に出した意見の再考を求めた。此の時には、幾分か考慮が拂はれて、翌年の二月にホルト牽引車を改造したもので障碍通過の實驗をやることになつたが、元々障碍通過用に設計したものでなかつたので、この試験は失敗に終つた。同じ年の五月、今度は、百五十五馬力の裝輪式フォスター・ダイムラー牽引車に、新式の塹壕通過設備を取りつけて試験したが、

是も亦塹壕通過に成功しなかつたので、陸上發動機船——當時はまだ戦車ミ謂ふ名稱はなかつた——の考案は、實現不可能ミ謂ふことになつて、放棄されてしまつた。

陸軍省では知らなかつたが、此の間に、他の方面でも實驗が行はれてゐたのである。

スウイントン大佐(進級した)の提案を見た、時の海相ウインストン・チャーチル氏は、同氏一流の想像力を以て、大佐の提案中に包蔵されてゐる恐るべき可能性を看取した。氏は伯耳義に於て、海軍の装甲自動車隊を活躍させた經驗があり、その装甲自動車隊の屬する海軍航空隊が、佛國戦線が陣地戦になつてしまつて以來、英國へ歸國して退屈してゐた爲めに、何か陸戦に之を利用する方法はないかミ考へてゐた矢先だつたので、陸上發動機船ミ謂ふ名稱によつて、大にアップビルされたのだつた。

一九一五年二月、チャーチル氏は時の首相アスキス氏に、書簡を以て「何かの形式で塹壕超越機を造らなければならぬ」ミ云ふことを書き送り、また、車輪をつけた防楯ミ装甲した蒸氣牽引車ミの使用方をも提議した。然しチャーチル氏が敵火の下で兵員を推進する攻撃武器ミして考へてゐたのは、單に装甲車輛ばかりではなかつた。心の中では、海軍航空隊のヘザリントン少佐の立案した計畫、即ち三箇の大きな車輪をつけた陸上船のこみをも同時に考へてゐたのだつた。

是れは、三つの車輪をつけた臺の上に、十輦砲二門づゝを容れた砲塔を三つ載せ、八百馬力のサン

ドーム重油機関で運轉しようとするのであつた。車輪の直径十二米、船の長さ三十米、高さ十四米、最低部の地上高が五米もあり、一時間の速度は十三軒の計畫であつた。

此の陸上船は、幅六米乃至九米の水流を横断するばかりでなく、河底の状況が有利であれば、四米五十種の深さまでは水中渡渉の出来る豫定であつた。土手、溝、橋、壑、鐵條網を謂ふやうな、小さな障礙物は易々征服出来る。餘り樂觀的な話ではあるが、一九一四年當時は、是でライン河をさえも渡らうと云ふ希望を持つてゐたのである。

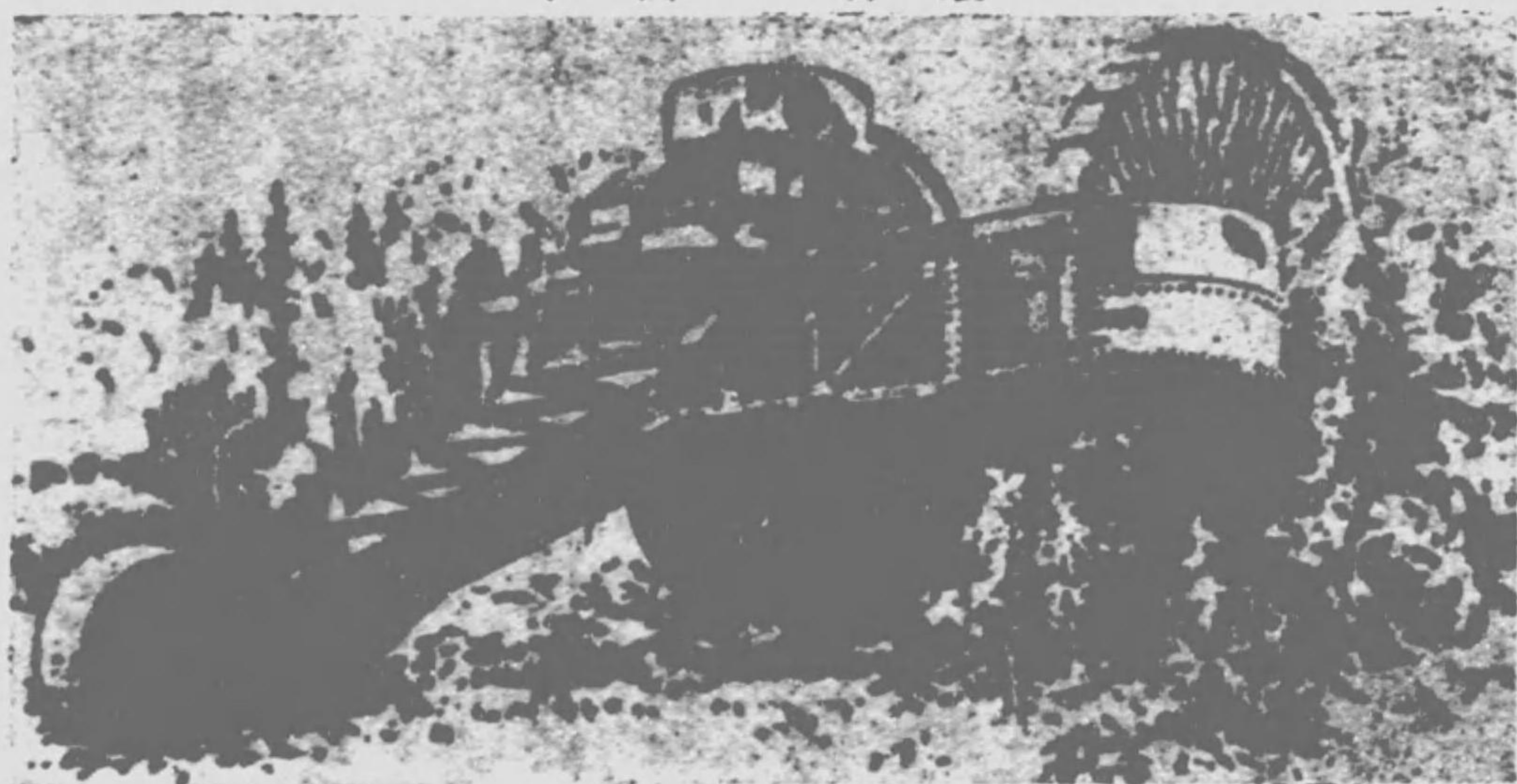
一九一五年の二月になつて、この問題を研究する爲に、ド・アインクル氏を長とする陸上船委員會なるものが組織された。其所で研究した結果、何しろ大きな機械なので、重さが一千噸を超える上に、戦場では砲兵に素敵もない大目標を呈し、有利でない結論に到達した。

そこで、も些し小型のものを造ることに、なり、車輪の大きさを約五米に縮めた陸上船六隻を造ることに決し、一方では掘索式無限軌道や自走式無限軌道をつけた蒸氣均土機に就ての實驗をも進めることになつた。

此の年の五月に前述の陸上發動機船に見切りをつけた陸軍省では、六月になつて、初めて海軍の陸上船委員の話を開き出して、遂に陸海軍連合の委員を編成することになつた。

八

第一の戦車



(英国外西亞にて造られた)

木造模型を造つて見るに、この陸上船の設計なるものが、餘りに狂想的なものだと言ふことが判つたので、遂に陸上船の計畫は之を斷念放棄するの止むなきに至つた。然も失望は單に是ばかりではなかつた、八月に入るに、更に大きな蹉跌に遭遇したのだつた。夫れは、海軍の方で装甲自動車隊を全部解散することになり、それまで各種の實驗を擔任してゐた處の、第二十豫備装甲自動車隊を陸軍に移管しようと言ふ話の出た爲である。

しかも、陸軍の方では、陸上艦隊の方へ縦ひ一兵も雖割くことを肯じなかつた。委員會は進退兩難に陥り、婦選論者のパンクハースト夫人に泣きついて、義勇婦人を募つて貰ひ、漸く六名の應募者を獲ることが出来た。然し、幸にしてその心配もいらなくなつた。それは、ド・アインクル氏が海軍の

方を説きつけて、第二十豫備装甲自動車隊を委員の方へ其の儘渡し、且此の隊の人員を五十名から六百名に増加するこゝになつたからである。

初めて戦車使用意見を上申したスウィントン大佐は、此の頃佛蘭西から歸つて来て、陸軍省のある位置に就いた。そして、陸上船委員の出来たこゝを聞いて大に喜び、委員會の幹事スターン中尉に早速會見した。

「スターン中尉！こいつは、今迄にない素的なこゝになつた。海軍の造船部長が陸軍の爲に陸上艦隊を造つてゐるらしいんだ。陸軍ではお願ひしたこゝもなし又何の御手傳もしないのに……。働かうと思へば、海軍にならなけりや駄目だらうが、一體、君ならさちらにするね、運轉手になるか、それこも機械の方に廻るか？」

スターン中尉は眞面目な顔で

「私は銀行の方へ廻して貰ひたいです」

こ冗談口で答へた。

それから後、スウィントン大佐は、戦車思想の昂上に、及ぶ限りの力を注いだ。

揃つて優秀な技術家であつた、トリットン氏とウィルソン中尉が、夜晝の別なく努力した結果、遂

にトリットン一名とリトル・ウィリーと稱した戦車の設計を完成した。リトル・ウィリーと謂ふのは、英國兵が獨逸の皇太子につけた渾名で、それを戦車につけたのだ。リンコルンで其の實物大の模型を見たスウィントン大佐は、嬉しさの餘り、出征軍の總司令部へ次のやうに書き送つたのだつた。

「海軍の方で、今、一生懸命に無限軌道の模型を造つてゐる。二米もの幅を一ト跨ぎにする馬を造るに成功した。是れは、丁度尾にたかつてゐる蚤を噛む犬のやうに、軸の周圍にグル／＼と轉んで行くものである。」

いよく出来上つたので試験して見るに、此のリトル・ウィリー戦車には缺點があつた。重心が少し偏してゐて、平衡が不良であつた。

今度は、陸軍省の方で、高さ一米四十種の胸墻と幅一米五十種の塹壕の通過出来るものを、造つて貰ひ度いミ注文した。リトル・ウィリー戦車の長さが少し短かつたからであつた。

不撓不屈の、トリットン・ウィルソンの兩技術家は、直に新設計に取り掛つた。車輪の直径を四米五十にしなければ駄目だと思つて、考案に頭を絞つてゐるうちに、突然素晴らしいこゝを考へ出した。それは、

「軌道が車體の周圍を、グル／＼廻るやうにしたらさうだらう」

ミ謂ふことであつた。

111

勇み立つた二人の技術家は、遂に、あの特殊な形状をしてゐる最初の戦車を造り出した。是れは大きな車輪を使ふ著想を基礎としたものである。下面が扇形をしてゐて、軌道は圓く廻らずに、車輪の前端車軸の高さに於て直角に方向を換へ、それから車體の背中に沿つて回轉するやうになつてゐた。

扱て、紙上の設計丈けは完成したが、厚く装甲された車輪の大重量を負擔するに足りる丈けの強度のある軌道を造り出すには、無数の實驗が必要であつた。

軌道の色々の状態に就て試験を重ねたが、孰れも不成功に終つて、將に匙を投げやうに至つた。失望の内にバラタ式ベルト軌道を試験して見たが、是も十分な結果を見ることは出来なかつた。然るに、一九一五年九月二十二日、スターン中尉は、次のやうな勝を誇つた文面の電報を受取つた。

「バラタ式も昨朝試験臺上で失敗した。併しトリットンが新に壓延鋼板で造ることを考へ出した。輕量にして強度頗る大。順調に進みつ、あり」

斯くして生れたのが、ウィルソン車であつた。此の戦車は、其の後陸上船 Centipede 號を命名され、終には、凡ての戦車の母なるの故を以て Mother 戦車と呼ばれた。然し此の式の戦車の一般的名

稱ミしては、ビッグ・ウィリーミ謂ふ名前が使はれた。

實物大の模型に就て檢分の結果、當局者も之を容認することになつたが、陸軍省の一部の職員中には、陸軍關係の事柄に海軍の携るのを快しミしないで、容認しないものもあつた。

軌道を車體の背中を通つて回轉させることが、最も困難な問題の解決策ミなつたのだが、之れが又同時に他の問題を起す原因ミもなつた。即ち火砲を何處に据ゑつけるかミ謂ふのが、その新問題であつた。結局、車體の兩側に、張出砲塔をつけ、其の中に砲を配置することになつた。元來、この張出砲塔ミ謂ふのは、海軍用語であつて、軍艦の舷側外へ突き出した箱型で、中に火砲を配置した部分を云ふのだ。この突出部を造ることは、火砲の舷側射界を廣くし、特に直前又は直後を射撃する爲、缺くべからざるものである。此の戦車の左右の張出砲塔ミ、其の中にある左右各一門の五十七耗砲及防楯を加へた重さは、合計約三噸であつた。

Mother 號は、一九一五年の十二月に、リンコルンの町のフォスター會社の手によつて完成され、試運轉の成績も至極良好であつた。然し、果して之れを使用すべきであつたらうか？。

戦車論者のチャーチル氏は、斷然之れを使用すべきものミ斷定して、十二月三日在佛英軍總司令部宛に、あの有名な「攻撃の變改」ミ云ふ意見書を提出して、敵線突破の爲に無限軌道牽引車を使用し、

その後方に對銃彈防楯を以つて掩護された歩兵を隨行さすべきことを提議し、尙ほ攻撃は強力なる探照燈の協力の下に、夜間之を實施すべきことを附言した。

出征軍の新總司令官ヘーグ元帥は、其の年のクリスマスに此の意見書を読んで、之に

「第三頁第四節の無限軌道車は如何？」

と云ふ鉛筆書きの附箋をつけた。

此の附箋は、纏てほんこのクリスマススの贈物となつた。と云ふのは、此の附箋が「西部戦線の戦車」と謂ふ戦慄すべき劇の主役の一人となつた處のエルス工兵中佐を上場させたからである。エルス中佐は、前記附箋の疑義を明にする爲に、英國に向向させられた。此の使命が、遂に中佐の経歴を一變させることゝなつた。何故なれば、是れによつて同中佐は新戦術の選手となり、後年戦車兵團の司令官まで務めたからである。

はじめて戦車を造つたと謂ふことは、當然極秘にしなければならぬことだつた。是れに關係した人々は孰れも秘密嚴守を宣誓し、漏洩の疑あるものは、國土防護法による禁錮刑を以て擬せられた。不思議な機械のこゝを聞き知つた婦人達には、

「此の秘密が敵に漏れると、何千人と謂ふ人が命を墜さなければならぬ」

と申渡された。陸上船委員の存在を知つてゐる人々には、凡ての試験が失敗に終つたので、關係者は其の職を去ることになつたと謂ふ通知を受け取り、全く是れを信じきつてゐた。

陸上船委員會の事務所では、設計書は金庫の中へ入れて夜は番人をつけた。また、陸上船と云ふ名前から秘密が漏れはしないかと云ふ心配から、委員會の名稱を變へることになつた。

戦車を造ることの初めの工程が水槽に似てゐたので、運水車と呼ぶことにしようとした處、一つの問題が持ち上つた。一體、英國の官廳では、委員會などの名稱は、その頭文字で呼ぶ習慣だつた。いよいよ運水車——Water carrier——にする、と云ふことになる。「委員會はW・O委員會を云ふ略稱になるのだが、W・Oは一寸可笑しいぢやないか？」と謂ふ話が出たので、結局 Water carrier を Tank へ改め、委員會の方は Tank Supply 委員會即ち T・S 委員會と呼ばれることになつた。これが、今日世界中で戦車をタンクと呼ぶに至つた原因である。

二月二日、ハット・フィールド公園で、ロイド・ジョージ氏やキチナー元帥等の臨席の下に、ビッグ・ウィリー戦車の公試運轉を行つた。凡ての人々が驚倒推賞して措かなかつたが、唯キチナー元帥一人は、戦車を「可愛らしい機械玩具」だとして、「戦争は、決して斯んなもので勝てるものではない」とこゝを強辯した。

在佛出征軍總司令部からは、早速戦車四十臺を注文して来た。其の後、陸軍省ではその數を百臺に増加した。

斯くして、戦車は遂に出現した。併も製造作業ばかりでなく費用までも全然海軍費から支辨され、設計も實驗も、一切が海軍の手によつて行はれたのであつた。斯うした経緯を考へるに、戦車は凡ての意味からほんこの陸上船である。陸軍省の下手糞水夫共が、戦車の價値の打診に失敗したり、時々沈め兼ねたりしたのも、無理ないことかもしれない。

百臺——後で更に百五十臺になつた——の戦車は、リンコルン市のフォスター會社ミバーミンガム市のメトロポリタン車輛會社に注文された。今迄になかつた新奇の戦車——而も是れ丈けの數を——六箇月の間にそれも極秘の裡に製造し得たに謂ふことは、「國內戦線」に於ける手際のよい戦技に謂ふべきであつた。此の當時、鋼鐵の不足に苦しめられ、工場に云ふ工場を擧げて砲彈の製造に忙殺されてゐた英國が、このやうな成績を示したことは、英國の技術家が至難な仕事を世界中で最も短期間に完成し得るに云ふことを、立證したことになる。

初め、工場の事務所を受取つた戦車の設計を見た時に、會社の幹部は、

「こんな途方もない設計をやるT・V委員會は、屹度氣狂ひの寄り集りに違ひない」

と思つた。工場の方では、秘密を守るにこみや、極秘にして置く爲に番人をつけたり交通遮断をしたりするやうに、申渡されたのだが、篤き疑議の上で、全く秘密扱ひにしないことにした。唯職工や其他出入の者には、

「此の奇體な装甲車は、露西亞から注文された水槽車である」

を説明し、この虚言を一層眞實しやかに胡魔化す爲に、戦車の側面へ露西亞文字で、「取扱注意、ベテログラード行き」を、ペンキで書きつけた。見る人は皆

「こんな奇妙な形の水槽車を注文するなんて、露西亞人に云ふ奴は可笑しな人間だな」

と思ひ込んでしまつたので、人の好奇心を起させずに済み、公然と戦車の製造を進めることが出来た。

一九一六年の三月に、スウィントン大佐を長とする重班機關銃團なるものが編成され、他の部隊から機械の素養のあるものを募つて隊の要員に充てた。

此の志願者には、試験装甲自動車隊に入れるを告げて置いた。

志願者は、ビスレーの野營地に收容されて、ピカース式モチキス式の機關銃の操法を習つたり、ウェール・アイルランドの海軍砲術學校へ行つて五十七耗砲の操法を習つたりした。野營地では、近く

不思議な機械を運轉させられるミ云ふやうな噂があつたが、眞實のこゝは誰一人知るものもなかつた。

彼れ此れしてゐるうちに六月になるミ、志願者はノオファークのテトファードの附近にあるエレベデンミ云ふ所に特設された練習所へ移された。彼等が其所へ行つて見るミ、不審になつて來た。敷地は八軒四方もあつて、それが地方民から決して見られないやうにしてある。そして、此の区域内にあつた農場や小舎に居た者を全部立ち退かせ、此處へ通じてゐる道路は凡て遮斷されてゐた。

そして、その内部には、フランスにある戦線の状態を引き寫しにした模型を作り、塙根で三重に圍ひ、六線の歩哨を配置した上に、騎兵の巡察兵まで配るミ謂ふ嚴戒振りであつた。許可證を持つ者の外は絶対に入らせず、中に居る者も特別許可證——是は中々貰ふこゝは出来なかつた——を持たなければ絶対に外出させず、專習員はまるで監禁されたミ同様の有様であつた。此の祕密の一角の上空は、絶対に飛行を禁じ、之に違反した者はお構なしに射撃するこゝになつてゐた。

一般地方民に對しては、所々に、「爆薬あり危険」ミ書いた警札を立て、注意した。

「此の中は、獨逸へ通じる坑道の入口になつてゐる」

ミ云ふ噂が、近所の者の間に擴まつた。

こんな具合だつたから、中にゐる機關銃團の人々の意氣込みも、凄じかつた。ひたすらに不思議な機械——樹に攀ち登つたり、水を泳いだり、カンガルーのやうに跳ぶこゝも出来る、ミ噂をしてゐた——の到着を待ち焦れた。

「今、確かにエンジンの音を聞いたぞッ」

ミ云つて一人が庭から駈け込むミ、中にゐる者が、「それッ」ミ許りに飛び出して見に行くが、それは聞いた者の空耳であつたりした。

勞働問題の關係で、戦車の製造は、最初豫想したやうに早くは運ばなかつた。又、戦車に載せるミ十七耗砲彈が不足した爲に、日本から英國へ送つて貰はねばならなかつた。

そうこうしてゐるうちに、若干のビッグ・ウィリー戦車ミ少數のリットル・ウィリー戦車が、ある夜練習所へ送りこまれて來たので、熱心な教練が始まつた。將校も兵士も、不眠不休、金石をも鏢すやうな熱心さで、戦車の操縦や用法を學ぶのだつた。故障が起るミ、豫て修得した構造に關する知識を試すによい機會だミ許りに、大喜びをする有様だつた。教育に使ふ戦車の數が少かつたので、此の年の八月になつてフランスへ出征するまでは、自分の車ミ云ふものは定められなかつたけれど、本國內で覺えなければならぬこゝは、程なく覺え込んでしまつた。

新しくして、大奇襲は將に其の準備を完了せんとしてゐたのである。

二 構造と性能

雄型と雌型——マークI型——乗組——武装——速度

扱て、新様にして生れ出でた怪物——戦車は、こんな形で、こんな働きを、持つてゐただらう？。側面から見た戦車の形は、角に丸味を持った菱形であつた。後端の下方には、圓周を深い鋸形に刻まれた起動輪があつて、此の齒形が無限軌道の履板を引懸けて、軌道を回轉させた。前方上端には誘導輪があつて、車體の下面から廻つて來る無限軌道が、此の誘導輪に懸つて、グル／＼車體の周圍を廻つて行く。又、此の誘導輪によつて、無限軌道を緊張させたり、緩めたりすることも出来る。

左右兩側の無限軌道は、車體の周圍を下から上に、限りなき廻轉運動を續けて行く。車體の下面に無限軌道の間には、轉輪があつて、無限軌道の上に廻轉してゐる。

以上のやうな點は、凡そ總ての戦車に共通の點である。初めて造られた頃の戦車に就ては、第二圖第三圖等を参照すれば、一層了解が容易である。

左と右の兩無限軌道の間にある車體の内部は、種々の機械や人間の入る所であるが、何しろ高さが

約二米はさしかないのでから、可成り狭苦るしいものであつた。

前方にある司令塔の内部には、戦車長と運轉手とが乗つてゐた。司令塔の上面は、無限軌道の面よりも、約三十種許り高くなつてゐる。戦車長と運轉手の前には、内部から開閉する矩形の窓があつて、鋼鐵の扉がついてゐた。窓の下は、斜面によつて傾斜した床面に繋つてゐるから、戦車の前部は、丁度魚の頭のやうに尖つた形をしてゐた。これは戦車長と運轉手が、脚を入れる爲に止むを得ない形であつた。

運轉手は、右側の坐席に坐つて、操向と速度變換とを擔任し、左側の坐席にゐる戦車長（將校が之に當る）は、方向變換用のハンド・ブレイキを操作した。

司令塔の中央部にある二つの窓の間には、球形銃架に載せた機關銃を取り著けた。球形銃架は、銃をこの方向に向けても、その方向に銃を向けても、銃架と車體の間に決して敵彈の入つて來るやうな隙間を生じない。戦車長の坐席は、運轉手の坐席より少し高くしてあつたが、是は機關銃を有利に使用へるやうにする爲であつた。その他、乗員と銃砲の配置は、第五圖のやうである。

戦車の内部中央の部分には、發動機を置き、その兩側を通路にした。發動機の上から二本のバイブを出して靜音器に導き、靜音器から戦車の後端へは排氣管が通つてゐて、地面に近く口を開いてゐた。

是は、排氣管から出る焰の爲に、遠方から敵に発見されない爲であつた。

最初の間は、静音器をつけなかつたので、排氣管から出る音響や火花や炎の爲に、戦車の位置を敵に嗅ぎ出された。此の缺點を補ふ爲に、油罐で急造した静音器をつけたり、水に濡らした囊を被せて火花を消したり、排氣管に泥や粘土を塗りつけたり、色々な方法を講じたものであつた。

車内の後部には、差動齒輪ミ十字軸を載せ、鏈によつて機關の動力を起動輪に傳へる二次齒輪も茲にある。差動装置ミ發動機ミの間には齒輪室があつて、その上には大きな始動ハンドルがある。差動装置の後方後壁に接して放熱器があり、放熱器ミ發動機ミの間は、天井に添ふてパイプで繋いであつた。

車體の左右兩側には、張出砲塔が突き出てる。所謂雄型戦車は、張出砲塔の中に、廻轉防楯をつけた五十七種砲ミ機關銃を容れ、武装の合計は、五十七種砲二門機關銃四銃であつた。雌型戦車は、張出砲塔が非常に狭かつたので、廻轉防楯の後方に機關銃二銃づつ、をつけ、五十七種砲を載せなかつたから、武装の合計は機關銃六銃であつた。雄型も雌型も、發動機ミ天井ミの間に彈藥架を造つて、之に銃砲の彈藥を容れた。

雄型の方の張出砲塔には、小さな扉が幾つかあつたので、疎忽者は砲塔へ入れるときに、身體を屈めるのを忘れて頭を打突け、度々痛い目にあつた。雌型の方は、砲塔の下面に高さ約六十種許りの窓を一つ、けた丈けであつた。入るときには、先づ頭部を入れてから、脚の方を引き上げ、出るときには、先づ脚の方を地面につけてから、身體を屈めて降りるのだつた。若し戦車が敵彈の爲に火事でも起さうものなら、八人の乗組が此處から逃げ出すことは、到底出来さうもなかつた。

戦車の背中にも一つの出入口がある。是には銃眼がついてるて、其處から拳銃を撃つことも出来た。車體の後壁にも放熱器の附近に、小さいながら一つ孔があつたが、骨ミ皮ばかりミ云ふやうな瘦せた者でなければ、いざミ云ふ時に逃げ路にする譯には行かなかつた。

風扇によつて、新鮮な外氣を車内へ吸ひ込み、また放熱器も汚れた車内の空氣の通風に寄與する處はあるが、それでも車内の温度は平均華氏の百二十五度ミ云ふのだから、戦車の内部は、決して健康地ではない。

最初のマークI型戦車は、尻に二つの車輪をつけてゐた。是は障碍の通過や衝撃の緩和を容易にする爲につけたもので、水壓装置によつて、上に上つたり地面へ押しつけたりするやうになつてゐた。然し、却つて邪魔になる許りだつたので、後になつて廢止されてしまつた。第二圖ミ第三圖には、此の尾輪が明に現れてゐる。

第 二 圖



ソムム戦線に於けるI型戦車

初めは、ダイムラーの百五馬力六汽筒袖型發動機を使用した。運轉手の直接操作する二速度一次變速機によつて、第一、第二、後退の三種の速度を出すことが出来た。是れ丈の速度は、運轉手一人で自由に變速することが出来た。發動機力は、是から差動装置に傳はつて行く。差動装置の軸の兩端には、夫々二速度式の二次變速機がついてゐて、變速機手の操作する手動槓桿によつて、夫々左右の無限軌道に作用する。動力は鏈によつて、兩側無限軌道の起動輪に傳達される。

無限軌道は左右共に、九十枚の壓延鋼製の履板から出来てゐて、車體の周圍をグル／＼廻つてゐる。然し、實際は無限軌道が、地面の上を

進んで行くのではない。履板にある環に噛み合つてゐる起動輪によつて、車體が無限軌道の上を進んで行くのだ。換言すれば、戦車は、自分で軌道を敷設して其の上を進み、次に其の軌道を自分で撤収して頭の上を超して前方に運び、更に是を敷設して行くのである。

戦車に攀登能力を與へるのも、無限軌道である。それは戦車が水平面に對してどんな角度を探る場合でも、無限軌道が地面をしつかり掴む爲である。それから、無限軌道は後が低く前が高くなつてゐるのは、障碍に遭遇した場合、戦車が仰起運動を始めるに都合が良いのであつて、堤防とか胸牆などの乗越しに非常に有利である。

水平地で戦車が地面に接してゐる部分が、僅か一米か一米五十程に過ぎないことは、戦車の出来る前に大きな車輪を使用しようとしたここから來てゐるのだが、是が行進の場合に軽い動搖を生ずる原因となつてゐる。

重心は戦車の中央にある。運轉が上手だと、跳躍しよう云ふ時に丁度シーソーの様に戦車を振動させたり、急傾斜を降るときに靜に坂を下つたりすることが出来る。戦車の嶺覆したときは、後にも先にも、唯一度しか其の例がないやうだ。それも、非常に急勾配を降りようとして、眞逆様に墜落した場合であつた。

戦車が運動を始めるときには、先づ第一に運転手が燃料栓を開ける。それから、乗組員が三、四人掛りて、大きな曲軸柄の把手を廻す。恐ろしい音を立て、發動機が始動する。初めの戦車では燃料は、戦車の内部司令塔の両側に入れておいて、是から重力の作用に依つて、氣化器へ送つたものだった。それだから、戦車が弾痕へでも落ち込むと揮發油が送られなくなるので、危い話だが、手で給油したり、燃料の罐を持つて行つて直接氣化器へ注ぎ込んだりしたものだった。其の後、壓力給油法と云ふものが出来たが、なか／＼具合が甘く行かなかつた上に、非常な危険を伴つたので、遂に是も止めて仕舞つて、オートヴァク式と謂ふ方法を採用した。マークIV型戦車は此方法に據つたのである。是は、燃料油を車體の外部に在る油槽からポンプで汲み上げ、その後は重力に據つて氣化器に送る方法である。

發動機が順調に廻轉するに、張出砲塔を閉めて内からボルトで駐め、戦車は行進を起す。運転手は運轉一方だ。前方を熟視しながら、車を廻轉させる必要があれば、齒輪を切り替へる。戦車長の將校は、地圖と空中寫眞を膝に載せて、展望孔か又は潛望鏡から前方を見詰めながら、行進目標を捜したり、運転手に指圖したり、射手に射撃目標を示したりする。時には、戦車の前方に現れる敵に對して、自らルイス機關銃の射撃を浴せる。

車長の後方の張出砲塔の中では、五十七耗砲の砲手が、折敷けをして眼を眼鏡につけ指を引鐵に懸けて、砲をグル／＼廻しながら、目標となるべき敵の機關銃や砲兵を物色してゐる。閃光一閃、砲弾が飛び出す。怖しい音が戦車内に轟き互る。他の砲手は、狭い床の上に蹲つて急いで打殼藥莢を抜き出し、次の弾丸を血に餓えた砲腔へ投げ込む。打殼藥莢は、砲塔の床にある小さな孔から、車外へ抛り出す。砲の後方にある機關銃は、五十七耗砲の豫備砲手又は差動装置の傍に立つてゐる變速機手を使用する。

反對側の張出砲塔の中でも同様であつた。時には、二門の五十七耗砲と二銃の機關銃が同時に發射されることもあるが、その時の銃砲聲のすさまじさは、百五馬力の發動機の爆音さえ消されて仕舞ふ位だ。車内は火薬と揮發油の臭でとてもひどいが、戦車に當る敵のやうな敵の機關銃彈の音を聞く窓を開けて新鮮な外氣を入れることも出来ない。

最低一時間一杆二〇〇から、最高六杆五〇〇まで、四種の速度が出せた。原野を運動する時の平均速度は、一時間約三杆だつた。

第一速度と第二速度は、運転手の操作丈けでよいのだが、更に速い第三、第四の二速度を出すときは、運転手は右手で發動機の蓋を敲いて、發動機の傍にゐる變速機手の注意を促した後、變速機手が此方に向くのを待つて、自分の指を一本又は二本出して、その速度にするかを合圖する。是によつて

二人の變速機手が齒輪を切り替へるから、運轉手は之に應じて聯動機を操作する。

小さな方向變換は、戰車長の操作する手動制動機丈けで十分であつたが、大きな方向變換は一人では出来なかつた。半輪をやるには、例へば、左廻り場合には、右側の變速機手に合圖する。右側の變速機手が、齒輪を中立に切り替へるに、右側の無限軌道の方の連絡が解けて、機關の力は左側の無限軌道にばかり傳はる。そこで戰車長が右側の制動桿を牽くに、右側の軌道は回轉が止まり、戰車は右半輪の信地旋回をやる。上手な運轉手になるに、車を止めないで旋回させるか、一般には先づ車を止めて、それから旋回するのが普通であつた。是には、制動桿を牽く戰車長、節氣弁と聯動機を操作する運轉手、それから變速機手が二人、合計四人掛りなので、時間と勞力を濫費し而も其動作が緩慢なここ、氣持が悪くなるほどであつた。敵彈の下では、之が爲に屢、絶好の機會を逸し、其の上戰車の戰闘力は半減する有様だつた。

雄型も雌型も、長さが約八米、高さが約二米五十種だつた。雄型は幅が約四米、重さが二十八噸あり、雌型は幅が三米、重さが二十七噸あつた。是は雌雄共に、張出砲塔を加へた重量である。

マークI型戰車は、尾輪までを加へた長さ約十米、同型の雌戰車は幅が約四米であつた。

速度は、平坦地では一分に九十米乃至百米だが、頓擡地帯では毎分二十五米乃至三十五米に減じ、

夜間は僅に十三米しか出なかつた。行動半径は約二十四杆、運轉持續時間は八時間で、是は一方では乗組員の耐へ得る限度でもあつた。溝渠、畑地、堤防、壁、生籬、柵等は突破出来る。鐵條網は丁度扉が麥畑でも荒すやうに破壊出来る、其跡には、一列側面縱隊の歩兵が二本樂々通過するここが出来た。

併し戰車にも苦手はあつた。木の株、密林、深壕、軟土又は泥地、斜面を斜に通過するここ等がそれであつた。

例へば、彈痕と彈痕の間の幅が、やつと無限軌道を通すほどの幅位しかない處は、戰車には通れない。幅が三米七十種以上、深さが約一米八十種以上の壕へ入り落ちるに、兩岸の垂直壁の爲に、戰車は立直るここが出来ない。

戰車の斜面攀登力は大したものだ。通過し得る傾斜の限度を示せば次のやうである。

乾	燥	地	六分の五
濕	潤	地	五分の二
濕潤甚しき	き		四分の一

高さ一米八十種までの垂直壁は乗り越越えるここが出来たし、一分の一の斜面なら高さ三米七十種ま

では通過出来た。之を反對に降る方は、垂直高三米七十糎乃至四米五十糎まで征服するここが出来たが、之は地面の硬軟を運轉手の巧拙に關するここが大である。幅二米四十糎乃至三米までの塹壕は、樂々通過したし、三米七十糎のものでも大した障礙にはならなかつた。

戦車の力の強さは、直径約四十糎乃至五十糎の立木を押し倒すこと云ふ一事を知れば、十分判断出来るだらう。然しこの押し倒しは、餘程注意してやらないと、根株が戦車の腹の下へ入つて、所謂乗り上げの状態になる。ボブラのやうな細い樹木ならば、押し倒すのもお茶の子であつた。

沼澤地や岸のジメ／＼した水流などは通過出来ない。併し水深四十六糎以下で底が砂礫質などの如く有利であれば、横断出来る。

曲半徑が小さく而も屈曲の頻繁な道は避けなければならぬ。傾斜二分の一以上の長坂路も禁物である。舗装した道路、フランスの石敷道路なども、出来れば避けるに越したことはない、それは路面が堅硬な爲に履板が壊され易いからである。

破壊された村落を通過する時には、特に落ちて來た屋根に注意するここが必要である。その下には、往々にして彈痕があつたり陥穽があつたりするからである。狭くて深い凹道も、その一側又は兩側が切り取りになつてゐるものは、避けなければならぬ。戦車は視界が狭いので、此等の部分に隠れて

ゐる敵の砲兵を發見し難いからである。

塹壕迷路も敬遠するが良い。上を乗り越そうとして轉落し、埋没される虞があるからである。

雄型戦車は、其幅が廣い上に砲が突き出てるるので、幅五米五十糎以上の林空がない限り、森林の中へは這入らぬことにしてゐた。

戦車は喧しい音を立てたが、節氣弁を調整すること、敵に騒音を聞き取られないで、敵前約二百五十米まで接近することが出来た。斯様な場合には、砲兵が機關銃の射撃によつて、戦車の騒音を消すのが、一般であつた。

戦車の行動に最適の地形は、表面の硬い水平地で、一種平方上一噸四百までの壓力に耐へる處である。土質としては、白堊質、砂礫質又は砂利のある處がよい。彈痕の甚しい所では、道路のあつた跡を捜すのがよい。斯様な部分は、他の部分が戦車の重壓に耐へ得ない時でも、確實な支持面を呈するここが屢々であつた。

前進地の地形を偵察し、進路の發見を任せる偵察掛將校や戦車隊長は、土地の抵抗力を検する爲に、秦皮の木で造つた杖を突き刺して見るここが度々あつた。一平方糎上一噸四百の壓力に抗し得る地面では、此の杖を地中三十糎乃至四十五糎に刺し込むに、兩手を使はなければ刺し込めなかつた。

一平方糎上〇疋八五〇の處では、片手で同じ深さに突き込むことが出来る。地面が軟いか又は地表下が濕潤してゐるに、杖は握りの處まで入つて仕舞ふ。こんな處の抗力は一平方糎上約〇疋三五〇位しかの負擔力がなく、到底戦車の行動を許さない。

三 初 陣

ソナムの戦線へ——兵器的奇襲——獨兵の狼狽——英國兵の戦車観

英國の陸軍省は、一九一六年の七月下旬に、重大な決心をした。即ち、その秋の攻勢に参加させる爲、戦車に對して、佛國戦線への出征を命じたのである。

未だ、此の時には、使へる戦車の數も尠なかつたし、訓練の届いた兵員も極く僅かしか居らなかつたので、T・Y委員會では、陸軍省の命令に賛同し兼ねた。委員は、直ぐに參謀總長サー・ウィリアム・ロバートソンに會見し、多數の戦車の用意の出来る翌年の春まで待たせようとして、戦車は澤山の數を集團使用しなければ効果のないことや、人員器材共に數の少いうちに使用することは、敵に對する奇襲的價値を放棄するに等しいことを進言した。

此の頃、自ら獨自の戦車の建造に着手してゐた佛軍でも、フランスの方で準備の出来るまで使用を待つて、英佛兩軍で同時に使用して奇襲的效果を發揮し、獨逸軍に決定的打撃を與へるのがよいと思ふ意見であつた。

併しながら、英國の出征軍司令部は、その決心の變更を肯じなかつた。

七月一日に始まつたソナムの會戦は、此の時恰も進行中であつて、英軍は戦線を約六、七軒進出させることが出来たが、受けた損害も莫大なものであつた。攻撃第一日損害が六萬を超え、有史以來に於ける世界最高の義勇軍として許してゐたキチナー元帥麾下の英國軍も、遂に獨軍の頑強な防禦陣を突破し得ず、哀れ空しく戦陣の露も消えるのかと思はれた。

血と肉を以てする萬策は既に試し盡されて、今は唯、凋落の秋を待つばかりになつた。志氣を振起し再擧の勇を與へる爲には、徒に拱手を許さなかつたので、遂に戦車を活躍させることになつたのであつた。

當時テトフォードに在つた戦車は、孰れも大修理を要する状態だつたが、熟練工がなかつた爲に、少くも三箇月の日子を要するだらうこの見込であつた。然し、そう云ふ餘裕は勿論許されなかつたので、精力家のスターン中尉は十日間に仕上げようと思畫した。直ぐに、メトロポリタン會社の職工中

から四十人の志願者を引き抜いて、テトフォードへ駆け付けた。何分突差のこみで給養設備もなかったため、スターン中尉は大東鐵道會社に頼んで食堂車を借り受け、職工の天幕の傍に置いて、作業完成迄此の食堂車から賄つて貰つた。

八月十三日に十三臺の戦車が、英國を出發した。夜の内に汽車に積み込んで、テトフォードからアボンマウスまで汽車で輸送し、それから船で佛蘭西のハーブルに送り、其處からイブレンチの戦車教習所まで汽車で送つた。そして此處に、八月の末まで駐めて置いたのだが、其の間に戦車の数は十五臺に増加した。

此の時分には、戦車を汽車に搭載するのは、非常に難しかった。張出砲塔を車體から離して、丸太と滑車を使つて、別の無蓋車へ積み込んだ。斯うしなければ、戦車の幅が廣過ぎて、汽車輸送が出来なかつたのである。張出砲塔は、一箇の重さが火砲兵一箇八〇〇もあつた、夫れをテトフォードからイブレンチに送るまでには五回も積み換へるのだつたが、誠に大變な仕事であつた。

機械の點檢や調整をやつたり、鐵條網や模造した機關銃陣地なごに就ていろ／＼の實習をやつた後、戦線進出の命令を受けて、愈、戦車が戦線に進出したのは、九月の十日になつた。

戦線進出後の乗組員の忙しさは、お話にならない程だつた。新しい銃砲の取著、發動機豫備品の



試験、手榴彈防禦網の裝著等の諸作業の外に、恐ろしく澤山の訓令、訓辭、地圖や空中寫眞なご、研究を要するこみが山のやうに在つた。戦車長の中の大部分の者が、受けた澤山の命令中如何なる點に特に注意しなければならぬかも知らず、空中寫眞の如きは未だ見たこみもないと云ふ有様だつたので、啓發されるよりは寧ろ途方に暮れるこみの方が多かつた。

この戦車にも、燃料と潤滑油の豫備油槽を一つ、グリースの小罐を二つ、水槽三箇、ピカース砲の豫備砲身、籠に入れた鳩、手旗、通信燈等の外に、二日分の糧食と様々の装具——革製の頭部防護用戦車帽を含む——なごを積み込んだ。

弾薬は、雄型の方は五十七耗砲彈三百二十四發に銃彈六千三百發、雌型の方は銃彈のみ三萬一千發を、彈藥架に詰め込んだ。

最初、司令官の方でも、戦車をさう使つたら宜いのか定め兼ねてゐた。歩兵の行動開始に先つて前進を起させるこ、第一線へ進出する時の發動機の轟音によつて獨逸軍に氣附かれ、敵は我が第一線壘にゐる歩兵線へ彈幕射撃を注ぐだらう。結局、各戦車に一定の經路を示して、攻撃目標へ到着する時機が歩兵の到着より五分早くなるやうに、行動を規整されるこみになつた。

それから、我が砲兵の射撃によつて破壊されるこみもないやうにする必要もあつたので、友軍砲兵

の彈幕線上に所々隙間を残して、其處から戦車を進めることにした。又、二車輛の小隊と三車輛の小隊に分け、雄型戦車は敵の機關銃集と支點の攻撃に當らせ、雌型戦車を以て兵員の殺戮をやらせることになつた。

九月十三日の朝、戦車は待機陣地に就いて、彈藥と燃料を補充した。

乗組員の大部分が、初めて佛蘭西へ來た者ばかりだつたので、ソナムの戰場が萬事につけて勝手が違つてゐるので困つた。

夜になるに、道路と云ふ道路が、自動貨車と患者車で溢れるばかりであつた。彈藥車や砲車、輜重車などを引切りなしに曳いて進む馬の行列、泥濘の中を無言で進む歩兵、凡てのものが恐ろしい混雑を極めながら、蝸牛のやうに遅々たる歩みを續けてゐる。路傍には所々に澤山の彈藥、糧食、爆藥などが、山のやうに積まれてゐる。地面は荒されて、装具の破片、毀れた車輛、空き罐、馬の屍體、錆びた鐵線、不發の榴彈などが、到る處にゴロ／＼してゐた。

暗の中に、高く低く輝いてゐる照明彈は、あちらこちらに切り倒された樹林の木株や村落の毀れた煉瓦壁などを、照らし出してゐる。

見るもの聞くもの、一として昂奮の種子ならぬはなかつた。第一線後方の谷の中には、騎兵の大集

團が屯してゐる。其の中には、頭をターバンで巻いた黒人兵やオカマ帽を被つた加奈陀兵なども混つてゐた。……色々な噂が非常な速さで部隊から部隊へ擴がつて行つた、「今度と謂ふ今度は大突破をやるだらう。我々騎兵も遂にチャンスを探むことが出来るに違ひない」と謂ふやうな。

歩兵線の中も、今や獨軍の頭上に撃ち下されんとする英軍の新奇襲のことで、話は持ち切りだつた。

「無限軌道車とか云ふんだがネ。奇妙な恰好をした装甲自動車で、何でも、廣い鐵條網も踏み潰せるし塹壕も通過出来る」と云ふことだ。身體中に惡戯者の機關銃を一杯つけてゐて、逆立ちになつても戰鬥力を失ふことはないんだそうだ。第二中隊の者が、坂を昇つて來る處を此の間の晩見て來たんだが、尻尾の處に小さな車が二つついてゐるそうだ。乗組は、頭を打突けても怪我をしないやうに、革の帽子をかぶつてゐる。内部には榴彈と爆藥がぎつしり詰つてゐる。獨逸の野郎共もこいつには耐るまいと思ふね。甲虫か何かのやうに、頭を擱んで抛り出す譯にも行かないから……」。

戦車に關する噂は中々盡きなかつた。

一方、戦車隊の方では、攻撃の準備に大童になつてゐた。攻撃命令、攻撃計畫要圖、攻撃經過豫定時間表などは數が少く、三車輛につき一部の割にしか渡されなかつたので、大急ぎで見て暗記し、次

の番へ廻さなければならなかつた。

處が、愈、明日は攻撃云ふ日の夕刻五時になるこゝ、急に今迄の命令や計畫を全部變更されるこゝになつて、新に口頭で新計畫を命令された。

その晩、新らしい命令に基いて、戦車は第一線の後方近くにある出發陣地へ静々に進入した。そしてその翌朝の拂曉三十分前を期して、攻撃前進を起すこゝになつた。

此の晩は、鼻を摘まれても判らぬやうな眞闇な晩であつた。地面は到る處猛烈な砲撃の爲に掘り返されて、孔だらけになつてゐた。

戦車は彈痕を出たり入つたりしながら、暗の中を進んだ。狭い地隙を進んだある戦車は、戦死者の屍を踏み越えて前進しなければならなかつた。機械の故障を起したり孔の中へ落ちたりした爲に、出發陣地へ到着出来ないものもあつた。待機陣地から出發陣地へ向つたときには、全部で四十九車輛あつたのが、十七車輛が途中で落伍して仕舞つた。

残りの三十二車輛は出發陣地に就くこゝが出来た。然し、出發陣地は我が砲兵陣地の傍に在り、此の砲兵が一晩中射撃しつゞけてゐた爲に、既に二十四時間の活動を續けて来た上に、此の夜も徹宵まんどちりもするこゝが出来なかつたので、戦車の乗組員は綿のやうに疲れ切つたまゝで、次の朝を

迎へるこゝになつた。疲労困憊の極に達してはゐるが、戦車の眞價を發揮してやらう云ふ固い決心には、何の變りもなかつた。

やがて午前五時三十分になつた。戦車は發動機に點火して、勇躍しながら前進に移つた。

戦車の建造に著手して以來茲に七箇月、此の長い月日を祕密に武者振ひの裡に過して来た陸上船は、大戦史上の一畫期たる一九一六年の九月十五日に、進水した堂々たる姿を多難なる無人地帯の海原に浮べたのである。此の時、乗組達は自分達の努力によつて戦闘云ふもの、容相を永久に變化させるこゝになるのだこゝ、思つてゐたらうか？、然り、彼等は自分達に多大の期待が懸けられてゐるこゝを十分承知してゐた。自分等の肩にこそ、偉大なる新兵器——戦車の運命を擔つてゐるのだこゝ云ふ自信を抱負に満ちてゐたのであつた。

運轉手は、反射鏡を見たり潜望鏡を覗いたりして、進路を間違へないやうに一歩懸命であつた。敵の真中で故障を起しはすまいか？穴へ落ちないで甘く敵の塹壕を通り越せるだらうか？前をヂツミ見ではゐるもの、頭の中には種々の心配が浮んで来る。アツ危い。すんでのこゝに味方の負傷兵を踏み潰す所であつた。

車長は、一刻毎に破裂點を戦車に近づかせて来る敵の彈幕に注意してゐる。命中したらさうなるか

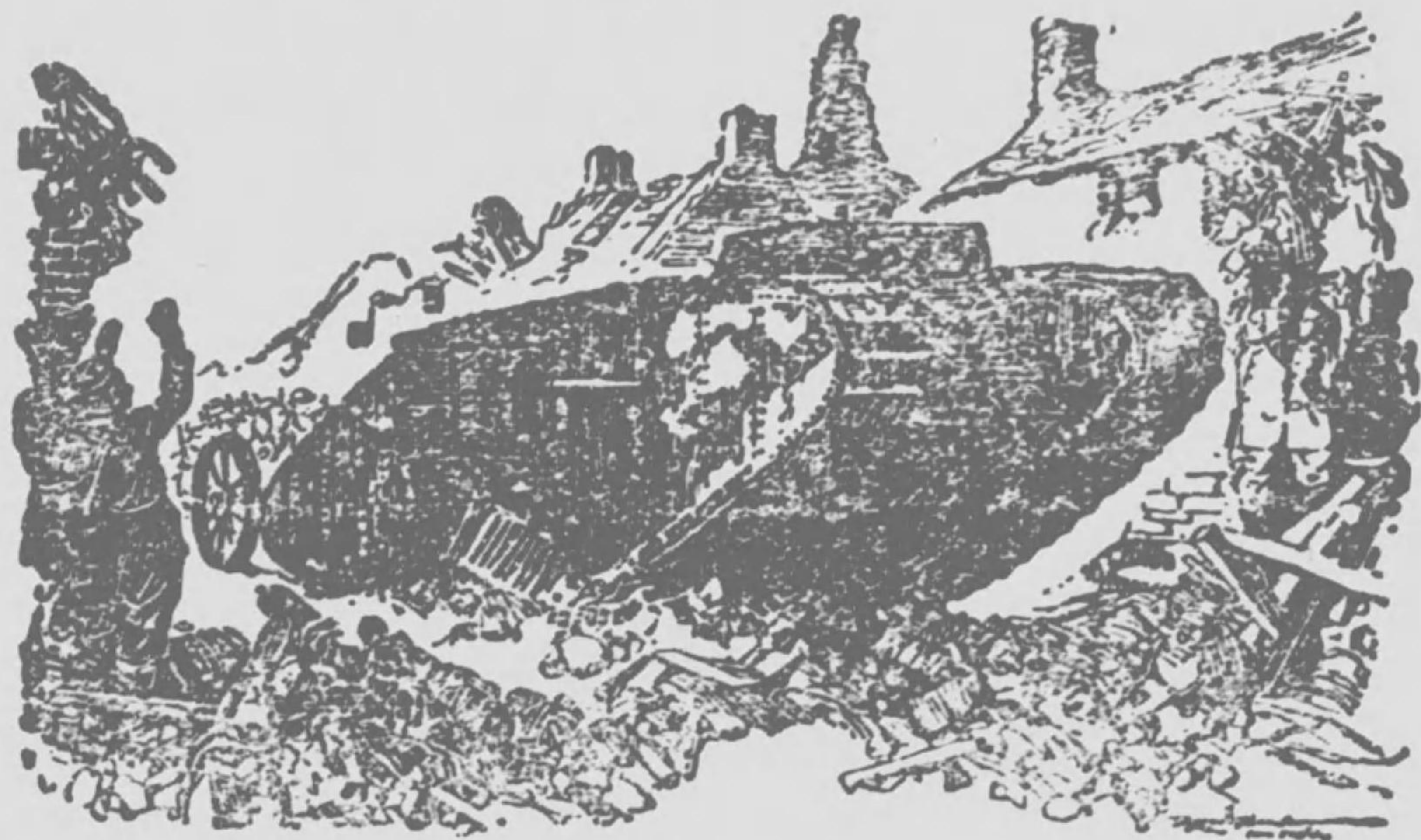
？その結果は餘りにも明瞭なので、考へても身震ひがする。やがて、ちき近くにある塹壕が、攻撃目標だ。氣がついて、運轉手の腕を叩いて振り向かせ、「目標はあれだ！」と指し示した。運轉手は發動機の蓋をガタ／＼鳴らせて、變速機手に合圖する。變速機手がハンドルをぐつ／＼引く。戦車はそろそろ方向を變へて来る。

砲手は大砲の上へ押被さるやうになつて、狭い照準孔から血眼で目標を物色してゐる。射撃の演習は今迄に幾度もなくやつてゐるのだが、その時とは全く勝手が違つてゐる。見渡す何百米の間にも、地上に姿を現はしてゐるやうな馬鹿な目標はない。装甲板に當る銃弾は、彼のやうな不氣味な音を立て、ゐる。車内は閃光と鉛の飛沫の渦巻で一杯になり、顔も云はず手も云はず、刺されるやうな氣持がする。全く、本國で教育を受けてゐる時には、聞いたこともない状況だ。

然し、それも暫くで氣にも止まらなくなつて來た。泥の中を這り、障壁を乗り越え、鐵條網を押し潰し、彈痕の漏斗孔を出たり入つたり、右に左に上に下に揺られながら、戦車は長い間を前進した。車内は瓦斯でだん／＼息苦しくなり、耳は銃砲の發射音で、聾になりそうだった。

塹壕で、獨軍の塹壕に辿りついた。青い軍服を着た獨逸兵は、戦車を見るに吃驚して大聲をあげて逃げ出した。狼狽して何かに躓き倒れた獨逸兵の上を、戦車は情容赦もなく乗り超えて行く。

第三圖



フーラーの村落中を進む英國の歩兵と戦車

塹壕へ入つて見えなくなつた戦車もあり、彈痕へ落ち込んで仕舞つたものもある。故障を起して霧の中に立往生し、乗組が必死で發動機を運轉しようとしても、遂に動かないものもある。然し、こう云ふやうな戦車を除いた他の戦車は、孰れも素晴らしい活躍をやつてのけたのだつた。

一臺の戦車がフーラーの村落へ乗り込む。驚いた獨逸兵は飛び立つやうに退却し、大部分の者が、地下掩蔽部に使つてゐた穴倉の中へ逃げ込んだ。戦車の後から續いて來た西蘭兵は、穴倉の入口を閉めた丈けの手數で、勿論一人の死傷者も出さないで、此の村落を占領した。英軍の偵察飛行機は、此の状況を見て次のやうな報告をした處が、其の報告文が英國內の各新聞紙に、大見出しで掲

戦された。曰く、

「一臺の戦車は、フレール村の本道を堂々前進中にして、英國歩兵は、萬歳を連呼しつゝ、之に續行しつゝあり」

敵の鐵條網を踏みつぶし機關銃陣地を蹂躪して、歩兵に有力な援助を與へた戦車もある。ある勇敢な戦車は、敵の塹壕に陥み跨つたまゝ、機關銃で壕内を掃蕩し、更に壕の後方に進出して三百人の捕虜を獲た。

一臺の雄型戦車は鐵條網を突破してグウーデクールに進入し、敵の砲兵陣地を襲ひ敵砲一門を破壊した後、次發の彈丸を發射しようとした時に、敵砲彈の爲運轉手室を破壊されて火を發した。燃え擴がる戦車の炎の中から脱出するこゝの出來たものは、僅か二人だけであつた。

獨逸軍の方でも、英國軍が何か新しい兵器を使用するらしい云ふこゝは、豫め知つてゐたこゝは確かであつた。後になつて、その情報は、巴里にゐた獨逸の手先であるマタ・ハリ云ふ艶麗な日本の舞姫によつて、齎らされたこゝが判明した。此の日本婦人は、その後獨逸軍から却つてスパイの嫌疑をかけられて、銃殺されたこゝ聞いてゐる。

兎に角、獨逸側では、英國軍の新兵器が現れても狼狽しないやうに云ふこゝを、豫め軍隊に注意

してはあつたのだが、其の効果はなかつた。濛々たる霧の中から姿を現す恐ろしい鐵製の怪物を見るこゝ、多くの者は一ト目見た許りで浮足を立たせてしまつた。ある豪膽な機關銃手は、戦車に向つて挑戰的射撃を指し向けて見たが、何の效力もなく射弾が弾き返されるのを見るこゝ、兎のやうに地に俯してしまつた。進撃して來た戦車の爲に、機關銃は踏みつぶされてしまつたが、銃手丈は辛うじて無限軌道の蹂躪から逃れるこゝが出來た。

獨逸軍内に於ける戦車に對する恐怖狼狽の狀は、獨逸の一從軍記者が書いた次の一文によつて、よく知るこゝが出來る。

「…………腰を抄かした者のやうに、唯目を嗜張るばかりだつた。巨大な怪物は、或は跳るが如く或は搖るゝが如くしながら前進を續け、著々として獨逸軍に向つて迫つて來た。縦ひ何物を以てしても、之を阻止する方法はない。第一線塹壕にゐた一人の兵が之を見て「魔物がやつて來る」こゝ言つたが、此の言葉はまるで療原の火のやうな勢で、全戦線に擴がつて行つた」。

獨逸の高等統帥は困つてしまつた。緊急秘密命令を以て、慘虐ながらも效果的に認めざるを得ぬ魔物に對して、軍隊一般に最後の一人になるまで奮闘すべきこゝを布達するこゝ共に、直ちに各種の對抗策を講ずるこゝに着手したのだつた。

反對に、英軍の志氣は恐ろしく昂つて來た。最初鐵の塊のやうなものが無人地帯を匍つて行くのを見て、何か素晴らしいことを仕出來すに違ひないと思つた。虹の七色に塗り分けた横腹、彈痕へ出したり入れたりする不細工の鼻、閉ぢた臉のやうに見える二つの砲門、蛇のやうにうねる兩方の無限軌道、後に引張つてゐる奇妙な尾輪、恰好の悪いいこみ丁度何か喜劇の動物園からでも逃げ出して來たものでもあるかと思つた。

が、暫くして、五十七耗砲の咆哮し始め、機關銃がガタ／＼鳴り出し、濃密な鐵條網の中へ無造作に這ひ込み、頑丈な機關銃陣地を苦もなく踏みつぶして、歩兵が何の苦もなく死傷もなしに易々前進出來るやうにするのを見るこゝ、今迄の滑稽味は一散して、讚美と矜持の氣分が生じて來た。英國兵は獨逸兵に對して威張り返した。

「サア、毒瓦斯でも火焰發射でも何んでも持つて來い。戰車様は、そんなものはこゝても比べ物にやならねえんだ。今度こそは、戰車でもつて、貴様達にキリ／＼舞を踊らせてやるゾ」

一寸グロ味があり、動作も少々ノソソリしてはゐるし、足取りも餘り緊りしてはゐないが、歩兵の一番恐ろしがつてゐた鐵條網と鬼門の機關銃を、手取早く片付けてくれる戰友を、歩兵は見出したのである。

次の手紙は、英國屬領軍の一兵から、その家郷に寄せた手紙であるが、英軍内に於ける戰車に對する諧謔的な觀察を示す一例として掲載する。

「……Old mother Hubbard っか、その他色々な滑稽な渾名をつけてゐます。見懸けは丁度所作劇に出て來る馬か船のやうで、速度は遅いし乗組員は勿論見えません。ゴ／＼ブ／＼と謂ふ音を立てながら、豚か何かのやうに其の鼻をあちこちに突込みながら、道でも間違ひはしないかと思ふやうに時々止つては進み、進んでは止まる。

一番可笑しいのは、ノソ／＼してゐるこゝ、頭を不法に振つて時々止りながら咳でもするやうな恰好をするこゝです。私は十分許り見た丈けですが、戰場の端れの霧の中から飛び出して來て、また霧の中へ消えてしまふ。最後に見たときは、其の後に、凱歌をあげて行く歩兵を従へて、丁度河馬のやうに彈痕の漏斗孔へ入るこゝでした」。

英吉利の新聞には、戰線のずつと後方にゐた辯に、まるで自分が實見したかのやうな口吻で、いろいろな想像を交せて書いた從軍記者の、薄氣味の悪いやうなこゝめもない通信が掲載された。その記事によるこゝ、戰車は、家屋を打毀したり、大木を踏み倒したり、塹壕を埋めて平にしたり、凡そ何でも出來ないこゝめはない、と思ふこゝめだつた。

併し、流石に諧謔に富む英國人のこゝみ丈けあつて、このチャーナリスチックな誇大記事に對して、唯一人非難する者はなかつた。否、是に輪をかけたやうなこゝみをさえ云ひ合つた。ある一人の兵士は、自分の愛人に對して、次のやうに書き送つたのだつた。

「戦車は、まるで莫折器械が菓を束ねるやうに、捕虜を縛り上げてしまふ、輪轉機が紙を引いて來て、折つて勘定して、バラ刷りを造るやうに、獨逸兵を片附け、勘定を容易にする爲に三十人目毎に他の者よりも一寸遠く投げ出す。強情な奴に對しては、丁度料理臺で鳥の肉を刺すやうに、群る獨逸兵の眞只中へ飛び込んで行つて「やまあらし」の針のやうな刺を突き出して、之に獨逸兵を引懸ける。

戦車は有刺鐵線を噛んで銃彈を造る。走るこゝみには、尾で滅茶苦茶に斬りまくつて、樹木、家屋、大砲など、凡そ附近に有りこ凡ゆるものを薙ぎ倒して行く。

仰向きになるこ無限軌道で砲兵ミ榴彈を受け止める。其の上、潜水艇に化けるこゝみも出来る。イギリスからフランスへ渡るこゝみには、潜水艇になつて渡つて來たのだ。前進、後退、横這ひこ何の方向にも動ける。獨樂のやうに、否もつこ恐ろしい速さで回轉して、自分で穴を掘りながら其の中に匿れる。トンネルを掘つて地下に潜り、十里も先へ行つて地面の上へ姿を現す」。

こゝした驚異、熱狂、禮讚の裡にあつて、大した喜びも見せなかつたのは、戦車隊の者であつた。狭い鐵船の中に閉ぢ込められ、熱さに汗だくこゝなり、揮發油ミ火藥の臭で窒息しかけ、發動機ミ五十七耗砲の恐ろしい轟音に耳を聳され、アチラコチラ揺られ續けた彼等は、なまじ戦車に多大の期待が托されてゐたこゝみを知つてゐた丈けに、戦果を知つて失望してしまつた。

出發陣地へ到着した三十二臺の内、九臺は歩兵の先になつて突進し、敵は大損害を與へた。他の九臺は、遂に友軍歩兵に追ひつくこゝみが出来なかつたが、それでも據點の掃蕩には大功を樹てた。然し残りの十四臺の内、五臺は壕に落ち込み、九臺は發動機に故障を起した爲に駄目になつてしまつた。

元々、此等の戦車は乾燥した硬い地面上で活動するやうに造つてあつたのに、ソナムの戰場へ來て見るこ地形が全く豫想外であつた。地面は彈痕だらけで土は表面までハラ／＼に緩んでゐた。故障の原因は、設計が不適當で、起動輪や轉輪に思ひがけない破損を生じた爲であつた。乗組員の訓練も足らなかつた。補給や攻撃前進地區の偵察も十分ではなかつた。

何だか、一切の努力が水泡に歸したやうに思はれた。重大な秘密を、少し許りの戦線の推進ミ僅々何千人かの捕虜ミ引き換へに、暴露してしまつた。

豫期した大突破は、遂に敢行し得なかつた。其の機会を待ち構えてゐた騎兵は、再び後方の繫馬線へ残り惜しうに退つて行つた。

高等統帥がもう少し待つてさえ呉れ、ば良かったのだのに……。

「若し此の時に、一千臺の戦車を集團使用してゐたならば、獨軍の陣地線は、ボール紙ほどの抵抗力も示さないで突破されたのだ」。

こは、他ならぬ獨逸人自身の告白であつた。

然し此の攻撃は、必ずしも無益ではなかつた。戦車の活躍が、英國に新らしい希望を抱かせた。これ以來、英軍は、まさかの時には役に立つものを持つてゐる云ふ氣持になつて來た。戦車のお蔭で何千人かの命を救ひ得たこゝや、獨逸人を鬼のやうに追ひ立てた快味も味つた。歩兵の人々は「戦車こそ永い間その出現を待ち詫びてゐた武器だ。その防楯と衝角で、歩兵には餘り有難くない仕事を片付けて呉れる」と思つた。

之に反して、獨逸人の方では、今迄持つてゐたその無敵觀念に大きな罅が這入つた。世界無比を誇つた獨逸歩兵も、戦車の前に出ては無力に齊しかつた。自身自らで之を覺つた獨逸軍は、その後の攻撃を非常に恐れるやうになつた。

戦車隊の人々が、失敗だこばかり思ひ込んだのに引き換へて、總司令部では非常に喜んだ。戦車の活動に多大の感銘を受けたヘイグ元帥は、即時戦車一千臺を造るやうに注文した。

四 奮 戦

雄型戦車の武者振——泥——雪と氷

乗組員の大部が、未知不案内の状況の下で、速度も遅く不完全な戦車を以て活動しながら、第一回の戦車戦に偉勳を樹たこゝは、特筆すべきこゝであつたにも拘らず、勳章を授けられたものは隊員中唯一人だけであつた。

全英國の新聞が筆を揃へて戦車の勳功を賞め讃へたが、戦車隊の本部は沈黙を守つてゐた。是は、戦車戦の結果が思つたほゞでないこゝに失望した點も無論あるだらうが、昔から豫言が自國內で信ぜられなかつたこゝ同様に、戦車隊では敢て上申する程の功績を認めなかつた爲であらう。

前に述べた唯一の受勳者云ふのは、九月十五日のデルウィーユ森林東側に於ける戦闘に殊勳を表はしたスミス上等兵である。多數の勇敢な人々の内から、唯一人受勳の榮に預つた丈けに、スミス上等兵の手柄は拔群なものであつたに違ひない。此の上等兵は、斯くして戦車團中最初の紋勳者たるの

光榮を、擔つたのである。

が、間もなく、他にも光榮者が現れて來た。夫れは、九月二十六日に殊勳を樹て、歩兵をして戦車の威力に張目させた、D十四號戦車のストーレー少尉である。

第二十一師團が、グウーデクルの前面に在る當時ガード塹壕に引懸つてゐた時、第六十四旅團は惡戦苦闘の後、漸くにして此の塹壕線上約千五百米を隔つる二地點を占領し得たが、グウーデクルを占領する爲めには、さうしても此の塹壕全部を掃蕩しなければならなかつた。獨逸軍の確保してゐる部分には、優勢な兵が配置されてゐる上に、敵の堅固な鐵條網はまだ少しも破れてゐなかつた。

攻撃に任じてゐた第一百旅團長は、攻撃困難なることを知つて、戦車の援助を要求した。そこで雌型戦車に乗つてゐたストーレー少尉は、その夜、砲彈で滅茶々にされた地域を通つて進出した。

午前六時三十分、戦車は擲弾兵を後に從へて、前進を起した。ストーレー少尉は、鐵條網を衝き抜けるに方向を換へ、塹壕に沿ひ機關銃火を浴せながら前進した。獨逸軍は手榴彈を盛に投擲し且つ猛烈な機關銃射撃を注いで頑強に抵抗したが、少尉は逐次戦車を進めて、遂に、友軍歩兵が手榴彈を手にして待つてゐた處へ進出した。此の戦車の攻撃に殆ど時を同じうして、一機の飛行機が急降下によ

つて、敵の頭上から射撃を加へたので、獨逸兵は塹壕の南端に押しつめられてしまつた。

ストーレー少尉が展望孔から見るに、ハンケチを振つて降意を表してゐるので、後から續行してゐる擲弾兵に通知した。擲弾兵は直に前進して、將校八、下士官以下三百六十五を捕虜にしたが、我が死傷は僅に五名にしか過ぎなかつた。同少尉は更に前進を續けて、歩兵のグウーデクル攻撃に協力した。燃料が盡きたので、戦闘を中止して歸つて來た時には、乗員の中二人を除き他は全部重傷してゐた。少尉は此の戦闘に於ける勇敢に果斷によつて、武功勳章を授けられた。

此の行動は、一戦車が僅々一時間の間に八名の乗員のみを以て、長さ約千五百米の塹壕を占領して敵に大打撃を與へ、且三百七十名の捕虜を得たことを示したのであるが、是れは、歩兵一旅團を以て難戦苦闘三百の犠牲を拂ふにあらざれば、爲し得ぬ所なのである。

此の單一戦車の成功を知つた歩兵の將軍連は、戦車は二臺か三臺毎に一團として使用するがよいと謂ふ主張を持つやうになつたが、元來戦車は大數の集團使用を目的として造られたものであるから、右の將軍連の意見は、利益よりも、寧ろ多くの害を賣したのである。

冬になつてからも、戦車はその最も苦手とする泥濘に苦しめられつゝ、驚くべき活動を續けてゐた。

十一月二十四日、二臺の戦車は、ポーモン・アメル附近で敵の第一線陣地を通過するに直ぐ動かなく

なつた。豪勇な乗組員は、銃砲を以て敵に對戦を續けた。先頭戦車の車長は、斬壕内に白いもの、チラチラするのを認めたので、戦車が動かなくなつて困つた時ではあつたが、刃扉を開けて見るに、斬壕の内にある敵の兵ミ云ふ兵が、ハンケチ、布片、紙、其の他有りミ凡ゆる白いものを振つて降意を表してゐる。戦車はビクミも動けぬ上に、敵兵の数は四百人もあつたので、ミても二臺の乗員八名だけで處分は出来なかつたから、狂氣の如く友軍歩兵に信號して、友軍歩兵を呼び寄せ、戦車が故障を起してゐることを敵に覺られないうちに、捕虜にするこゝが出来た。

それから、作業隊を使つて二臺の戦車を掘り出し、無限軌道を修理しようとした。四、五時間もかかつて、漸く戦車を泥中から脱出させたが、地質が非常に悪るかつたので、些し前進しただけで又動かなくなつてしまつた。更に萬策を盡したので、漸く一臺だけは泥中を切り抜けて固い地盤の處まで出すこゝが出来たが、一臺は遂に駄目だつた。

脱出し得た一臺は、十八日に、ボーマン・アメル附近の當時三角點ミ謂はれた據點の攻撃を、命ぜられた。

此の時には、偵察掛のホットブラック大尉が、一晩中かゝつて、白いテープで進路の標示をしておいた。

折からの寒氣に、地面は霜の爲に岩のやうに固まつてゐた。乗組員は樂々前進出来るだらうミ、喜んでゐた所が、又もや不運に見舞はれるこゝになつてしまつた。夜があけて見るに、降雪の爲に、折角のテープの標識は跡方もなく埋まつてしまつてゐたのだ。

戦車の進出を待ち焦れてゐる歩兵を、失望させなければならぬのかミ氣遣はれた時に、ホットブラック大尉が、戦車を誘導しようミ申出た。非常な寒氣の中を、大尉は戦車の先になつて、雪ミ氷に閉された弾痕に遮蔽を求めながら敵の機關銃射撃を避けて、幸にも微傷も負はないで、戦車を三角點に誘導するこゝが出来た。戦車は直に射撃を開始し、大尉は後方に退つた。

同大尉は後退の途中で、歩兵が獨逸兵に喰ひこめられ、戦車に救援の信號をしてゐるのを見たが、別に信號の方法がなかつたのミ、彈雨の中を再び戦車の處へ引き返して、其旨を傳達した。戦車は直に回轉して大尉の後に續いたが、折柄風の方向が變り雪が解け始めて來た。今迄氷つてゐた地面は急に泥濘ミ化し戦車の運動を許さなかつたので、遂に此の攻撃は中止せざるを得なくなつた。

然し、是によつて、地形偵察なるもの、價値が重視されるやうになつた。それから後の戦車攻撃に當つては、この地形偵察を非常に重く見るこゝになつて來た。

戦車長は、専ら潛望鏡に頼らなければならなかつたので、非常に視界が狭かつたから、豫め行動地

域の状況を知ることは、非常に大切なことであつた。その手段としては、地圖や空中寫眞の研究を行ふと共に、努めて適宜の地點から行動地域を實現する方法に據つた。

又、進路の標識は、スウイントン大佐の發案であるが、凡ての戦車部隊で之を採用するやうになつた。

五 戦車の改造

缺點とその改善——マークII型——戦車隊の擴張——再び縮少

ソンムの會戦後、出征軍がイギリス本國に向つて、大急ぎで一千臺の戦車を注文したことは、既述の通りである。この注文は、毎月毎に出來たものをフランスの方へ送り、一九一七年の末までに、全部の注文數即ち一千臺を出征軍へ交附することになつた。また、新に造る戦車は、既往の實戰の經驗によつて知り得た種々の缺點を改正したものにするこゝになつて、當局者は之をマークII型と名づけるこゝにした。

第一に改良された點は、尾部にある車輪を省くこゝであつた。マークI型中、戦間間にこの車輪を

毀されたものもあつたが、それでも操縦上に何等の缺陷も生じなかつたので、之を省くこゝになつたのである。

其の他に就ても、技師達は様々の工夫を廻らせてゐた。

戦車が、地面上へ飛び出してゐて其の幅が狭く兩方の無限軌道の間へ入るやうな障碍、例へば木の株のやうなものを通過しようとするに、戦車の腹部が其上に乗上げてしまつて、無限軌道が地面から離れるこゝがある。斯様な場合にはそんなに發動機が廻轉しても、軌道が空廻するばかりで前進は出來ない。是はなか／＼適當な回避策が見當らなかつた。

また、戦車の一側が深い壕へ入り込むに、腹部が胸壁上に乗り、二十八噸云ふ重さで土を押し崩す爲に、だん／＼戦車の傾きがひどくなり、兩方の無限軌道共崩れてバラ／＼した土に觸れるに過ぎないから、戦車の進退は不可能になる。

泥地では、戦車が泥にはまるこゝが非常に多い。泥の中では無限軌道は地面を掘むこゝが出來ず、唯クル／＼廻るばかりで、戦車を移動させるこゝが出來ない。もがけばもがくほ泥の中へ深く沈む。之に對しては、一つの救済策が発見された。履板が緊り掘むこゝの出來るやうに靴を穿かせ、且戦車の上に長さ約二米ばかりの葉巻型の材木をつけておく。泥へはまり込むに、此の材木を鎖で兩側の軌

道に結びつけ、軌道の回轉に従つて之を戦車の下へ捲き込ませる。するに軌道は回轉の際に履板で此の材木の表面を掘むから、泥の中から這ひ出すことが出来る。

排氣管を戦車の後尾につけ、また静音器もつけられた。初めの戦車は背中へ焰を吐き出す爲に、その焰によつて自己の所在を敵に暴露したり、或は火事を起したりすることが屢々あつた。

色の濃い偽装用ペンキは使はないこととし、爾後目立たない褐色に塗り且偽装網を持たせることになつた。敵の空中偵察者が、戦車の投影によつて戦車を發見することが判つたので、之を防ぐ爲に網をすつほり被せて變装するのがよいことになつた爲である。

此の前の戦車は、無限軌道の轉輪や起動輪を鋼製にしてゐたが、其の壽命が非常に短かつたので、鑄鐵製に改めた。

戦車の構造上に種々の改良を加へる一方、乗組員の訓練に就てもいろいろの畫策が廻らされた。

機關銃團の第一、第二、第三、第四の各中隊はフランスで夫々大隊に擴張され、一九一六年の九月二十六日に、エルス大佐が司令官に任命されることになつた。ベルミクール附近の教習所へは毎週澤山の志願者が押掛けて來た。歩兵もあれば騎兵もある、航空兵、非戦闘部隊のものもあるし、甚しきは海軍からの志願者までやつて來るに謂ふ有様だつたので、人々は有名な音樂堂の喜劇役者の名をこ

つて、「フレッド・カルノーの陸軍」に云ふ渾名をつけた。

關係當局者の一人は、「野次馬正規軍」に渾名をつけた。此の頃の戦車團は、全く野次馬に違ひなかつた。至嚴に云ふ程の軍紀はなかつたが、併し恐ろしい熱心で死生を屁とも思はず、嘗て英國軍の歴史上に見られない程の獻身的努力に困苦缺乏に耐へる傳統を築き上げるに至つたのである。入隊者の大部分は、キチナー軍内からの志願者であつた。彼等にまつて、戦車兵への志願は二度目の志願である、第一回は市民から軍人へ、そしてまた今度の戦車兵への志願になつたのだ。兎に角、斯く多數の志願者を集め獲たことは、戦車の爲に誠に幸運であつたこと云はねばなるまい。

前から戦車に乗つたものが教官になつて、機關銃、五十七耗砲、運轉、構造、其の他の課目を大馬力で進めて行つた。フランスの方には十分な戦車がなかつたので、木製の模型を造つて六人の兵卒に擦がせて、教練をやる中隊もあつた。六人十二本の足で動いて行く珍妙な型の此の模型は、時々轉覆して、見てゐる者を大笑ひさせた。

四箇の大隊が、夫々七十二臺(其の後半減されて三十六臺になつた)の戦車を持つことになつてゐた。エデンの附近に二十四エーカーの地を卜して、工場、倉庫、車廠などを建て、支那人夫五百人を常時使役した。

イギリス本國では、テトフォードに在つた施設を、ドルセット州のボヴィングトンに移した。ウールの町近くの淋しい荒原を戦車の運轉や演習の爲に使用することにしたり、以前の第五、第六の二中隊を五大隊に擴張したり、補助材料廠を造つたりした。

一千臺の注文が、一千二百五十臺に増加された。大藏省で早速承認したので、發動機、装甲板、銃砲などを造る工場を擴張した上に、戦車製造工場が新設された。

かくて、種々努力の結果、愈々戦車工場が動き出した時に、突然、全作業の停止を云ふ途方もない命令が下つたのだつた。それは一九一六年十月十日に、陸軍參議院が一千臺の戦車の注文を取消した爲めだつた。

是が、戦車に對する陸軍省の無分別な抗争の第一歩で、之が爾來一九一八年に至るまで、幾度か繰返されて、毎に戦車團の存在を脅したものだつた。

この注文取消は、T・Y委員會にまつては、誠に晴天の霹靂であつた。スターン中尉は早速陸相ロイド・ジョージ氏に

「既に發した注文を取消すことは到底出来ることではない。小官は、そうするよりは、寧ろ辭職させて頂き度い」

を訴へた。陸相も事の意外に驚いて、至急取調の上回答することに約した。

その翌日になるに、一千臺の戦車の注文は復活することになつた。第一戦は先づ陸軍省の敗北に終つた。併し其の返報は靨面であつた。光榮ある戦車思想を戦車戦術の創始者たるスウィントン大佐は、榮轉なる美名の下に敬遠されて帝國國防委員に移され、T・Y委員會を離れることになつた。

露、佛、白の諸國から、英國政府に戦車の供給方を申込んで來た。露國では設計圖を送るやうにこの事であつたが、同國には戦車の製造設備がなく設計圖の必要を認めなかつたから、委員會では獨逸に利用されるの嫌疑濃厚なりを見て、多忙で其の餘裕なき旨を陸軍省へ回答した。が、陸軍省の情報部から執拗く要求して來るので、杜撰極まる子供だましのやうな設計書を準備して、露西亞へ送らせたものである。

此の頃、戦車委員會の事務所へは、世界各地から色々な通信が山のやうに寄せられた。その中には、戦車の缺點改良に關する意見もあれば、戦車のほんこの發明者は自分である云ふやうなものもあつた。中には随分滑稽なものもあつて、重苦しい委員會の空気を緩和してくれたものだつた。

六 アラス會戦の戦車

敵線突破——長蛇を逸す——ルシタニア號の復讐——吹雪
 中の戦車戦——友軍彈幕の犠牲

一九一六年の十二月にフランス戦線に在つた戦車中、練習教育に使ひ得るものは僅に十六臺に過ぎず、其他は孰れも不完全なもの許りであつた。一九一七年の五月末になつて、アラスの會戦に使用する爲集中し得た數も六十臺に過ぎなかつた。併もその大部は、舊式戦車を修理したものや軟鋼板で裝甲した練習用戦車で徹甲彈の侵徹を防ぎ得ないもの等が占めてゐた。未だ、將校以下の訓練も十分行届いてゐなかつたが、アラスの會戦には、戦車二大隊を参加させることになつて、一月になるに其の準備が始められた。

戦車攻撃に於ては、各戦車に燃料油と彈藥を十分に補給してやることが、一番大切だつたので、四箇所の集積所を作り、之に燃料油十萬立を始め各種の補給品を集積した。是等の大量の補給品は、凡て臂力で端末停車場から集積地まで運ばなければならなかつたので、非常な作業となり、歩兵一千名を使つて數週間を要した。

戰場へ到着した戦車は、舊要塞の一部分であつた砲臺中に匿しておいた。此處に入れて緑茶茶褐の偽裝網を被せて置くに、輜の目鷹の目で搜索してゐる獨軍の飛行機に對して、發見されないで済んだ。アラス地方の地下は、廣大な白堊の採掘地になつてゐたので、歩兵は其の隧道の中に匿れて、獨逸軍の砲撃を受けないで氣樂に過すことが出来た。また、佛軍側から此地方の下水計畫を貰つて、是を掘り擴げて採礦隧道に結び、電燈をつけたり道標を設けたりしたので、此の地下掩蔽部は歩兵三師團を安全に匿ふことが出来るやうになつた。

四月四日に開始された猛烈な砲撃は、其の後四日間に亘つて続き、此の間友軍の飛行隊は絶えず敵の飛行隊に對して攻勢を採り、以て敵機の寫眞偵察を妨害して友軍の移動を秘匿した。激烈な空中戦をやつた譯でもないが、良く敵飛行機を我が陣地内へ進入させないことに成功した。此の間に敵の飛行機六十機を傷け又は墜落させたが、英軍も亦四十八機を失つた。

四月八日は快晴であつた。砲撃が一寸絶間を見せたので、全線には氣味の悪い静寂が漂つた。やがて夜に入るに、天候が急變して、突然車軸を流すやうな豪雨となり、再變して雪になつた。

英軍の砲兵陣地も静かで、時々思ひ出したやうに砲聲が聞える許りであつた。暗黒に乗じて前線への進出を企てた一團の戦車が、悲しむべき運命に遭遇した。捷路をこらうとし

たが土地の具合が不安なので、瀧木と枕木で修理してから其處を通つて柴地へ出たのであつたが、半分ほぎ通つたときに一見堅固らしかつた柴地が戦車の重みで沈下した。その下は粘土質の沼地であつた。六臺の戦車が見る／＼内に沈んで行く。

拂曉歩兵に追及するこゝになつてゐたので、乗組員は死力を盡して泥から脱出させやうとした。漆のやうな暗ではあり、風は荒れる、おまけに雨は凄まじりになつて来た。獨逸軍の砲弾が英軍の彈藥集積所に命中した爲めに、山の崩れるやうな轟音と同時に火山のやうな焰が揚つた。

乗組員の努力も役に立たなかつた。必死の思ひで漸く戦車を地面の固い處まで引き出した時には、もう豫定の時間を逸して此等の戦車は攻撃には参加出来なくなつた。

午前四時、静まりかへつてゐた友軍砲兵は再び猛烈な射撃を開始した。戦車と歩兵は篠つく豪雨を冒して前進を開始した。

加奈陀兵は午前九時になつて、難戦苦闘の後、有名なウイミーの稜線を全く占領してしまつた。此の高地の攻撃に協力する爲め派遣された八臺の戦車は、砲弾に耕された上雨に蔽かれた地面が戦車の行進を許さない爲に、遂に戦闘に参加するこゝが出来なかつた。

併しながら、第三軍の正面に使用された四十臺の戦車は廣正面に分散使用されて、歩兵に有力な支

援を與へるこゝが出来た。濃密廣大な鐵條網を蹂躪し敵の機關銃を押し潰して、突撃部隊に長さ約一軒に近い敵の堅固な據點陣地——ハーブの據點陣地と呼んでゐた——を占領させた。ジョン・ブーチャン氏は其の著世界大戦史に此の時のこゝを、「ソナム會戦の初期ならば、此の陣地は吾人に一箇月以上を空費させたらう」と書いてゐる。電信山と謂はれてゐたもう一つの據點をも通過して、英軍は獨逸の第二線陣地に殺倒し、更に第三線陣地にまで衝き込んだ。

天候を除けば、萬事が徹底的突破に洩向であつた。獨逸軍は人手も少く數も少い機關銃陣地に據つて、之も疲れ切つた英國兵を辛うじて喰ひ止めた。この時に速度の速い輕戦車を假令一中隊でも前進させるこゝが出来たならば、敵の最後の防禦線を突破し得て、既に一九一七年の四月に獨逸を屈服させるこゝが出来たであらう。

だが、惜しいこゝには、輕戦車は當時イギリス本國の工場で試験の最中であつたので、戦争は其の後更に恐ろしい流血と破壊の十九箇月の経過を辿らねばならなかつた。

マークII型戦車の手柄話はいろ／＼あるが、其の内でも面白いのは、ウェーバー中尉の指揮したルシタニア號（一九一五年五月七日愛爾蘭沖で獨逸の無制限潛艇戦の犠牲となつて爆沈した巨船の名をこつてつけた戦車である。汽船ルシタニア號は乗客船員を合せて一千百九十八名の犠牲者を出し、其の

内に百二十四人のアメリカ人がゐた爲に、アメリカの参戦を見るこゝになつた。この獨逸潛航艇の暴虐な行動は當時文明世界に大恐怖を起させたのであつたのである。

もう〇時（攻撃開始時間を指す）だ云ふのに、二次齒輪に故障を起したので、戦車長のウェーバー中尉は氣が氣でなかつた。一生懸命で修理に努めた結果、三時間を費して漸く行動出来るやうになつた。前進に移るに同時に、歩兵聯隊長から「聯隊は敵の機關銃の爲に喰ひ止められてゐる。至急制壓せよ」云ふ急報を受けた。ルシタニア號は火を吐く敵の機關銃陣地に向つて接近し、五十七耗砲の火蓋を切つて、直に此の機關銃を沈黙させた。

躑て歩兵が前進を起したので、ルシタニア號も直後に續いて行つた。鼻先を敵の塹壕の胸壁上へつき出して射撃しようと思つたが、直前を友軍の歩兵が前進中なので危険で射撃を開始するこゝが出来なかつた。然し塹壕内に居た、獨逸兵は、戦車が自分の頭上に向けてすぐにも射撃しそうな態度を見せたので、両手を高く舉げて降参した。

ルシタニア號はフーシー角面堡に對して、五十七耗砲の機關銃の射撃を加へながら、鐵道線路に沿ふて前進した。獨逸兵は戦車の接近を待たずに同角面堡を捨て、鐵道のアーチ附近の地下構築物の中へ逃げ込んで仕舞つた。ルシタニア號は直に追つてアーチに迫つたが、急進の餘り戦車長が標識を

見誤つた爲に、英軍砲兵の彈幕の中へ飛び込んでしまつた。後から後から榴彈の降つて来る彈幕の中だから、一分居ても味方の砲兵の爲に息の根を止められて仕舞ふので、急旋回をして逃げ出し歩兵線まで後退した。それから更に直出して、歩兵が獨逸兵を地上掩蔽部の内から狐を追ひ出すやうに狩り出して来るのを待つてゐた。

やがて前進に移るに、今度は高い堤防に出會つた。先程からの運轉で發動機が過熱し、ミても堤防の急斜面を上るこゝが出来なかつたので、ウェーバー中尉は發動機を停めてその冷却を待つこゝにした。揮發油の臭に酔ひ連續の活動に身體を休める暇もない上に、車内の高温でヘトヘトになつてゐた乗員は、戦車を停めるや否や車外へ飛び出して身を地上に投げ、倒れるやうにして眠りを食つた。發動機の冷却するのを待つて中尉は睡つてゐるものを選び起し、斜面を登つて速度を速めて再度戦場へ飛び出した。歩兵を追ひ越して鐵條網を通り抜け、銃砲火を浴びながら更に次の角面堡から敵を驅逐した。

それから暫くするに、また歩兵からS・O・Sの信號が飛んで來た。ルシタニア號は之に應じて直ちに敵の塹壕に迫つて之を掃蕩した。此の頃は、流石勇猛の戦車も疲勞困憊全くその極に達し、燃料は盡きマグネットも具合が悪くなつたので、遂に動かなくなつてしまつた。乗員は尙ほ勇戦を續け、射

撃によつて敵に大損害を與へた。

暗黒が迫つて來たが、戦車は擱坐したまゝで動けなかつた。發動機はこても息を吹き返しそうもない。獨軍の銃弾は緩のやうに装甲板に當つてゐる。小さな電燈をつけて、何回も何回も始動ハンドルを廻して見るが、何の效目もなかつた。光が銃眼や其他の隙間から漏れるので、獨逸軍からは之を目當にして益々盛に射撃を送つて來る。

銃弾の鉛の飛沫が餘りひびくたつたので、電燈は消してしまつた。此の時が丁度午後九時三十分だつた。ルシタニア號は朝來實に十二時間の難航を續けて來たのである。燃料油槽は最早カラ／＼になつてゐるので、ウェーバー中尉は戦車を放棄して、乗員だけ友軍の陣地線へ後退することに決心した。第一に何の方向が友軍の陣地線であるかを探らなければならぬ。勇敢な戰士達は、今自分が敵の眞只中に包圍されてゐるのか、それとも敵の居るのは前面ばかりなのかさえ知れなかつたのである。するに、レーサム軍曹がその偵察を志願した。

この軍曹は此の日の晝にも非常に勇敢なこゝをやつてゐた。無限軌道に引絡つた有刺鐵線の爲に、偽裝網が排氣管の出口の處へ引張られて來て燃え出した時に、レーサム軍曹は命令も待たないで戦車の外へ飛び出して、雨霰を降つて來る敵の機關銃火を冒しながら戦車の背中へ這ひ登り、燃える偽裝

網を下へ投げ却して歸つて來たのだつた。

軍曹は、砲塔部の扉をあけて靜に闇の中へ匍ひ出した。頭の上には彼我兩軍の砲弾が飛び交つてゐる。見當をつけて漸くある塹壕に近づき耳を澄ますに、英國兵の聲が聞えた。小聲で聲をかけ、返事を待つて、胸墻を飛び超え素早く壕内へ飛び込んだ。壕内にゐる者は驚いた。丁度守備を交代したばかりだつたので、前方に戦車の出てゐるこゝなごは勿論知らなかつた。軍曹が「戦車の乗組員がすぐ歸つて來るから射撃するな」と謂つたので助かつたが、軍曹が氣をきかせてこう謂つて置かなければ、交代したばかりの守備兵は獨逸兵の夜襲を間違へて戦車兵を撃ち殺したかもしれなかつた。

翌る朝、ウェーバー中尉は無事に戦車を牽き戻さうとして、新しいマグネットを持ち乗員中の一部の者を連れて、昨夜置き去りにして來た戦車の處へ出懸けて行つた。

その途中で一人の砲兵中隊長に出會つた所が、その中隊長が戦車のこゝを熱心に訊ねるので、よく聞いて見るに、ルシタニア號のこゝを知らなかつたため敵の戦車を思つて猛射を浴せ、破壊してしまつたに云ふのであつた。併し乗組員が内部に居なかつたに聞いて、大に安堵の態であつた。

勇敢なルシタニア號は、その處女航海に於てかくして破壊されて仕舞つた。併し戦車長以下勇戦奮闘、よく此の戦車の名親である處の巨船ルシタニア號に加へた獨逸潛航艇の暴虐なる魚雷攻撃に對す

る復讐をなし得たのである。此の勇猛果敢な努力に對して、ウェーバー中尉は十字勳章を、レーサム軍曹は軍事勳章を授けられた。

一九一七年の四月九日は、前に述べたルシタニア號の冒險にもまして重大な事件があつたので、一層記念すべき日であつた。

第五軍に協力してゐた十一臺の戦車は、四月十一日にビュルクールに對する攻撃を命ぜられてゐたが、九日に突然準備砲撃も行はないで攻撃實行を命ぜられた。戦車が獨軍の第一線陣地に達したならば彈幕射撃を始めて、戦車の後から前進する歩兵を掩護しよう云ふ計畫であつた。

戦車を廣い正面に分散せず狭い正面に集め準備砲撃を省略して行ふ急襲的攻撃の思想は、此の時が最初であつて、爾後に於て行はれた急襲戦法の濫觴である。實に戦史上に一時期を劃したものと謂ふべきであつた。

結局四月十日の朝攻撃を實行するこゝになつたが、戦車は出發陣地へ向ふ途中で、烈しい吹雪に遭つた。非常にひさい吹雪で、先頭戦車の運轉から、すぐ前二、三米の處に居る誘導將校の姿も見えぬ位であつた。戦車縦隊の行進は遅々として進まなかつた。折角立て、置いた道標は倒されて影も見えず、風は愈々募つて來た。盲同様の戦車がいくら焦つても前進は中々捗らなかつた。遂に夜明けにな

第四圖

砲彈を濫用して敵陣内に戦車を戦車



つても、出發陣地に就くこゝが出来なかつた。その上乘員もヘト／＼になつてゐた。結局、戦車の到着を待つてゐた壕洲兵が集合地から引き返した爲に、此の日の攻撃は延期するこゝになつた。

その翌る日は、例によつて砲兵が掩護射撃を行ひ、拂曉になるこ先づ戦車續いて歩兵が前進を起したが、攻撃は失敗だつた。

眞白な雪の上を進む黒ずんだ戦車の色は、戦車の輪廓を餘りにも鮮かにしたので、敵の集中射撃を受けて忽ち命中破壊した戦車が九臺も出た。それ許りではなかつた。戦車に續いて進んで行つた歩兵は、雪が深い爲に、動もすれば戦車の軌跡に牽きつけられて其跡を辿り勝であつたので、有利な目標を呈し、是亦大損害を受けた。

ある戦車は前面の装甲板に敵弾を受け、内部へ侵入した砲弾が運転手の頭を吹き飛ばした上發動機に命中したので、戦車の中は異臭と火焰と脳味噌で一杯になった。戦車長は昏倒し伍長は重傷した。残った乗員がやつこのこゝで外部へ逃げ出すと、其の瞬間に戦車の背中へ恐ろしい音と共にもう一弾が命中した。

他の一戦車では、一砲弾が燃料油槽(マークII型の燃料油槽は戦車長席と運転手席との間にあつた)に命中した。油槽は直ぐに一面の焰と化したので、戦車長と運転手は不動様のやうになつて焼き殺された。荒れ狂ふ戦車の中から脱出するこゝの出来たのは、軍曹と兵二名だけだつた。

第三のある戦車には二發の敵砲弾が命中した。乗員は全部負傷し、戦車長は脚部に重傷を受けたが全員頑張り續けて彈藥の盡きるまで戦闘を續続した。彈藥が盡きたので後退しようとした戦車長が、車外へ一寸出て自分の戦車の損害状況を見てゐる處へ敵弾が飛んで来て、車長は復もや脚部に負傷した。自分で應急手當をして戦車から這ひ出した乗組員は、跛をひきながら車長を肩にかけて、動かなくなつた戦車を離れた。その途端に、連續數彈が戦車に中つたので、戦車は火事を起した。車長を肩にかけて乗組員は危い處で命を助かつたが、不運はまたく彼等につき纏つてゐた。繃帶所へ到着するこゝまたく執念深い敵の砲弾がすぐその傍で破裂して、戦車長は同じ日に三度目の負傷を脚部に蒙つたのだつた。

ある戦車は藪地にビュールクルの村落に突入して、すぐに村落内の掃蕩にかゝつた。小銃彈や機關銃彈は雨のやうに注がれるし、破壊された家屋の蔭からは手榴彈が雨のやうに降つて来た、戦車の方で氣がついて見るに、後には英軍の歩兵は續行してゐない、戦車は全く孤立してしまつてゐた。村の中央附近で大きな彈痕に打突かつたので、運転手は一旦戦車を止めて逆行しようとしたが、運の悪い時は仕方のないもので、戦車は二次齒輪に故障が起きた爲めに停つてしまつた。

之を見た獨逸軍は、早速一門の野砲を持つて来て毀れた家の蔭に置き、手の届くやうな距離から戦車に射撃を加へた。

戦車はさうしても動かなかつたし、彈藥も盡きたので、今は唯敵砲彈の爲に粉々に粉碎されるのを待つ許りになつた。絶體絶命の戦車長は遂に戦車を捨て、後退する決心をこつた。二銃のルイス機關銃を取り脱して部下に携帶させて車外へ出た車長は、一歩々々血路を開いて後退し、遂に壕洲兵の居る處まで退却するこゝが出来た。

一組になつた二臺の戦車が、一隊の壕洲兵を後に從へてヒンデンブルグ線を見事に突破し、意氣揚々ミハンデクルの村落へ突入した。此の一團が更に塹壕線の後方八軒も離れてゐるリアンクルの

村落に向つて開闢地を進んで行つた。こゝだけは、飛行機の報告によつて判つたが、其の後の消息は不明となつてしまつた。獨逸軍の猛烈な逆襲の爲に遂に退路を遮断されたものらしい。

此の日の攻撃に失敗したこゝは、甚だ不幸な結果を招くこゝになつた。それは、薩洲兵が損害の大きかつたこゝや攻撃の失敗したこゝなき凡ての罪を戦車に轉嫁し、爾後戦車に事を共にするを肯じなくなつたこゝである。その後一年を経て漸く薩洲軍は再び戦車に行動を共にするやうになつたが、此の時には曩の戦車に對する嫌焉の情は讚嘆賞美の聲に一變してゐたのである。

此の會戦中、獨軍の手に始めて二臺の戦車を委したこゝは、更に悪い結果を示すこゝになつた。鹵獲戦車をすつかり調べ上げた獨逸軍は、マークII型戦車の側面装甲が徹甲弾に侵徹されるこゝを發見した。(敵手に委した戦車は二臺共教育用車であつた爲、その側面装甲に軟鋼板を用ひてゐたを謂ふのが、實情であつた。)そこで爾來獨逸軍では、歩兵は各人毎に五發宛、機關銃は毎銃二、三百發の五彈(獨逸軍の徹甲弾)を携行させるこゝになつた。

四月十一日には三臺の戦車が、小高い丘の上にあるモンシー・ル・ブルーに云ふ村落で、不思議な運命に遭遇した。

此の日は午前五時に攻撃開始の豫定で、六臺の戦車が之に参加するこゝになつてゐた。又騎兵一旅團もその近傍に在つて突破の機會を窺つた。夜暗を冒して出發陣地に向つた六臺の内、二臺は途中で故障を起したが、他の四臺は出發陣地に就いて所命の時刻に攻撃前進に移つた。

一臺が泥にはまつてしまつたが、残りの三臺は雪の降つてゐる無人地帯を突進をつづけた。最初の計畫では、砲兵の彈幕射撃に連れて前進する豫定であつたが、中々砲兵が射撃を始めないので、變だなき思つた。戦車に隨行する筈の歩兵も前進の氣配はない。前進中友軍の煙霧線を見ても、前進しそくな有様も見えなかつた。

やがて拂曉の空は白みかけて來たので、戦車の姿は白雪の上にはつきり見えるやうになつたが、彈幕射撃も歩兵の前進も始まらない。グズ／＼してゐるに却つて危いので、三臺の戦車は歩兵の前進を待たないで行進を繼續する決心を採つた。マンシーの村にゐた獨逸兵を驅逐し更に村の前端まで進出した。この時に歩兵がついて來てゐれば、此の村は僅か二中隊位の歩兵で樂々占領するこゝが出來たのである。

英軍の戦車に歩兵が續行して來ないに知つた獨逸軍は、急に勇氣を快復したやうに、穴倉や地下掩蔽部から這ひ出して來て、戦車の通り過ぎてしまつた村落を再び占領してしまつた。

一旦マンシーの村端れまで出た戦車は、同村へ再び獨逸兵の進入して来たのを見るに、すぐ取つて戻して戦つたが、今度の獨逸兵の抵抗は頑強であつた。家の窓からは手榴弾が、戸口からは機關銃が火を吐いた。敵は一臺の戦車を包圍して燒夷手榴弾を以て攻撃し、戦車に火事を起させて乗組員を煙で車外へ追ひ出さうとした。銃手砲手共に全部負傷したり戦死したりしたが、勇猛な車長は前方機關銃で應戦しながら血路を開いた。

斯くの如くして、全く歩兵の支援を受けない三臺の戦車は約一時間半に亘つて同村落内で善戦した。二度まで敗退させられたが獨逸軍もさるもので、三度マンシーの村落の前端に現れた。戦車が又もやこの敵に向つて攻撃を開始した時に、英軍砲兵がこれに對して彈幕射撃を開始したので、哀れ三臺の戦車は友軍砲兵の射弾の爲に遂に全滅させられてしまつた。

こんな行違ひを起した原因は、歩兵と戦車の間の連絡が悪いところに在つた。攻撃開始時刻を豫定よりも二時間遅らせるやうに攻撃計畫の變更されたことを、戦車に知らせなかつた爲であつた。

誰の失態であつたか其の邊はよく判らなかつたが、誰かに大きな手落ちがあつたのである。此の時の彈幕射撃は非常な激烈なものであつたので、一臺の戦車の如きは文字通り粉碎されて、影も形もなくなつてしまつた。

彈幕射撃につれて、程なく歩兵が攻撃を開始した。然し僅か二時間前に、たつた三臺の戦車で易々占領された村落を、非常な難戦苦闘の後に多大の犠牲を拂つて、漸く占領するこゝが出来たのである。

待機してゐた騎兵も舊式な襲撃をやつて見たが、敵の鐵條網と機關銃に喰ひこめられて、無駄な損害を生じたばかりで、混亂の裡に退却するより外に途はなかつた。此の戦闘によつて、鐵條網の後方に配置された豪毅な射手の操縦する一機關銃は、能く一旅團の騎兵を撃退し得るこゝを知つたのである。

五月三日には、非常に堅固なビュルクールの敵陣地に對して再度の攻撃を實行した。戦車八臺が之に参加し、歩兵の先頭に立つて敵の頑強な抵抗を排しながら攻撃目標に到達し得たが、何分にも歩兵が之に限隨して行けなかつたので、大部の戦車が後退するの止むなきに立到つた。

獨逸側では、是迄の教訓によりて、大規模の對戦車防禦を準備してゐた。戦車の姿が見えるに非常に歩兵の志氣の沮喪するこゝを知つた獨逸の高等統帥は、戦車は徹甲彈によつて容易に貫通し得るこゝや、手榴弾、機關銃或は重壕臼砲の猛射を加へれば容易に戦車の戦闘力を奪ふこゝが出来ると云ふやうなこゝを、部下軍隊に對して大々的に宣傳したのだつた。



不幸にも此の攻撃に参加した戦車は、軟鋼板で装甲したものの許りであつたので、乗組員の負傷が非常に多かつた。また最初戦車に搭載した取扱便利なホチキス機関銃も不便なルイス機関銃に取り換へられてゐた。是はセント・オーマーのルイス機関銃學校の出身將校の意見であつて、此の男がルイス機関銃萬能を主張したのであつた。戦車の経験者はルイス機関銃は、その外被套の破損し易いこみや形が大きすぎて銃眼に入れて使ふのに都合の悪いこまなごを舉げて反對したが、この意見は採用されなかつた。其の後マークIV型戦車にも此のルイス機関銃が載せられたが、爾來幾度かの戦闘が凡てルイス機関銃の不適當なるこまを示した後になつて、漸くホチキス機関銃を使用するこまになつたのである。

このビュルクールの戦闘中のこま、敵の徹甲弾の雨の中へ飛び込んで行つた一戦車では、側面装甲を貫通して入つて來た敵弾の爲に戦車長と兵四名が傷いた。六銃の機関銃の内五銃までが銃身を破断されて役に立たなくなつた。戦車も思ふやうに動かなくなつたので、乗組は止むなく車外に脱出して附近にあつた弾痕に逃げ込んだ。之を見つけた獨逸兵は彼等を機関銃で猛射したが、戦車長は戦車から脱して來た一挺の機関銃で應射しながら、弾痕傳ひに英軍の塹壕まで逃げ歸つた。

他の一戦車の乗員は、任務に對する獻身的努力の最も顯著な事例を示した。ビュルクールで非常に頑強な獨軍の抵抗を受けた此の戦車は、車長と乗員四名が負傷してしまつたので、残りの三名で運轉、射撃なご一切の動作をやらなければならなくなつたので、戦車長は一旦出發陣地に戻つて、負傷した四名の部下を交代員に代らせようとした。下車交代を命ぜられた運轉手は、「私は戦車に運命を共にしたい。身體の動く限りは下車交代なごは出来ません。車長殿が負傷した身體で戰場へ引き返すなら私も一所にお連れ下さい」と云つて聞き入れないので、車長も遂に此の運轉手——槍騎兵伍長ウァーターリッヂ——に運轉手席に残るこまを許可した。

之を聞いてゐた負傷の照準手アンダーソン上等兵も黙つてゐなかつた。上等兵は鉛の飛沫を浴びて片目が利かなくなつてゐた、片目が利かないでは射手は務らないから、前の運轉手の場合には大分狀況が違つてゐるのである。つまり彼には權利を主張する資格はない筈だつたが、戰場へだけは連れて行つて貰ひたいと懇願した。車長は何しろ装甲板の抗力が足らないのだから、何時弾丸が飛び込んで來て残つた片目を奪ふかもしれないと言つて慰めたが、「それは素より覺悟の前です。だが、假令ごんなこまにならうとも、戦車から離れるこまだけは勸辨して下さい」と言つて下車を肯じないので、遂に願意を聞き届けられたのであつた。

斯くして此の戦車は再びビュルクールの戰場へ引き返した。片目ながらも射手は幾度も幾度も弾倉

を交換して射撃した。車長も多少心許なく思つたので、指揮に一層氣を配り勇敢巧妙な戦闘指導に努めた。運轉手の運轉振りには負傷前にもまして鮮かだつた。かくして鐵條網、機關銃などの蹂躪制壓に努めるこゝに實に七時間の後、疲れ切つて再び出發陣地へ辿りついた時には、全乗組員が負傷して車内は鮮血に染まり、銃弾は一發も剩つてゐなかつた。

全乗員が餘程の勇氣と決心に満ちてゐなければ、同じ日の内に二度までも、こんな惡戦苦闘を繰り返すこゝは出來ない。車長のナイト中尉は十字勳章、ウォーターリッチ伍長は軍事勳章、アンターソン上等兵は武功勳章を夫々授賜されたのであつた。

戦車に關する限り、斯くしてアラスの會戦は終末を告げた。使へる程の戦車を皆掻き集めて纏めた六十臺の戦車を以て編成された戦車二大隊の内、一大隊は一臺の戦車も残さなかつたし、他の大隊も極く僅かの戦車を残した丈であつた。勿論奇蹟と云ふ程の戦績を示すこゝは出來なかつた。二、三臺毎の小部隊に分れて、堅固な機關銃陣地の破壊や鐵條網の突破などに使はれたに過ぎなかつた。

高等統帥はまた戦車の偉大な能力を看取するこゝが出來なかつたが、流石にヘーグ元帥丈は眼にもそれを知つてしまつた。元帥は一九一七年の四月二十四日に、「一師團の戦車は十師團の歩兵に値する。偉大なる生命救助者なる點に於て、戦車は飛行機に亞ぐ重要兵科である」と戦車製造の衝に

當つてゐたスターン大佐に語つたこゝを謂ふ。

行違ひではあつたが、三臺の戦車がモンシールブルーを占領し得たこゝは、戦車は準備砲撃を行ふこゝもなく奇襲的に併も集團して使用するのが有利であるこゝの實例を示した。歩兵との協同連繫を一層密接にすべきこゝの必要も明瞭となつた。蓋し戦車には塹壕や村落等を占領する力はあつても、之を維持確保する能力に乏しかつたからである。

戦車隊の死傷は非常に高率を示した。然しソナムの會戦に比すれば、その成果も亦顯著なるものがあつた。乗組員の訓練も高まり、従つて故障の發生も減じて來た。又乗組員は戦車から期待し得る處を十分に知り又目的達成の爲如何にすべきやをもよく知り得るこゝが出來た。

本國の方では、新聞紙が戦車の功績を餘り大袈裟に報導し、併もそれが新聞記者の知る筈のないやうな細部のこゝまで書き立ててゐたので、出征軍の陣中では色々な笑話の種子となつた。此の會戦中戦車隊の人々が、戦車の能力の最大限を發揮しようとして固い決心を抱いて戰場に臨み、將校以下兵に至るまで死生の巷に於ても毅然とした精神を持してゐたこゝは、嘗て戦車兵に對する輕蔑的呼稱であつた「野次馬正規軍」を云ふやうな言葉を消滅させるに十分であつた。

アラスの會戦直前に、各戦車長に對して戦車戦闘記録票に各自の戦闘經過を記録するやうに定めら

れたが、次に示すものは其の一例である。

第十乘組班戦闘記録

- 一、戦車番號 第七八四號
- 二、年月日 一七年四月二十三日
- 三、戦車長 G中尉
- 四、配屬部隊 歩兵第九十八聯隊
- 五、攻撃開始時刻 午前四時四十五分
- 六、戦車の戦闘加入時刻 同右
- 七、敵の砲撃状況 當初の三時間は激烈ならざりしも、三時間目より以後戦車が攻撃後の集合地に至るまでは至烈を極む。
- 八、弾薬消耗状況 對戦車砲兵の直接照準射撃に遭遇せり。五十七発砲弾二百九十發、残餘は弾藥架故障の爲採り出すを得ず。

機關銃彈藥八箱

- 九、死傷者 なし。
- 十、戦闘後に於ける戦車の位置 正午十二時、クライシーユ工場
- 十一、戦闘後に於ける戦車の状態 良好なり。但し燃料及脂油の補給を要す。
- 十二、受領せる命令 英軍陣地線上 F4.b45 の出發陣地よりヒンデンブルグ線上 F6.a05 に向ひ前進すべし。歩兵は F6.a05. 地點よりヒンデンブルグ線(第一線重壕及第二線重壕)に沿ひサンゼー河上 N7.a44. 點に向ひ攻撃前進す。戦車は先づ歩兵の攻撃を援助し前記サンゼー河上の攻撃目標を奪取せば爾後クロアジューに向ひ前進すべし。
- 十三、戦闘經過の概況

攻撃開始時刻と共に F4.b45. の出發陣地を出發しヒンデンブルグ線上 F6.a05. に向ひ出發す。

該地點を蹂躪したる後歩兵と連絡せしに、歩兵は敵の機關銃により阻止せられある旨の通報を受く。即ち直に前進して之を排除せり。爾後塹壕線に沿ひて行動し N.1.0.5.0. 地點に至る間の機關銃陣地及狙撃銃坐を破壊す。此の間歩兵は終始戦車の直後に續行し戦車が機關銃陣地を破壊するや其の内部に在りし敵兵を捕獲せり。但機關銃陣地の内二箇は我が射弾命中するや白旗を掲げたり。射撃は頗る良好なり。 D.1.0.5.0. 點に至るまでは敵の砲撃を受けざりしも、同地に於て凹道を横斷し其の北側に出で河岸上の機關銃陣地を射撃せんとするや村落より良好なる視界内に入りし爲敵砲兵の猛射を受く。五十七耗砲彈を射盡し且凹道南側の地形不利なりしを以て塹壕線に沿ひて後退せんとし、 E.12.0.5.3 點に於て凹道を横斷しクライシーユの工場に在る戦闘後の戦車の集合地に向ひ、正午十二時到着す。

ヒンデンブルグ線の第一線陣地は其の幅廣きに過ぎ横斷するを得ず。従つて第二線塹壕は破壊し得ざるものと認む。又此の陣地は第一線より展望するを得ず。

午前九時三十分及正午十二時の二回鳩によりて通信せり。信書筒一箇のみなるを以て、第二信は糸を以て、鳩の脚に縛著せり。

戦闘中の戦車が他の戦車と通信連絡の手段を缺いてゐることは、困つたことの一つであつた。一度

戦車の内部へ入つてしまふと、直ぐ近傍にある戦車に對しても、天井窓をあけハンカチでか圓匙なごを振つて信號しなければならぬのだが、これが實際には命懸けの仕事なのである。

ある戦車長はビュルクールの戦闘に於て、敵の陣地線にかゝつてから重要な報告を小隊長（大尉であつて戦車四臺を指揮した）の許へ提出すべき場合になつた。然し此の時、この戦車は敵陣地に既に接近し小隊長の戦車はずつと後方に歩兵と一緒に居つたので、此の間に連絡をこころは決死的の仕事であつた。志願者を募つて見るに乗員の全部が希望するので、結局サペーヂ一等兵を選定した。一等兵が戦車の中から潜り出して所命の地點へ行つて見るに、小隊長は見えない。既に戦車に乗つて前進したと謂ふことなので、一等兵はその後を追つて行つた。小隊長の戦車は今や敵の鐵條網中へ飛び込まうとする處で、附近の敵の機關銃は盡く之れに集中されてゐた。使命の重大なこのみを考へてゐた同一等兵は、不敵にもその戦車の上へ跳び乗つて、報告を傳達した。

獨逸側では戦車陷穽を造つてゐた。穴を掘つて中に水を入れ、其の上を柴草を薄くかけて紛らせたものである。先頭になつて進んで行つた戦車は、それは知らずこの陷穽に引懸つて動けなくなつてしまつた。後には何臺かの戦車が續いてゐたので、勇敢な一人の軍曹は泥の中にもがいてゐる戦車の中から抜け出し、彈雨の中を後續戦車に近づいて方向を變換させ危地から脱せしめた。此の勇敢な軍

曹が居らなければ、何臺かの戦車が皆この陥穽に落ち込む所であつた。

ある戦車は敵の機関銃の直前で傾斜し危く轉覆しかつた。運轉手は危険を承知の上で扉を開き、篤き附近の地形を見定めて傾斜を戻そうとした。内部から銃眼で見てるては視界が狭つて見窮めがつかないからである。見てゐるうちに一方の眼を撃ち抜かれたが、非常な苦痛を耐へて車の平衡を回復し危地から脱した。が、聲も出さないうで發動機の上に倒れそのまゝ意識を失つてしまつた。

此れ等のこゝによつても、任務に對する獻身的努力が當時の戦車隊に於ける指導精神になつてゐたこゝが判るであらう。勇敢なる行爲も併も一時的昂奮的なものではなく、冷靜なる思慮の下に行はれたのであつて、團體的精神——協同動作的精神の發露に他ならない。全部の者の爲には個人は何等犠牲なるこゝを躊躇しなかつた。かくして戦車團の名聲は愈々高くなつて來たのである。

七 戦車兵教習所

學科——術科——猛烈な教育振り——恐ろしい熱心——戦線へ

イギリス本國では、ウエヤハムに大教習所を、ウールに材料廠を設けて、戦車隊の要員を教育した。

ウエヤハムの方で先づ軍紀教育を徒歩教練を施してから、ウールへ移して戦車の運轉や手入修理などを修得させた。フランスの戦線に居つて戦車團入團を志願したものはバーブライートの機関銃團士官學校へ送つて、短期の速成教育を施した。

生徒は全部が非常な熱心振りであつたので、當局者の方でも其の熱心振りの利用を怠らなかつた。朝の六時から夜の九時まで、徒歩教練、講堂、自習などが續いて、身體を休める暇もなかつた。すべての課目が駈歩で進められた。

戦車團の候補生でありながら、生徒には機関銃團の徽章をつけさせて、戦車なご云ふこゝは、嘔氣にも出さなかつた。戦車關係の課目云へば、ホチキス五十七耗砲位なもので、其他は一から十まで歩兵づくめの教育であつた。

徒歩教練の教育擔任幹部は全部歩兵の准士官下士官で、練兵の呼吸なごはすつかり呑み込んだ歴戦者だつた。聯隊附曹長は非常な八釜屋で、生徒は且は敬ひ且は恐がつてゐた。容貌が倫敦のギルドホールに有る有名な像に似てゐる所から、其の名を取つてマゴッグと謂ふ渾名をつけられた。教練は馬鹿に嚴格であつたが、其の場合にはお伽噺の王子様のやうになつ、こゝい處があつた。澤山の軍曹が兵の下にゐて、マゴクとしてゐる生徒の間をアチコチ走り回つてゐた。

一人の軍曹は、倫敦兒張りの駄洒落がお得意で、絶えずそれを連發してゐた。そして「君等の將來は乃公一人の上に懸つてゐる」と謂ふのが口癖であつた。

校長は、一時、孔雀と云ふ渾名を奉られた。小兵で太つちよの此の大佐の校長は、時々非常な氣取り方で練兵場へ出て來たが、其の都度生徒は呼吸も出來ないやうな嚴重な不動の姿勢を取らされた。氣取つた歩き方と勿體ぶつた態度が、それに羽根さえつけければ孔雀そつくりの恰好だつた。

此の校長殿は生徒を集めて拍節器の周圍をグル／＼駈歩させるのが大好きであつた。拍節器の拍子が早くなるにつれて、生徒の長い脚や短い脚が調子に合はなくなるので、下士官の教官たちが「左ッ右ッ」「左ッ右ッ」と叫んで無理槍に足を合はさせた。

入校後一週間目のこゝ、翌週の土曜に約十軒許りの野外駈歩をやらせること謂ふ、大變な命令が出た。一人残らず参加するやうに定められ、又途中の所々では時間を測らせることになつた。要所々々には下士官を配置して、駈け続けなかつたり近道するものを監視させた。此の駈歩に息切れの非道い老年者もか虚弱者などは、遂に戦車兵から篩ひ落されてしまつた。

徒歩教練も各個、分隊、小隊と教練の程度が進んで來て中隊教練に移つた。閻魔帳を手にした校長と副官の傍に、ビク／＼もの、演習中隊長が立つてゐる。中隊を遠く練兵場の向ふ端へやつて置いて

校長は演習中隊長に對して、「中隊を標兵に觸らせないやうに二人の標兵の間を通らせろ」と命令する。

練兵場の中央には二人の標兵が不規則に配置されて立つてゐた。中隊長は喉も裂けよと許りの大聲に號令をかけるが、遠方に居る中隊には中々徹底しそうもない。それでも、一生懸命なので、さうやらさうやら、試験にも及第出來るやうになつた。

其の外、軍法、管理、地形學、救急法、衛生法、擲彈術、毒瓦斯、リー・エン・フィールド小銃、ルイス機關銃、ホチキス五十七耗速射砲、通信、銃劍術、體操などの諸課目があつた。

體操の教官はなつこい人だつた。體操靴に長い青ズボン、肉色の縞シャツと云ふ服装で、大聲で號令をかけながら丁度ビツクリ箱から飛び出した人形のやうに、生徒の列の前を行きつ戻りつした。此の人々の渾名は「黄蜂」と謂ふのだつたが、成る程、刺すやうな言葉で生徒を叱るのは手に入つたものだつた。烈しい銃劍術の模範を示すが彼等の最も得意の時だ。袋に藁を入れて造つた假標を斬撃する時の野蠻人のやうな凄じさや刺突の快感、身の毛の慄立つやうな掛聲などは、印象的ではあるが餘り氣持のよいものではない。血に餓えた物凄い話が得意だつたが、まだ實戰の經驗は誰もないこと云ふ話だつた。戦線から遠ざかつて身體に危険の少い仕事をしてゐる人ほど、殺戮と復讐の念が強い。

か戦争の一つの特徴だそうだから、此の噂は恐らく本當のこゝまなのだらう。

地圖の讀解、測圖、地貌などを研究する地形學に落第するこゝま、退校の上原隊復歸を命ずるこゝまふこゝまになつてゐた。經驗のない人は話ばかりではとても理解出来ないこゝまだが、ある地域を踏査しての地圖を描くこゝまは初學者にこゝまつて誠に耐らない仕事だつた。何から始めるのやら、圖上に描出すべきものこゝま描出を省略すべきもの、見境も全くつかない。初めての作業なごは、大概未來派の繪ミクロスワード・パズルを搦きませたやうな結果しか得られなかつた。

地形學では一定の角ミ其の方向上に一定の距離を探りその點を圖上に現示する問題を屢、出されたが、演習地は彼所にも此所にも間違つた生徒が困つて立竦んでゐた。方位角を間違へて、葎の藪へ入るもの、廣い水流に出會ふもの、障壁に出會つたもの、牧場や濕地の中央で立往生してゐるものなご種々様々の困難に遭遇してゐた。

ある闇夜の晩のこゝま、地形學の教官が生徒を徒歩で引張り出した。途中、迂餘曲折、丘を登り谷を下り淋しい林を衝き抜けて、學校から遠く離れた全く知らない場所へ連れて來て、生徒を止めた。此處が何處なのか薩張り判らないでボカンミしてゐる生徒に向つて、懐中電燈で時計を見た後教官が言つた。

「今が午後十時十五分、是から生徒は二人づゝ一組になつて、自分で道を搜して學校へ歸れ。但し途中は速歩のこゝま、駈歩してはいけない。早く歸りついた者の勝だ。終りッ。解れッ。」

こゝま言ひ終るや教官は闇の中姿を消してしまつた。鼻をつまゝれても判らぬやうな眞の闇だ。見えるのはボンヤリミ臙に見える藪ばかり。耳に入る音は木々に靡く風の音の外何もない。

組になつた生徒は思ひ〱〱の方向に進んで行く。中に感のよいものは山野を越えて程なく學校へ歸りつくこゝまが出来たが、大部の者は木の根に躓いたり茨に足を拂はれたり穴の中へ落ちたりしながら、當途もなく原の中を彷徨き廻る許りだつた。

此の種類の演習は、當時は生徒間の不平の種子だつたが、愈ゝフランスの戰場へ出征して見るこゝま、戦車長は深夜未知の土地で戦車をアチコチミ引き廻すこゝまが多かつたので、非常に役に立つたのである。

地形の觀察力を向上する方法ミして、教官が引率して行軍をやらせ、行軍の終了後行軍中の經過を記述させるこゝま云ふやうな方法も採用された。

兎に角教習所の生活は、刻苦精勵そのものであつた。修學期間が短いのに修業科目が馬鹿に多いの

だから、生徒の中に腦充血に罹つた者のないのが不思議位であつた。何しろ下手をするに、原隊復歸を云ふ大きな不名譽に引懸るかもしれないし、其の上當時の戦車隊の編成方針なるものが所謂朝令暮改で、今週増加されたものが翌週は半減されるに云ふやうなことが屢々あつたので、戦車隊に採用されなくなる心配が萬々あつたので、生徒は學術科共に努力の限りを盡した。

前期の者で戦車隊に這入れたものは僅か五、六名足らずだに云ふやうな噂があつたりしたので、學校中が不安で一杯だつた。奮闘努力の三箇月の末になつて修業試験が始まる頃は誰も彼も不安で耐らなかつた。壯若様々な年輩の生徒が、ペンを手にして軍事知識の蘊蓄を傾けて、答案用紙を戦つた。

術科の試験は大して心配はなかつた。殊に手旗通信などは、助手の軍曹が落第者を出すまいとして骨を折つて呉れたので、落第者は一人も出さなかつた。先方からの手旗を、二人一組になつた生徒の内の一人が読み取つて他の一人が筆記するに云ふ仕組だつたが、教習所へ来る前に通信術をやつてゐた生徒を、生徒の一番後方に置いて聞えよがしの大聲で読み取らせるのだつた。軍曹は生徒の不正監視を装つて見廻つてゐたが、通信兵出身の生徒の處へ来るにその背中を一寸も衝いて「もつと高く、もつと高く」を小聲に囁き、その読み聲が生徒全部に聞えるやうに圖つた。

試験も無事終り、やがて生徒の配屬が定まつたので、有頂天になつた生徒は卒業の前夜は蒸汽均土

機を借りて來て校庭を乗り廻し、戦車への憧憬を満足させた。

三箇月間の苦心によつて、練兵場で中隊を指揮することも出来るやうになり、警戒勤務の要領も體得し、軍法の要旨も會得した。五十七耗砲、小銃、ルイス機關銃の構造、射撃故障の排除法も覺えた。

手旗、音響、回光器などによる通信術も出来るやうになつた。新兵に對して體操や毒瓦斯の用法を説明したり、徒歩の分隊教練や小銃の操法位は教えられるやうになつた。地圖の讀解、磁針の使用にも馴れ、肉體的にも軍紀的にも修練を積み、今は只本來の目的たる戦車の操縦運轉を待ち焦れてゐた。かうして少尉に任官し新しい將校服を着けそろう／＼鼻の高くなりかけた時に、ドルセットのウエヤハムに在る戦車廠に隊附を命ぜられることになつた。

併し此處も亦少尉連の希望した處ではなかつた。來て見るに、矢張り渴望してゐた戦車知識を授けては呉れなかつた。拳銃射撃で僅に慰める位のものだつた。中で一番奇妙なのは鳩に關する課目だつた。一人の軍曹が少尉達に鳩の飼養管理、籠への出し入れ、脚に信書管の附著法、放鳩法などを徹に入り細を穿つて説明してくれた。

新任少尉が一人々々片手に鳩を掴み片手で信書管を附著して籠の中へ出したり入れたりするので、鳩の数が少いの、少尉の数が多いので、鳩は終には身動きも出来なくなつてしまつた。

ウエヤハムで三、四週間の間種々修得した上、ウール附近のボヴィングトン野營地へ行くことになつたので、今度こそは戦車の運轉をやるのだらうと思つて大喜びであつた。

ウールは繪のやうな景色のよい昔風のドルセット村の近くにあり、ボヴィンクトンの野營地はそれから約二軒も離れたウイルトシャーの境に近い野原の一端にあつた。本街道からも遠く離れてる人目も眇いので、戦車の教育や演習には持つて來いの場所であつた。

始めて戦車をウール停車場からボヅクングトンまで運んで來た時には、大仰な警戒振りで秘密の漏洩を防がうとした。沿道に憲兵を配置して一切の交通を禁じ、道路に面した家の窓には凡て窓掛けを掛けさせ、家人は道路に反対側の室に入つてゐるやうに命令した。こんな警戒の中にも次のやうな笑話を残す手落があつた。

ある日一人の農夫がやつて來て言つた。

「秘密保持の爲にはどんな御手傳でも喜んでやります。處が二、三日前に戦車が故障を起したので、一先づ私の家の庭へ入れて馬で牽いて行くことになつたんですが、その戦車が今日で二日も抛り放しにこなつてゐるんです、併も何もかけもしないむき出しの儘ですよ」

戦車熱にまりつかれてゐる新任少尉連は、ボヴィングトンに到着するに鼠色の作業服を渡されて、そ

の翌日戦車の格納庫の中で戦車の構造や機能の説明を聞いた。

機械に経験のない者には中々難しかつた。戦車の周圍に各部毎に受持教官がついてゐて説明するのだが、時には甲乙兩教官の聲が互に交錯して、塊の外側になつてマグネットの講義を聞いてゐる筈の聽講者の耳へ氣化器の話や變速機の話なごが飛び込んで來るやうな有様であつた。

併し、朝から晩まで、外の事には一切耳を傾けず唯戦車のこと許りに夢中になつてゐる連中のことだから、教官の口から聞き漏らしても、同僚に尋ねてちきに覺えて仕舞つた。

運轉法の講義は、最初は駐つてゐる戦車の中で、聯動機、節氣瓣、足動制動機、變速機、手動制動機なごの用法から始まつた。いろ／＼の槓桿や制動機のことなごは、最初の間は未経験者にはなかなか判らなかつた。發動機を始動するに非常な騒音が起るので、教官は運轉手席へ著いた練習生の後から寄り懸るやうにして其の耳に口を當て、色々なことを教えて呉れた。「之を中立にするのだ」云はれて手を震はせながら一番手近の槓桿を引張るに、戦車が破裂するのではないか云ふやうな烈しい音を立てた。教官は「否、夫れではない、此方の方のだ」怒鳴る。練習生は戦車を毀してはいけなと思つて、何でも構はず手當り次第にハンドルを引くので、音は益々高くなる許りだ。愈々困つてゐるに、途端に發動機が急に靜になつて、ハンドルから手を離した教官が、「おい／＼、之は戦車なん

だぜ。發音信號機ではないんだから、ガタ／＼音を立てさせるのが能ではないんだヨ」ミ笑ひ崩れてゐた。併しかうして練習した甲斐があつて、暫くするミ操縦や運轉も追々ミ其の骨を呑み込んで来た。

始めて戦車に乗つた時の氣持は、生涯忘れるここの出来ないものだつた。張出砲塔の扉を潜つて内部へ入つて見るミ、餘りの狭苦しさに先づ吃驚した。こんな狭い處へ八人も入つて戦闘が出来るのかと思はれた。膝を屈めなければ通れない。發動機の兩側にやつミすり抜けられる丈けの道があつた。二次齒輪の處から操縦席へ行く處も同じやうな狭さである。

齒輪室の上にある大きな把手は、發動機の具合で恐ろしい力で反對廻りをやるこことがあるので、三、四人掛けて氣をつけて廻さないミ危なかつた。ある時一人の男が之を廻轉中に手を消らせて齒輪室の上へ俯向きに倒れた時に、ハンドルが反對廻りを起して仆れた男の背中をハンドルで叩いたので死んで仕舞つた。

百五馬力の發動機は恐ろしい音を立て、廻り出した。教官が、「第三速度」ミ叫んだので其の通りにするミ、戦車は非常な速さで走り出した。無限軌道が地を噛み、車體が揺れる。

斜面を登つたり堤防を降つたりして進んで行くミ、突然眼の前に深い彈痕の漏斗孔が現れた。教官

から、「速度を出してはいけない靜に通れ」ミ云ふ、注意が聞えた。進む程に漏斗孔の唇端へ来た、戦車は鼻をグ／＼下げて下へ下ミ降りて行く、何處まで潜り込むのか判らない。程なくするミ戦車の鼻が上向いて来て、乗つてゐる者の眼に青空が映つた。續いて進む。何時の間にか青空も見えなくなつて、眼の前には坦々たる平地が擴つてゐた。彈痕を通り終つたのだなミ黙頭いた。

様々な角度で輦轅を通つて見た。運轉手は傍の人の考へる程アチコチに打衝きはしないが、戦車の移動に連れて自然に姿勢が變つて行く。横になつたり仰向いたり俯伏せになつたりするが、節氣擧の調製に氣をつけてゐれば、車體は間もなく水平に戻る。丁度波に揉まれる舟に乗つたやうなものだ。之ミ反對に、戦車の後の方に乗つてゐる者は、打衝けられたり投げ出されたりする。だから此の人は熱されて赤くなつてゐるパイプや發動機の蓋に觸らないやうに、必死で天井にしがみつかなければならない。

運轉演習の最初の日には、睡くて睡くて耐へ切れないうこがあつた。車内の温度が上つて熱くなるミ、ついウト／＼して仕舞ふ。こんな時には一寸駐めて外の新鮮な空氣を入れるミ漸く睡氣がさめる。かうした嗜眠状態は、室内に揮發油の臭が籠る爲に促進されるのであつて、初めて戦車に乗るものにはつきものである。然し二、三日するミ揮發油の臭や重々しい空氣又車内の熱さなごにも慣れて

しまふ。

非常に長い坂を靜に降りたころがあつた。半分許り降りた頃、教官から足動制動機を使へ云ふ合圖があつた。其の通りにするに、重さの二十八噸もある戦車が五、六十種から一米も後へ牽き上げられたのには驚いてしまつた。

殆ど垂直に近い斜を登りかけるに、教官が又制動機をかけて發動機を止めろと合圖した。戦車は急斜面の途中に止つて、丁度壁に止つてゐる蠅のやうになつた。「制動機を緩めて逆行」云ふ教官の命令通りにするに、戦車は後向きに斜面を上り降り始めたが、之と同時に發動機は音を立て、廻轉を始めた。「すぐ齒輪を切り換へてもう一度斜面を登れ」云ふ教官の言葉通りにして斜面を登り切つた。

戦車が傾斜してゐる爲に曲軸柄を使つて始動させるころの出来ない時には、前に述べたやうな方法で始動させるころが、戦闘間に於ては屢、利用された。

運轉法の試験には、テープで印したウネ／＼と屈曲の多い経路と凹道を通らせられた。直角に曲る處が澤山あつたので、非常に難しかつた。是には何時も道路の中央を通るころと回轉の時機を判断するころが、一番必要だつた。凹道では少しでも兩側の高い部分に車を觸れさせたものは落第になつた。回轉の時には、運轉手は後方に居る變速機手に相圖して、片方の二次齒輪を中立に移させるのだが、時

間的に精確にするころが必要なので、非常に熟練を要する操作であつた。

時々教官が運轉手に判らぬやうにこつそりて戦車の内へ乗つてゐて故障を生じさせ、運轉手に點檢を命じて戦車の構造に關する知識を試験した。

ある日戦車を運轉して小さな坂へかゝるに、突然發動機の音が低くなつて、いくら節氣弁を調節して見ても思はずしくない。機械には一切手を觸れてゐなかつたので、つつきり自分の運轉法が悪いのだと思つてゐるに、「故障の原因は何だッ？」と謂ふ大聲が聞えた。

さきつきしながら、坐席に座つたまゝ、で後を振り向いて見るに、教官の顔が見えた。

「はいッ、原因は……多分……」

と答へやうとするに、恐い顔をした教官の後に立つて居た變速機手が目配せした。其の意味が十分に讀めたので、一寸言葉を切り暫く考へるやうな振りをして發動機の蓋を開け、内部を一瞥した後、

「ペンシルがなくなつては、戦車は動きません」

と答へるに、教官は微笑しながらそれをポケットから取り出して、戦車から出て行つた。變速機手の機敏な助力がなければ危く試験に失策する處だつた。

教育がクライマックスに達するに、所謂「燕潜り」をやらされる。誰でもやらなければならぬの

だつたが、凡そこれ位嫌がられたものはなかつた。戦車の震動がひどいので、屹度打撲傷を受けること云はれてゐた。燕潜り云ふのは深い弾痕へ飛び込む方法であつて、これに合格しなければ一人前の運轉手ではなかつた。

戦車を緩やかな坂を登らせて、坂のほんこの頂上まで登り詰めさせる。戦車は重心を中心にして前後に揺れるやうになる。其處で戦車を駐めさせること、教官が

「さア、下を見下して見給へ」

と謂ふ。オツ／＼しながら扉を開けて下を見ること、戦車は丁度止り木に止つた鳥のやうになつてゐる。戦車の鼻は全く地面から離れて、下には深い大きな弾痕が口を開けて待つてゐる。深さは少くも十五米はあらう。

教官は無慈悲だつた。運轉手に恐ろしさの豫感を十分に味はせた後で、

「さア、齒輪を切り換へろ。頂界線に構はず前進するのだ。節氣弁に手を當て、覗いて、落ちたこと思つたらすぐ弁を閉める。そして無限軌道が地面に著き、るまでは、弁を開かないやうに」

と言ひ捨てること、自分は車の外へ出てしまつた。教官は外から戦車の燕潜りを見て居やうこと云ふのである。

戦車は静に静に、一寸又一寸と頂界線を乗り越えて進む。運轉手はビク／＼もので節氣弁に指を當てた。その途端戦車は鼻先をぐつ／＼下げて、下へ下へ降つて行く。何だか静に空間を墜ちて行くやうな氣持だ。節氣弁は殆ど完全に閉ち切つて、發動機は停止した。急にドカツ／＼云ふ衝動を感じた。戦車の鼻先が地面に著いたのだ。その瞬間戦車は逆立ちをしたので、知らず／＼一人の變速機手は砲塔の扉から戦車の外へ投げ出された。その他の者は無我夢中で、何でも構はず手に觸れるものに縋りいつた。足は鋼の床から這つてゐる。ひどい音／＼共に投げ出された油罐や工具などが運轉手の上から落ちて来て、背中は一ぱになつた。運轉手は坐席に著いたまゝ、俯伏せの姿勢になつてゐる。やがて弁が全開されること、發動機は回轉を始め、無限軌道は緊り／＼地面を噛み、戦車は徐々に彈痕の穴から匍ひ上つた。通過を終つた運轉手は少々ならず度膽を抜かれたが、それでも勝ち誇つたやうな氣持になつて戦車の外に出て、今度は他の者の通過振りを見物する立場になる。

燕潜りは戦車の能力を示すに十分な藝當だつた。十米もある穴の中へ潜つてそれから匍ひ登ることなどは、普通の自動車などではとても思ひも寄らないことだ。中には降りる時に節氣弁を閉めるのを忘れた爲に、戦車がひどい力で鼻を地面の中へ突き込み逆さになつたまゝで止つて仕舞ふのもあつた。

運轉後の手入、是がまた嫌な仕事だった。戦車云ふ奴は非常な大食漢だったので、揮發油燃料の外にも、澤山のグリースを塗らなければならない。是はグリース銃云ふ塗脂器を使つて塗るのだが、その塗り口が無限軌道が轉輪なごのやうに車體の下面にあるものが多いので、作業手は地面の上に寝て塗らなければならない。泥濘地で塗る時なごは色々な悪口が出て来るので、定めし戦車の發明者達は耳が痛かつたことだらう。

ボヴィングトン野営地では、將校も兵士も必死の努力で揮發油の臭の中に日を過した。彼等は戦車のこも、云へばごんな犠牲をも顧みなかつた。多少の事故や怪我、揮發油、油、グリースの臭なごは素より物の數ではなかつた。

將校は全員が船用羅針儀の講習を受けた。古い海員が講師になつて、羅針儀の使用法や様々な不思議な性質なごに就て説明した。

發動機が其の他の機械類から氣を抜いて頭を休める爲に、日曜の午後になるミウールの村から馬車を借りて来て、ラルウァースの風光明媚な峡谷を探勝する將校もあつた。景色のよい田舎道で馬車の輕快な速歩は、戦車の内部、揮發油の臭、發動機の響なごに對して誠に愉快な對照であり慰安であつた。

戦車の運轉法、手入保存法なごを了へた將校達は、ウールの戦車廠を出て埃の多い國道を徒步行軍でウェーヤハムに歸り、その翌日は遠路を遙々ミラルウァース野営地へ行つた。此處では美しい景色の中で、五十七耗砲の射撃を教育された。目標を谷の向ふ側の崖の上に立てて、此方側から射撃する。砲身の長さを縮めた五十七耗砲の閃光で發射の音には初は少々驚かされたが、やがてそれにも慣れ砲の扱ひ易さで精度の良いのに敬意を表するやうになつた。

此の五十七耗は元來海軍砲であつたものを戦車に載せたのだから、射撃演習のやり方も唯目標が動かない丈で、其他のやり方は全く艦砲射撃と同じであつた。戦車が起伏地を這ひ回る間射手は眼鏡から目を離さないで目標を搜してゐた。勿論目標は肉眼には見えないのだが、射手は發射の火先を求めて其處へ照準をつけた。

戦車は絶えず上つたり下つたりするので、最初の間は馬鹿に難しかつた。眼を眼鏡に、指を引繩に掛けたまゝ、でゐるのが要訣であつた。火光が現れるミ照準眼鏡の十字を所望の點につけ、次の火光の出るのを待つて引繩を引いて發射すれば、屹度目標に命中した。

五十七耗砲の射撃を戦車内でやるには、射手は床の上に膝まづき、二番は射手の傍に蹲つて次發の裝填を準備してゐる。砲尾は後坐するミ發動機の蓋の上まで退るので、二番は鐵楯で怪我をしないや

うに防護されてゐた。引鐵を引いても發火しない時には、暫く間を置いて閉鎖機を開き、引き出した不發彈は戰車長が腕で抱へて張出砲塔の下面にある孔から車外へ抛り出した。併しこんなことは、そう度々あることではなかつた。

ウェーヤハムでもう一つ面白いことがあつた。「戰車的の見地からブールの停車場に至る間の鐵道を詳細に偵察せよ」云ふ問題を貰つて、將校はノートを持つて出て行つた。端末停車場なるか岐分停車場なるか、線路兩側の地形、軌間、線路の數及構築法、軌條の種類と一杆當りの趾數、傾斜、乗降場又は積卸場の廣狹、信號装置の種類、輪轉材料、機關車數、墜道の狀況、切取築堤、勾配の位置長さ、戰車卸下の爲の利用價值、停車場に至る道路の景況、給水設備、夜間搭載の適否、其他鐵道一切の狀況を詳細に偵察するのであつた。

線路に出たり入つたり、長さ高さを測つてノートに記入するもの、積卸場の長さを步測するもの、信號機を偵察するもの、鐵道職員は呆氣にみられて、之は氣狂ひの集りに違ひないと思つたことであつたらう。そして此の人々の大部が此の偵察の結果提出したものが、ブール停車場偵察要圖云ふ要領を得ぬこと夥しく氣味の悪い紙屑のやうな答案であつた。聞いたならば、鐵道職員は自分達の診斷の間違つてゐなかつたことを確認したに違ひない。

また、此等戰車長の卵達は、撮影當時の光の方向と陰影の景況から空中寫眞を判讀する方法を教えられた。

こうしてゐるうちに、此の戰車長の卵達に對してある日突然フランス出征の命令が傳達された。そして彼等はそれから一週間も立たないうちに、戰闘大隊の戰車長となつて、今迄に修得した知識を試す最高の機會を與へられることになつたのである。

八 メッシーヌの戰闘

マークIV型の出現——機密の保持——補給戰車——敵前上陸と戰車

閑話休題。

やがてマークIV型戰車がフランスの戰線に到着した。初めのワイリー戰車に比べるに、幅員も重さも小さくなり、積載彈藥數も減らされたし、其の外にも數箇所を改良されてゐた。

マークI型では、油槽は小型油槽を使ひそれを車の前部運轉手席と戰車長席の附近に分けて在つたのだが、新戰車では容量二百二十七立入の大油槽一箇に改め、それを車體の外部に出して後尾の方に

取つけた。是れは油槽を車の前部に置くに敵弾を受ける
 こゝが多く、且車内に置いた爲に車長や運轉手が焼き殺
 されたこゝがあつたからであつた。
 車體の全部に互つて、装甲板の厚さを増加したので、
 獨逸軍のK弾も貫通しなくなつた。五十七耗砲は長さを
 縮めた。無限軌道は、履板の幅を廣くし、又長持ちのす
 るやうに轉輪や鏈環を鑄鐵製に改めた。
 張出砲塔にも大修正を施した。雄型のもは大ききこ
 重さを減らし、門を脱すに砲塔を一所に車體內へ押
 込むこゝの出来るやうにした。雌型の方は兩側の張出砲
 塔の下面に兩開きの扉をつけてそれを内側へ開けるこゝ
 が出来るやうにした。又以前の雌型は車内に火事でも出
 來た時に車外へ逃げ出すのが非常に難しかつたので、容
 易に脱出出来るやうに改良した。

第五圖



マークIV型戦車の断面
 左より右に
 變速機手、
 ルイス機関銃手(五十七耗砲の二番砲手を兼ね、五十七耗砲手、運轉手、戦車長(ルイス機関銃を持つ)、點線の四角は張出砲塔、斜線は發動機の位置を示す

觀測用として窓につけてあつた硝子板を廢して、鋼板にあけた小さな孔から外を見るやうにした。
 一九一七年の五月に、委員會で戦車搭載用としてルイス機関銃は不適當であるから速にホチキス機関銃に改めるやうに、意見を出して置いたにも拘らず、マークIV型の機関銃は依然として全部ルイス機関銃を用ひてゐた。一九一六年の十一月に戦車の専門家から提出した「ルイス機関銃は戦車用として不適當なり」云ふ意見を押し切つてルイス機関銃を戦車に搭載したのは、陸軍省が更に經驗を重ねなければ可否を決定するこゝは出来ないに謂つた爲である。結局ルイス機関銃をやめてホチキスを再び戦車に乗せるこゝになつたのだが、其の實現は遂に一九一七年には間に合はず、一九一八年マークV型の出現する時になつて實施されたのである。
 扱てマルヌ會戦の次に戦車の參加した戦闘は、一九一七年六月のメッシーヌの戦闘であつた。此の戦闘はメッシーヌの高地線占領を目的としたものであつて、非常に周到な計畫の下に疾風の成功を収めるこゝが出来た。

英軍は坑道中隊を以て、一年も前から敵の陣地の地下に向つて長さ八軒に互る坑道を掘開した、地上から敵に迫らず地下から敵を吹き飛ばせてしまふ計畫であつた。

秘密の裡に二十箇の大地雷を設置し、之に使用したアンモナル爆薬の量は合計四十五萬斤を越し

たご謂はれた。聽て爆破實施の期日が近附いたある日のこゝ、英軍の坑道中にあるた聽音哨が、コッコッ、コッコッコ云ふ獨軍の坑道掘鑿の音を聞きつけた。敵は我が軍で敵の標高六〇高地の陣地下に設置した地雷の方へ向つて掘つて來てゐる。今迄の折角の苦心が敵の對抗坑道の爲に水泡に歸するのではないかご心配しながら、英軍の坑道兵が聽測を重ねて計算して見るこゝ、豫定日に爆破すれば敵の妨害を受けそうもないので、敵の對抗坑道に對しては別に攻撃を加へないこゝにした。

此の攻撃に當つては、戰車七十二臺を以て歩兵の攻撃を支援するこゝになつた。そして十二臺の舊式戰車を補給戰車として活動させるこゝになつた。一臺の補給戰車は五臺の戰車に對する一補給量を搭載した、一補給量は一戰車に對する補給定量を謂ふので、その具體的數量を雌型戰車に就て示せば次の如くである。

水	九十立	燃料	二百七十立
油	四十五立	그리스	四疋五〇〇
機關銃彈	一萬發		

雄型戰車に於ては、彈藥が五十七耗砲彈二百發、機關銃彈六千發になつてゐる外は、雌型戰車と同じであつた。

六月六日我が軍の砲兵は、折から襲來した大雷雨、物凄さを競ふやうな猛烈な砲撃を續けてゐた。午後三時砲兵は急に沈黙したので暫くは不氣味な靜寂が戰場に漂つたが、午後三時十分になるこゝ英軍の坑道地雷が爆發した。

最初に聞こえて來たのは、抑へつけられたやうな唸り聲であつたが、それが素晴らしい大爆音となり天地も爲に震ふかのやうであつた。

獨軍の陣地から夥しい土砂が吹き上げられ火山のやうな火焰が天に沖した。噴き上げられた地塊は空を掩ふて天日も爲に暗きを覺えた。大爆破の餘震が尙ほ去らないうちに、砲兵は彈幕射撃を再興した、そして是れと共に、歩兵、戰車が攻撃前進に移つた。

獨逸軍の第一線陣地に、全く跡方もなく吹き飛ばされてゐた。豫備陣地線の見ても無慘な軀骸の殘骸中には、此所彼所に青ざめた獨逸兵が震へながら突伏してゐた。隨所の攻撃が成功した、戰車の必要もない程に地雷、砲彈に破壊されてゐたので、歩兵の攻撃前進は迅速に進捗した。

某戰車は距離三杆を越える攻撃経路を易々として通過し僅に四十分で攻撃目標に達するこゝが出来た。

第一大隊の三戰車はジョア農場附近の機關銃陣地を蹂躪した後、歩兵が占領地の確保工事を終るま

で附近の巡察に服してゐたが、夕刻になつて壕に凹つてしまつた。時既に暗かつたので、三戦車は脱出作業を翌日に延すこゝにしてゐたが、さて翌朝になつて見るに既に敵が逆襲に移つてゐたので、擱坐状態のまま、で交戦する決心を採つた。

銃手は戦車から機關銃を脱して附近の彈痕中に陣地を構へた。獨軍が斜面を降りかけるに、先づ五十七耗砲が之に射撃を注ぎ、次で機關銃も之に射撃を向けて、敵を喰ひ止めた。敵は一旦停止して戦車を目懸けて徹甲彈を撃つたが何の効果もなかつた。獨逸軍では英軍が戦車の装甲板を厚くしたこゝなきは、全く豫期してゐなかつたのだ。

幾度か敵は攻撃を試みたが駄目だつた。僅少な戦車の乗員で目に餘る敵を前後五時間に互つて拒止したのであつたが、其の内に英軍の猛烈な彈幕射撃が降つて來たので、敵はこゝろ／＼攻撃を斷念してしまつた。

一ミ仕事済ませた乗組員は、早速戦車の脱出作業に取り掛つたが、此の方はなか／＼成功しなかつた。二時間許りも汗水を流してやつて見たが無駄なので、戦車を抛棄して、載せてゐた機關銃を附近の歩兵に引き渡して後退するこゝにした。

戦車を無人地帯に遺棄して撤退するこゝには、戦車長は五十七耗砲の照準眼鏡ミ閉鎖機を離脱して、

之を適宜の地點に埋めるこゝになつてゐた。戦車長は埋没地點には適宜の標識をして、其地點を圖上に記入して中隊副官に通知し、中隊副官は狀況が之を許せば救難中隊に命令して之を發掘蒐集させるやうに定められてゐた。

ルイス機關銃は歩兵に渡してしまつた。併し其の受領證を持つてゐないに、後で災難が身に振り掛つて來る。乗員を喪ひ或は繃帶所へ渡しても受領書は要らなかつたが、機關銃は後で其の行方が證明出來るやうにして置かないに、上司から如何なる處分を受け乗組員の經歷を汚すこゝになるかも知れないのだ。

兎に角、遺棄した戦車内に機關銃や五十七耗砲を射撃可能状態のまま、残してならないこゝは明瞭である。こうしなければ戦車を兩獲し敵が、すぐその銃口を我等の方へ向けるであらう。

メッシーヌの戦闘後の六月二十八日になつて、重班機關銃團なる名稱が戦車團ミ改められた。蓋しさしもの陸軍省も、戦車の存在を是以上秘して置くこゝが出来なくなつたのであつた。

戦車の装置がまた改正されるこゝになつた。魚雷型——葉巻形の桁材が泥濘地脱出用の枕材に變つた。之は重さ約四百五十疋、長さ三米七十許りの大チーク材の兩端に鐵環をつけたものである。佛蘭西の中央工場で考案したもので、戦車の背中に横にして運び、泥に凹つた時に之を使つて脱出する。

斜面の昇降なごの際に落ちてしまはぬやうに梁材に鎖で結びつけたある。(口繪参照)

戦車が泥の中で擱坐するに、乗員が戦車の天井孔から抜け出して結んである鎖を解いて無限軌道に鎖を結び換える。無限軌道の回轉につれて枕材は戦車の腹下に引き込まれ、履板が其の面を噛むので戦車は泥から脱け出るこゝが出来る。併し泥があまり柔かであるに、枕材は水を潜るやうに泥に潛つてしまつて役に立たないこゝもある。泥地では概して有利に利用されるのだが、缺點とするのは取著け作業を車外へ出てやらねばならぬので。敵彈雨飛の中での作業は非常な勇氣を沈著を要するこゝである。それから後の二、三箇月は戦車の歴史上最悪の苦闘が続いた。英軍の墓地になつたあの恐ろしいイーブルの突角が、大攻勢の舞臺として選ばれて、三個旅團二百十六臺の戦車が之に参加するこゝ、なつた。

此の攻勢は、イーブルを瞰制する高地線から敵を驅逐して、爾後更にフランドル海岸に沿ふて前進し、獨車の據點就中潜水艦根據地を奪取するのが、その目的であつた。丁度此の頃は、例の無制限潛航艇戰によつて英國の商船隊が大脅威を受け、英國の食糧補充路が咽を絞められかけてゐた時であつた。此のイーブルの攻勢の一部が、例の有名な穩密計畫で、敵の全く豫期してゐない處に攻撃を指向しよう云ふ、極めて大膽にして創意的の計畫であつた。即ち主力をイーブルの正面及海岸に沿ふて指

向するに同時に、一部を以つて伯耳義海岸のミッデルケルク——ニューボルトミオステンドの間にある——を奇襲して、敵を後から絞め上げよう云ふのである。

勇敢な急襲部隊を、テームス河上で組立て、ダンキルク港へ回漕する長さ二百米を越える大鐵舟で送る豫定であつたが、此の大鐵舟の中へは、第一師團の歩兵の外、十糧加農及十二糧榴彈砲若干中隊、工兵二中隊、自動貨車若干、戦車九臺をも載せるこゝになつてゐた。

上陸地點の決定は、空中寫眞で各種の潮汐の状態を撮影して比較研究の上、決定されるこゝになつた。

濃密な煙幕ミドバー海峡巡邏艦隊の猛烈な砲撃の掩護下に、拂曉稍、前に大鐵舟を急峻な海岸に向つて突進させるこゝに決定した。

此の邊の海岸一帯は、高さ約十米のコンクリート護岸壁がある。此の護岸壁は急峻な上に、頂上には笠石があつて、其の上が逍遙道となり、道の向ふ側には別荘が竝んで居た。海岸には鐵條網を張り、護岸壁や砂丘の蔭には敵の野砲が隱匿配置されて居る。逍遙道にも鐵條網を設け別荘の庭にはコンクリート製の機關銃坐が準備されて居た。

此の如き防備の至嚴さであつたから、急襲によるの外術がなかつた爲に、戦車を使用するこゝにな

つた。一度海岸に立脚地を占めた歩兵は護岸壁を越え追遙道上を掃蕩占領するであらうが、それには火砲も弾薬も要るし色々な補充品も準備しなければならぬから、此等を防波壁上に牽き上げるにも戦車を使はうと云ふのであつた。

此の護岸壁はまだ新しかつた。有難いことには、其設計に當つた技師が當時佛國に避難して來てゐたので、設計書を手に入れることが出來た。之によつてダンキルク附近の淋しい原に模型を造り、歩兵は是れによつて攻撃演習を繰返してやつて見た。

戦車隊の方でも、バリブラーヂェ附近のメルリモンと謂ふ處に模型を造つて、護岸壁の攀登演習を演練した。

コンクリートですべくしてゐる上に傾斜が急なので、戦の攀登は中々困難であつたが、無限軌道に特殊の靴を穿かせて目的を達することが出來た。併し此のやうに凸出してゐる笠石を超える問題は依然として解決することが出來なかつたが、種々研究の結果解決策を發見することが出來た。即ち車輪をつけた桁材の上に載せた幅が戦車の幅よりも少し廣い鋼板製斜材を戦車に持たせ、護岸壁の脚に達した時、轆轤によつて之を壁上に卸し、戦車で手押車のやうに推進させ、それが笠石に懸つたならば車を脱し且戦車との連絡を解く。その上を戦車が進めば笠石を通過することが出來る。

新しくして追遙道に出た戦車は、先づ敵の鐵條網と機關銃を始末してから、火砲や自動車を此の上に牽き上げる。笠石を超えて平坦な追遙道へ下る時に激突して破壊する虞があるので、車輛が斜材を登つて笠石の上へ來るに、斜材をシーソー運動によつて反對に追遙道の方へ傾かせ、其の上を車輛が通つて追遙道に移ると云ふ寸法であつた。

斯様な方法が案出されてからは、戦車は毎日々々、護岸壁の攀登や火砲自動車の牽き上げを演習した。鐵塊のやうな戦車が護岸壁をノソノソと登つて行くのは奇妙な恰好であつた。鐵板の坂から今にも這り落ちて地面に衝突して粉碎するかと思はれたが、戦車の不思議な攀登能力と運轉手の巧妙な操縦によつて、垂直に近いやうな急斜面を平氣で登り、一度も失敗つたことはなかつた。

見物人に祕密の漏れるのを恐れて、是れはリール要塞の攻撃の豫行演習をやつて居ると謂ふデマを飛ばせて、人々の好奇心を満足させることにした。

此の筋書によつて舞臺に登ることになつてゐた役者の爲には幸と謂ふべきか不幸と謂ふべきか、此の所謂穩密計畫は遂に實行されず、紙上の計畫だけで終つてしまつた。漸く英軍の手に收め、白國海岸に對する攻勢の出發點として極めて緊要な、イーゼル河口の彼岸にある海岸地區が、獨軍の機敏な攻撃によつて、突然英軍の手から獨軍の手に移された爲である。獨逸軍が機先を制して、先づ第一戦に

勝利を占めたのだつた。ニーボルトは依然英軍の手中に在つたが、軍隊に集中を命ずべき旅團の首脳部が、獨逸軍の手中に陥つてしまつた。

唯そればかりではない。イーブルの正面に向つた主力の前進は、泥田の中を行く牛のやうに、捗々しくなかつた。バッシュンデルの村落は三日の後に之を占領する豫定であつたが、疲勞困憊した英軍は、三箇月を経ても尙泥田の中にあがいてゐるのだつた。最初の三日許りは希望の目標であつたバッシュンデルの村落がやがて敗滅の前兆となつて來た。

主力の方面がこんな具合であつたから、助攻たる海岸方面の部隊には、遂に其の機會が來なかつた。十月になるに穩密計畫に携つてゐた旅團は、原所屬に復歸するこゝろなり、ミッデルケルクの敵は枕を高くして睡に耽るこゝろが出来るやうになつた。

前記の計畫が豫定通り實行されたとして、果して成功したであらうか？ もし二三門の野砲でも、我が海軍の砲撃から助かつて居たならば、敵はそれによつて我が鐵舟を吹き飛ばし、この小奇襲部隊を立往生させるこゝろが出来たであらう。逍遙道に匿れて居た一門の野砲は、戦車が靜かに其の鼻先を護岸壁の頂上につき出した處を、至近距離から命中彈を浴せたであつたらう。

此の計畫は、全く、必勝か必滅かの外に途はなかつた。鞏固なる防禦設備、急峻な斜面、廣潤な鐵條網、機關銃集等を考へたならば、さしも豪勇な鐵舟部隊も恐らく必滅が其の運命ではなかつたらうか。

反對に、假に此等の獨逸兵が、英軍は既にバッシュンデルの稜線を占領してオステンドに向つて前進中であり、尙他の一軍は附近の海岸を攻撃中であるこの情報を聞いて、逃げ出したならばさうであらう。

英軍の大潮を阻止する爲に第一線に召致されるか、或は遠かず退却しなければならぬのだと知つたならば、當面の獨逸軍の不安はされ程であつたらう。其處へ、突然、靜寂な別莊地の空氣を破つて榴彈の嵐が舞ひ込んで來る。驚く暇もなく更に九臺の戦車が、防波壁の彼方に現れ、やがて鐵條網を突破し銃砲彈を雨霰に注ぎながら、眞向に進んで來る。

斯る狀況に於て、敵が海岸から這ひ上つて來る戦車と對戦しよう云ふやうな氣になつたであらうか？ 否、彼等の同胞がソナムの戦線でやつたと同じく、「塵物が來た！」と叫びながら、銃砲を捨てて浮脚を立たせたであらうこゝろは確かである。

九、イーブルの第三會戰と戰車 (一)

パッサンダール——攻撃準備——十六日に互る準備砲
撃——泥中の立往生——特殊火點の攻撃

結局はパッサンダール高地線の占領を謂ふ幕までには過ぎつけたが、このイーブルの第三會戰を云ふのは、大戦史上に於ける悲劇中の悲劇であつた。

フランデル地方もイーブル附近は平々坦々たる沼澤地である。獨逸軍は半圓形をしてゐる低い高地の縁端に沿ふて堅固に陣地を占領し、イーブルの町を其の附近の英軍の陣地線を、三方から睨み下してゐた。獨逸軍の第一陣地線をなしてゐた高地線の後方は、是れ亦沼澤地をなしてゐる谷であつて、更に其の後方に在る低い丘陵地が獨逸軍の第二陣地地となつてゐた。

英軍側では、先づ第一の沼澤地を通過して敵の第一陣地線のある高地線を攻め取り、更に其の背後に在る濕地に下つて第二陣地地の丘陵線までを占領しよう、と謂ふのが攻撃の目的であつた。

今から凡そ百年も前には、今のイーブルは海岸の港であつたのだが、大規模の築堤工事によつて漸次に海岸を埋立て、行つて、今の様な状態にしたものである。併し、何分にも英獨兩軍が三年の長い間對峙し續けて來たのだから、兩軍の引續く砲撃によつて堤防は壞れ、溝渠は水の流れを阻むやうに

破壊されてしまつたので、此の突角陣地附近の一帯は既に一大瀰水地帯を化してゐたのである。

此の沼澤地帯を通過して歩兵を攻撃前進させると共に、歩兵支援の爲に重い戰車をも使用することになつたのであつた。戰車隊の幹部は強硬なる反對を唱へた。戰車を謂ふものは到底此の如き濕潤地を通過することは出來ないし潜水艇でないのだから水中を潛ることも出來ない、従つて此の如き地形に於て戰車を使用することは結局貴重なる戰車を其の乗員を捨ててに等しいと抗議した。然し其の效果もなく、やがて攻撃命令が下り戰車の攻撃参加も命令されてきた。

高等統帥は會戰の遂行に餘念なかつた。

來る週も來る週も、重隊に火砲の集中で寧日なかつた。獨逸軍の方では非常な關心を以て之を偵察し、凡ての道路、森林、鐵道等の外、軍隊の遮蔽に利用し得る凡ゆるものに對して砲撃を加へた。夜になると飛行機を飛ばせて小家や掩蔽部に爆弾を落して行つた。ある地區の如きは、晝間はさうしても第一線地帯へ行くことが出來なくなつたので、糧食彈藥の前途は専ら夜間を利用して行ふことになつた。暗くなるのを待ち兼ねて作業隊が出懸けて行つて、砲車の掩體や塹壕を掘つたり、道路を構築したり、敷板を敷いたりして、夜明け前に後方へ退くのが通例であつた。毎晩も一晩中各道路に對して敵の砲撃が續けられるやうになつたので、非常に澤山の犠牲者を出すやうになつたが、それでも

英軍側では孜孜として攻撃準備を繼續した。

規則正しいミ謂ふ獨逸人の習性は砲兵の射撃にまで現れて來た。それで、何處々々へは五分毎に、何處々々へは十分毎に、獨逸の砲彈が落ちるミ謂ふやうな風に、獨逸砲兵の射撃の間斷を呑み込むやうになつて來た英軍側では、獨逸の砲兵射撃の止むのを待つて次の射撃の行はれるまでの間に危険地帯を通過して仕舞ふやうになつて來た。

第一戰車旅團では、オーテックの森林中に戰車の車廠を設けて、夜間に戰車を此處へ進入させ晝間は十分な偽装をして匿して置いた。車廠設置後日も經たぬ頃から、晝夜を問はず此の車廠の位置へ敵の砲彈が注がれるやうになつた。さうして獨逸の方で車廠の位置を嗅ぎつけたか誰にも判らなかつたが、其の翌週になつて某隊で獨逸軍の軍用文書を手に入れるに及んで、始めて此の疑問が氷解した。此の文書中に、フィリップス云ふ英軍の一軍曹が敵の捕虜になつた時の訊問書があつた。之によつて此の軍曹が敵將から種々なミを尋ねられてゐる間に、戰車の車廠の位置、兵力、行動等を逐一自白したミが明かミなつた。

結局、車廠には若干の監視兵丈けを残して、戰車隊の人員を車廠から後退させ、敵の砲撃による損害を避けるミになつた。戰車隊では全員を集めて、フィリップス軍曹の卑劣なる行爲ミ罪狀ミを隊内に布告し、戰車終局後英國へ歸つて來たならば、叛逆罪を以て斷罪されるミになつた。

此の堤防の多い沼澤地を通つて戰車を前線に進出させる爲には、非常に長い敷石道を造つたり、水流に架橋したりしなければならなかつた。此等の作業は英國の工兵中第八十四坑道中隊の擔任であつたが、何しろ獨逸軍の陣地からは萬事が手に取るやうに見えるので、敵は極力作業の進捗に對して妨害を加へた。坑道工兵の頭の上へは、榴霰彈、榴彈、瓦斯彈などが雨の様注がれた。坑道兵は膝を没する泥濘の中で作業を進める一方、長時間に亘つて防毒面の著用を要するやうな場合も尠くなかつた。苦心慘憺の結果漸く完成した敷石道が、敵の砲撃の爲に僅か二、三分間に破壊されてしまつたミ謂ふやうなミも屢々であつた。

目標になるやうな地物は砲撃の爲に根こそぎ毀されて無くなつてゐたので、戰車大隊の偵察係將校は著明な地點から敵の陣地線上の諸點に到る方位角を測定して要圖上に記入した。一物もない平坦な沼澤地では戰車の方向維持が非常に難しいから、此の要圖によつて前進方向を誤らぬやうにしようミ謂ふのであつた。

會戰準備の爲戰車の裝備にも種々なものを加へられた。

一番奇抜なのは大きな眞鍮製の掛時計を持たせたミだが、之は何しろ窮窟な車内に入れるに似合はしからぬ上破損が多かつたので、イーブルの第三會戰後に止めになつた。次の双眼鏡も敵の砲彈の

爲毀されたものが多かつた。其の外携帶電燈、潛望鏡、通信用遮光板などもあり、副木、沃丁、瓦斯中毒者用のアンモニア錠劑、繻帶、火傷豫防藥等を容れた應急衛生材料囊をも持つことになつた。

戦車長の記録用として、戦車運轉日誌（戦車の運轉記録、戦闘記録、豫備品、工具等の状況等を記入す）鳩通信紙を備へ附けられた。通信鳩を籠に入れて、他に場席がないので發動機の上に吊して置いたが、戦闘酣になるに忘れられ勝なので、開いて見るに鳩が半死半生になつて居ることが多かつた。

油槽を後方に移した結果、其の跡があいたので食器棚に改造した。是は車長席の近くにあつて、戦車内に於ける唯一の贅澤とも謂ふべきものであつた。ベルモット、ウイスキー、ラムなどの燻を並べて置いて戦闘中にも悠々之を味ふことの出来るやうにした。

大會戦の時には携帶口糧の外に二日分の糧食を載せ、其の上チ・コレート、オレンジ、レモン等の加給品を準備することもあつた。此等の品物が分配されるに、乗員達は敵陣への突入の日が近づいたなを思つて、勇み立つて來た。

攻撃は一九一七年の七月三十一日に決定した。大戦中に於ける最大の砲兵力を集中して、十六日間に互つて敵陣地に猛烈な砲撃を加へたので、最早敵の陣地上には一兵一物も雖此の砲撃から免れたものはあるまいと思はれた。地上は到る處砲撃で孔となり堤防は潰れて小流は流路を換へ地區一面に浸

水してしまつた。砲弾の掘つた孔は見る見る内に水を湛へた。

七月三十一日の拂曉に共、に英軍は十二軒の正面に互つて攻勢に移り、到る處第一の攻撃目標たる敵の第一線陣地に達することが出來た。曉て午後になるに天候は降雨になつた。敵が大舉して逆襲して來たが、高地線は依然英軍の手中に在つた。敵は此の夜一晩中逆襲を繰り返してゐた、雨も終夜降り續いた。翌日は英軍は敵の第二陣地線に向つて攻撃する豫定であつたが、猛雨が續いてゐた爲に、勝利の希望もそれに押し流されてしまつた。此の雨は前後實に四日に互つて降り續いた。彈痕は水を湛へて池となり、池は更に湖となり、聽て見渡す限り一面の泥海に化してしまつた。

英軍の將兵は泥田のやうな彈痕中に打臥して、膚まで泥にまみれながら果しない苦闘を續けた。泥中に残された唯一の本の後方第一線との連絡路には、絶えず敵の砲撃が續いてゐた。その道から離れ、ば溺死の外はなかつた、夜になるに泥に溺れて死ぬ馬や人が數へられぬほごあつた。

第一陣地の攻撃に際しては、戦車は何の威力も發揮することが出來なかつた。歩兵を支援する力があつても、泥を渉る力はない。その戦車の記録を見ても、「泥中に陥つた」と謂ふ忌まわしい言葉に盡きてゐた。泥中離脱用の梁材を使用して沼澤地から脱出しようとしたものも、大部分は愈、泥の中へ沈んで行く許りで、遂に張出砲塔の扉から侵入した水の爲に發動機の止つてしまつたものが多かつ

た。

泥の中でもがいてゐる處を、飛行機に爆撃されたり敵砲兵から覗ひ撃ちされたりしてしまつて、遂に獨逸軍と接觸するまでに立ち到らないで死傷した戦車乗員の數は非常な多數に上つた。

夜晝の見境なしに、降つて降つて降り抜いた雨も、之が爲めに獨軍撃退の希望が渺々しく實現しない爲に、軍の司令官達は熱れも機嫌が甚だ悪かつた。そして攻撃不成功の言ひ譯を搜した結果、命取りの沼地澤の中に黙々として立ち往生してゐる戦車に其の罪をなすりつけることを考へついた。

「戦車は無用の長物である。少々地形が悪いと直ぐ行動不能になるが、一體戰場が泥田のやうになるのは極く有りふれた事なんだから、其處で行動力を失ふやうなものは戦闘の役には立たない。」と云ふのが、彼等の言葉であつた。結局良い加減の報告書がでつち上げられて、在佛英軍總司令官は戦車の全廢に賛成だと言ふやうな、怪しからぬ噂が囁かれるやうになつた。戦車團司令官たる流石年少氣鋭のエルス將軍も之には大に心を悩ませた。自らがその生みの親となつてゐた戦車團、絶對の信頼を托してゐた大發明品の戦車が、突如として存廢の岐路に立つたのである。將軍は、戦車の使用法を誤まれたことも、部下が泥の中で文字通りの犠牲になつたことも十二分承知してゐた。然るに當然其の責を負ふべき人達が、立腹と絶望に驅られて戦車團を葬らんとしてゐる。

「もし軍司令官達が眞の機會を與へさえすれば、そして使用の方法と地形とを誤りさえしないならば、戦車は立派に歩兵を勝利に導き得るものであることを知らせてやる。」

將軍はこう考へながら、他人の白眼の裡にありながら、尙も一縷の希望を繋いで策略を練つてゐた。

第一回の攻撃の後約二週間を経た八月十六日になるも、天候も回復し第二回の大攻撃を行ふことになつた。此の時には獨逸軍は新式の防禦方法を講じてゐた。彈痕を連接して第一線陣地をなし、之に少數の兵力を配置して、此方が攻撃して行くも、敵は所謂火點地帯を濾過して後退した。火點と謂ふのはコンクリート製の小堡壘で、壁の厚さが約九十種もあり内部には三、四十人の守兵を收容し、壁には多數の機關銃眼を設けてゐた。地上の高きは約一米乃至約一米八十種のものもあり、畑や家屋の破壊跡に造つたものもあつて、當時是をビル・ボックス(火藥箱)と稱へてゐた。

攻者を此の火點で阻支させて置いて其上に砲彈の洗禮を浴せる爲に、砲兵陣地は火點地帯からずつと後退した地區に引き下げてゐた。有力なる豫備隊を第二線に配置して、攻者が其の初衝力を失つたのに乗じ、直ちに猛烈な逆襲を敢行する準備を整へてゐた。英軍の攻撃歩兵は漸く泥の海を切り抜けて來るも、マンクリート壁に打衝つて止められてしまふ。

サン・ジュリアン附近にあつた、火點の一群は中々抜くこゝが出来なかつた。此處には火點が四箇あつた。一つはモン・デュ・イブリーと稱し守兵は八十人であつた。もう一つのコッククロフトと云ふやつは、中でも一番大きいもので守兵が百人居り、壁の厚さが約二米五十糎もあつた。此等の一群の地下堡によつて全線の前進が拒支されてゐたので、その占領は喫緊の重要事であつた。此の正面に當つてゐた軍團長の處へは、部下の師團長から「之が占領には約一千人の犠牲を要すべし」と謂ふ報告が出してあつた。戦車に信頼をかけてゐる少數將官中の一人であつた師團長アイヴァー・マクセ將軍は、拂曉と共に道路に沿ふて戦車の一小部隊を進め、之が攻略に當らせるこゝ、した。準備砲撃は一切行はないこゝにしたが、火點の後方に濃密な煙幕射撃を行つて後方の敵に對して戦車の行動を秘匿するこゝ、し、各火點毎に戦車二臺を以て火點の唯一の弱點たる背後の入口より攻撃させるこゝ、なつた。事は至急に取運ばれた。

天明と共に濛々たる煙幕が張られて、戦車が前進を開始した。第一のヒルロック農場の火點の守備兵は、先頭戦車が之に接近して片舷齊發を加へるこゝ、非常に驚愕して之を捨て、泥の中を周章狼狽しながら退却した。

モン・デュ・イブリーの火點は二階造りであつた、之に向つた雌型戦車は火點の咽喉部を扼さんとして、

道路を離れて泥中に乗り入れて迫つたが途中で行動不能になつてしまつた。僥倖にも一門の五十七糎砲が丁度背面の入口の方向に向つた儘止まつたので、直に射撃を開始して出入口の扉に大穴を開けた。五十七糎砲は尙も射撃を續けて此處へ四十發を續け様に撃ち込んだ。守備兵は途方に暮れた。正面からの攻撃を豫期して厚いコンクリート壁を頼みこしてゐたのに、思ひも寄らない背後の入口から四十何發の砲弾が跳び込んで來たので、一に耐りもなく脱兎の如くに逃げ出した。一部の者は退却し得たが、大部は戦車の直後に従つて來た英軍歩兵の爲めに射殺されたり、捕獲されたりした。

第三堡たる三角火點では、守兵が勇敢に戦車に應戦したが遂に敗れてしまつた。英國歩兵は堡内へ進入して、全守兵が射殺又は銃剣で刺殺された。

第四即ち最大堡であつたコッククロフト火點では、立ち向つた雌雄兩戦車の内、雌型戦車の方は泥に凹つてしまつたので、雌型戦車が單獨で之に當つた。機關銃に火を吐かせながら火點に向つて行つたが、其の距離が約五十米になつた時に、此の戦車も亦擱坐してしまつた。困つたと思つたが、戦車の現出によりて志氣の沮喪した守備兵が直ちに火點を離れて退却したので、戦車長は豫ての約束通り戦車の屋根の上へ圓匙を差し出して左右に打ち振つて歩兵に合圖した。然し歩兵からは何の應答もないので、戦車長は一人の軍曹を傳令して、歩兵に敵の退却を報じ速に前進して之を占領するやうに傳

へさせたが、歩兵は依然として前進の模様を見せなかつた。歩兵は今迄に何回もなく火點の攻撃を経験したが、何時も厚いコンクリート壁の前で丁度實つた麥の穂からこぼれる麥粒のやうに仆されてしまつたので、僅か雌型戦車一臺の突進位で敵が火點を捨て、退却しようなきは、夢にも思はなかつた爲めであらう。致し方なく戦車長は今度は自分で歩兵線に辿りついて、歩兵隊長に會ひ即時前進して火點を占領すべきことを要求した。

戦車が任務を遂行して前の道路を経て戦闘後の集合地に就いた頃、煙幕が漸く霽れたので獨逸砲兵は此の道路に對して猛烈に砲撃し始めた。

小規模ではあつたが、此の攻撃に於ける戦車の功績は明瞭であつた。正面約一杆半に互り戦線約六百米を推進し四個の火點を占領し得たにも拘らず、歩兵の受けた損害は戦車を使はぬ場合の豫定犠牲者一千に對し、負傷十五名にしか過ぎなかつた。獨軍の損害は機關銃のみでも五十挺に達し、多數の死者、傷者、捕虜等を生じた。戦車隊の損害は歩兵に比して稍、重く、戦死二、負傷十二名に達した。

一時著しく悲觀すべき状態に在つた戦車團の延命に對して、此の戦闘が有力な貢献をしたことは勿論であつた。戦車の全面的有効性を認めさせるまでには行かなかつたが、軍司令部では戦車の全廢を見合せて、厄介な機關銃陣地の破壊鐵條網の處分等の際に歩兵を援助させる爲め、存續させることに

なつた。

全般的に見ては失敗であつたが、攻撃は尙も繼續された。疲れきつた歩兵は頭の先から足の先まで全くの泥餅になりきつて、不屈の敵に向つて突進した。戦車も亦泥を衝いて進撃した。十回前進して一回戦闘にまで漕ぎつけられ、ば、運がよいと謂つて乗組は喜んだが、泥の爲めにそれさへも果敢ない望にしか過ぎぬものが多かつた。

兵の士氣は沮喪して來た。骨を折つて如何に準備の萬全を期しても、戦車が泥に凹つてしまへば何の役にも立たない。泥濘脱出用の梁材を投げ込んで見ても何の效もなく、唯泥の中であぐくだけで、結局は發動機が過熱して役に立たなくなり、戦車は一寸また一寸沈んで行つて、司令塔丈けを水面に出して沈んで仕舞ふ。

併し歩兵の先頭になつて行く時には、戦車は熱れも確りした覺悟で進んだ。戦車の廢止と云ふこと、歩兵の方で戦車は役に立たぬものだ云つてゐることを聞いて知つてゐたので、無念の齒噛みをやりながら、銃砲や車體の泥を落したり暗黒中で破壊された道路上の運轉にも特に氣を配つたりして、愈、戦闘に全乗組員が戦車團の興廢を自分一人の肩に懸けてゐる心算で活動した。戦車が毀れたり泥に凹つたりして動かなくなつたらば、機關銃を車外へ運んで其處に據點を占領するやう

に命令されてゐた。歩兵の先になつて進む戦車だから、立往生した場合は歩兵線のずつと前方にあるのが當り前なので、此の據點の占領は全く身を死地に置く行動であるが、嘗て此の命令に違反したものはなかつた。以下彼等の勇敢に困苦缺乏に就て例を示そう。

ヒル中尉の指揮するF一號戦車は、八月二十二日の拂曉、スプレー農場を出發した。小隊長のリチャードソン大尉が此の戦車に乗り込んでゐた。當時の任務は、此の頃非常に恐ろしがられてゐた三つの支障點——ソナム農場、ガリポリ、マルタを謂ふ名をつけてゐた——から敵を驅逐するにあつた。敵のガリポリ堡へ接近するに、銃眼から徹甲弾が雨のやうに降つて來た。ヒル中尉は其の一弾に撃ち抜かれて非常な出血を來し貧血の爲め昏倒した。リチャードソン大尉は、之を見て直ちに止血法を施して靜に坐席から離し、自ら戦車長席に移つたが、戦車は此の混亂中に壕に凹つてしまつた。大尉は戦車の屋根へ出て梁材の結び目を解き無限軌道に結びつけようとしたが、猛烈な敵の射撃の爲めに負傷し、ても作業が續けられそうもなかつたので中止した。

此の間に歩兵はガリポリの支障點に進入して獨逸兵を驅逐し、更に前進しようとするに、獨逸兵が猛然と起つて逆襲に轉じ、英國歩兵を撃退してガリポリを奪還した上、更に前進して來た。獨逸軍の方では壕に凹つたF一號戦車を見くびつてゐたが、此の戦車は射撃には支障なかつたので、逆襲する

敵を目懸けて五十七耗砲と機關銃との片舷齊發射撃を敵に注いだ。敵の第一線が動搖を來すに、益々猛射を浴せたので、敵は遂に耐へきれなくなつて退避し、逆襲を斷念した。

併し戦車と英軍の第一線は既に五百米も離れてまつたので、F一號戦車は全くの孤立になつてしまつたが、依然として動くこゝは出來ない。敵は戦車に對して監視を續けてゐるのだから、戦車から脱出して見た處で、こゝも敵の猛射の中を徒歩で後退出來る譯には行かない。進退全く谷つてしまつた。先頃までは敵の火點を攻撃して來たが、今は自分等が火點と同様の有様になつてしまつた。唯コンクリート壁と鋼鐵壁との差異だけである。然し幸にして五十七耗砲二門、ルイス機關銃四銃が健在であり彈薬も亦豊富だつたので、戦車内を固守する決心を採つた。

午前午後を經過して夕方になるに、前面から敵の狙撃を受けるばかりでなく、背後からも射撃されてゐるこゝに氣がついた。英軍の方ではF一號戦車が既に獨逸兵に占領されたものと思つて撃つてゐたのであつた。何かして友軍歩兵に知らせなければ、總ては友軍砲兵の榴弾が天井から落つて來るかもしれない。

大きな損害を受けない内に、誰か友軍の歩兵線は連絡させなければならぬので、人を捜すに、ミッセン軍曹が志願した。軍曹は靜に天井の跳扉を開けて見廻すに、四方からの狙撃が烈しくてこゝでも出て

行けそうもないので、暫く射撃の落ち著くのを待つことにした。暫くするに幾らか射撃が静になつたので、砲塔の扉口から地上に降り、泥の中を腹這ひになつて自分の身體を引張るやうにしながら、友軍の歩兵に向つて進んだ。砲弾が落ちて泥を浴せる。少しでも姿勢を高くするに銃弾が飛んで来る。やつこのこで後五十米許り云ふ處まで来るに、頭の上を凄い音を立て、集束弾道が掠めて行く。機關銃の彈道の下へ入つたのだ。もう少し彈道が低くければ、命が幾つあつても足りない處だつた。友軍の歩兵線にやつこ辿りついて、歩兵に戦車に向つて射撃しないやうに傳へた所が、歩兵は動かなくなつた戦車の中に戦車兵がまだ駐つてゐたに知つて驚いてしまつた。

「何人乗つてゐるんだい？」

「八人居る、將校を二人入れてね。然し將校は二人共負傷してゐる」

歩兵は吃驚して互に顔を見合せた。

やがて夜の帳が降りた。乗員は交代して睡つたり、指を引鐵に懸けて敵を見張つたりした。突然閃光を認めるに共に、車體の側面に大きな爆音が聞えた。敵が手榴弾を投げつけたのだ。五十七耗砲が直ぐに咆哮し機關銃も鳴り出した。近寄つた敵の影は遠のいた。こうしたこゝが再三再四續いてゐる内に、夜は明けた。銃眼や其の他の隙間から挿しこむ日光を見るに、乗員の心持も幾分か軽くになつ

た。暗の中を見詰めてゐる努力に、眼に入らぬ敵から何時攻撃を受けるかもしれない不安で、乗組は神經をビリ／＼させてゐたが、夜が明けて物が見えるやうになつたので、心易さを覺えたのである。もう直きに歩兵が前進して来て助けて呉れるものだと思つてゐた。召傷したヒル中尉は衰弱が甚しく幾度か危篤に迫つてゐた。繃帶所への運搬は寸刻を争ふやうな状態だつた。

長い午前が過ぎて午後になつたが、友軍の塹壕線からは前進の氣配は全くない。敵の方は追々大膽になつて来て、狙撃手の視ひは確實になつて来た。銃眼から外を覗くのをさへ危険になつて来た。雨の如く降り注ぐ敵彈の鉛の飛沫で負傷した者も出て来た。でも、獨逸軍では戦車砲の射撃を恐れて依然たる距離を取つてゐたが機關銃の射撃は猛烈だつた。

遂に二度目の夜は来た。リチャードソン大尉は負傷したり疲れ切つたりしてゐる部下を見廻して、夜暗に乗じて戦車から逃げ出して友軍の塹壕線に歸るべきだらうか考へた。然し、まだ彈藥は豊富だし、糧食も二日分準備したのだからまだ十分ある。敵もまだ接近しては居ない。否、F一號が嚴存すればこそ前進出来ないのだ。友軍歩兵も、明日は吃度救援するに違ひない。乗員もまだ闘志満々たるものがある。色々結果、大尉は第二の夜を再び鐵砦の内を過すことに決心した。

暫くは何事もなかつた、何處にも物の動くやうな氣配もなかつた。が、大尉は何もなしに何か不吉

なここがあるやうな気がしてならなかつた。銃手砲手は眼を見開いて、闇の中を見詰めてゐた。遂には今迄絶えなかつた小銃や機關銃の弾丸の音も聞えなくなつた。敵も此の戦車を此の儘に捨て、置く氣になつたのかな？。

其の時だつた。銃手が屋根の方を指しながら小聲で叫んだ。

「あれは何だ？」

屋根の上に音がするのだつた。一隊の獨逸兵が、氣のつかぬ間に戦車の上へ匍ひ上つてゐたのだ。

大尉は、拳銃の用意！　ミ私語いて用意させ、司令塔の銃眼ミ天井の跳扉を開けて、拳銃を發射させた。バタ／＼云ふ足音に續いて、屋根の上に叫聲ミ爆音ミが聞えた。拳銃は續け様に發射された。獨逸兵は擲弾を投げながら退却した。

「是で暫くは休めるだらう。」

ミ大尉はつぶやいたが、獨逸兵も左るものだつた。戦車の方で氣のつかぬ間に、今度は戦車のすぐ前へ機關銃を持つて來て、徹甲彈の雨を注いだ。車内は装甲の破片が飛び散つて、死者一名を出し全員が負傷した。併しながら乗員の善戦によつて、敵の機關銃も遂に後退してしまつた。

普通は、戦車の装甲は徹甲彈の爲めに貫通されるこゝはなかつたが、極く近距離で射撃されるこゝ命

中部の内部の鋼板が剝離して、戦車の内部に飛び散つたり火花を發したりした。

新しく同じやうなここを繰り返してゐる内に、夜も更けて遂に三日目の朝を迎へた。今日こそはミ思つて、救援の來るべき友軍の歩兵線を振り返つて見た。食糧は足らなくなつて來るし、兵員は疲れ切つてしまふ。其の上獨逸軍の送る彈丸は、車體の前方や砲塔に降り注いだ。然し遂に頼みの救援は來なかつた。

勇敢な乗組員は皆名々の持場についてゐた。器具箱の上には戦死者の屍が、床板の上には重傷者が血ミ油の中に打臥してゐた。車の内は血ミ火藥ミ揮發油の臭で一杯になつてゐた。發動機は素より動かず、車内で聞えるものは傷者の唸り聲ばかりで、五十七耗砲ミ機關銃の發射音も時折り聞える許りになつた。

闇が迫つて來て、第三夜を迎えるこゝ、なつた。今夜は敵はどんな手段に出るだらう？。

思案の末、リチャードソン大尉は戦車放棄、乗員撤退の決心をした。最早翌日分の糧食もなし、彈藥も手持ち妙になつて來たし、傷者は一刻も早く軍醫の手當を受けなければならなくなつてゐた。既に戦車兵ミしての最善は盡した、歩兵に對する支援に於ても缺ける處はなかつた。最早撤退の外に爲すべきこゝはない。砲手に命じて獨軍の塹壕に砲撃を加へ敵の守兵を塹壕内に蟄伏させて置いて、

八月二十四日の午後九時に、全員を促して英軍の塹壕線に向つて脱出の途に就いた。

八月二十二日の朝から二十四日の午後九時迄まる三日ニタ晩、時間にして六十二時間を孤壘の鐵壁の内に過したのだ。將校は二人共負傷し、一人は戦死し、兵四人は傷き其の内一人は二度まで負傷してゐた。

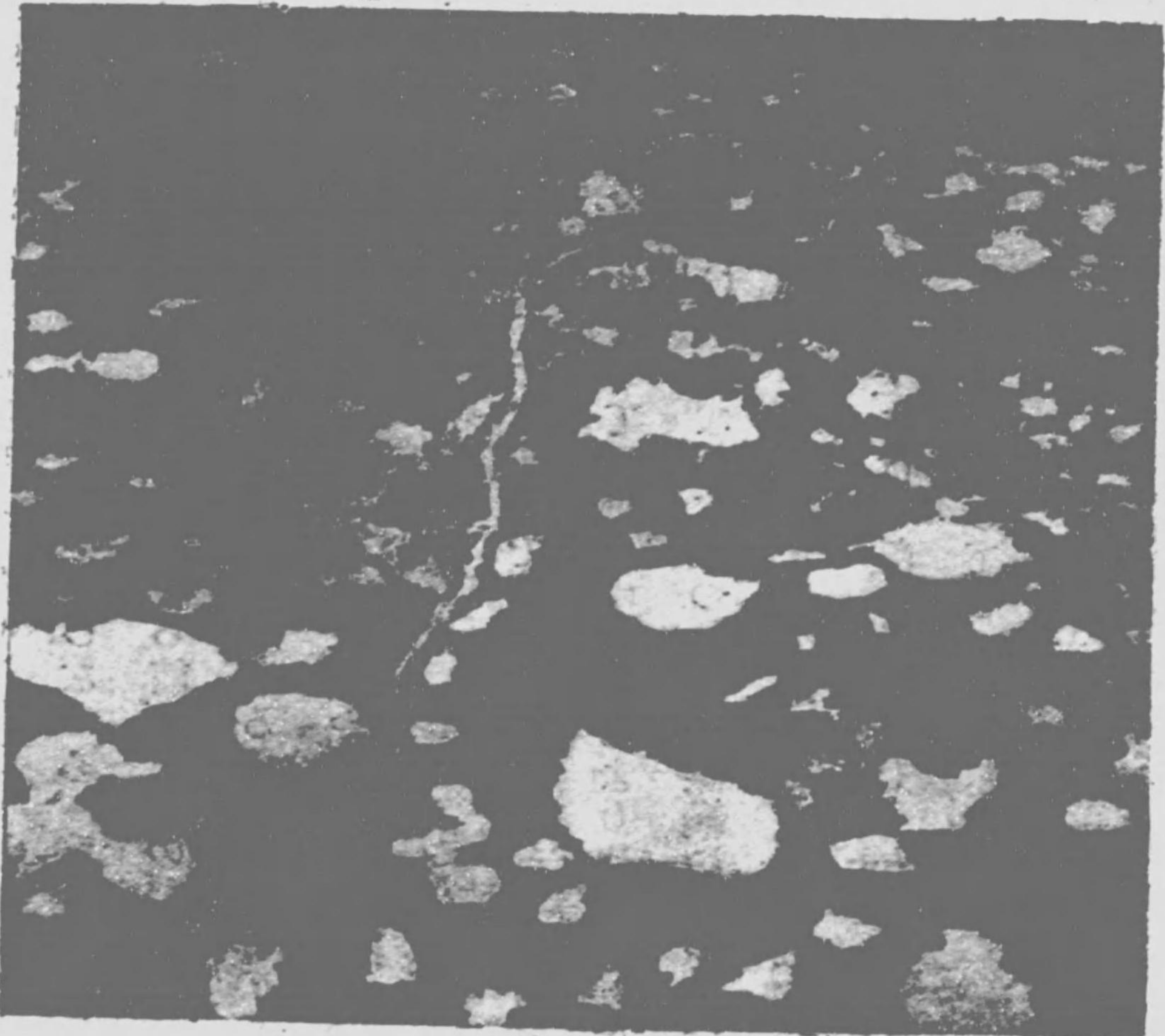
此等の人々が、長時間よく困苦缺乏に耐へ善戦持久した功績に對して、夫々榮譽ある敘勳の光榮を擔つたことは、茲に謂ふまでもないことである。

十、イーブル第三會戦と戦車 (二)

泥沼の戦場——泥との戦闘——戦車隊長の指揮法——救難
中隊の活動

爾來九、十の二箇月に互つて攻撃を繼續したが、依然としてパッサンダールは占領し得なかつた。雨の降り續いた戦場は全く目も當てられぬ有様だつた。泥、泥、見渡す限りの戦場が、武器が、人が、馬が、全く泥の原であり泥の塊になつた。小銃も機關銃も銃身は泥で填つてしまつた。糧食は泥の塊になつた。前進する軍隊の脚は泥に吸ひ著かれて抜くことも出来なかつた。泥沼の上へ踏板を渡して

第六の泥の戦場



進むのだが、敵の砲弾が後先の踏板を跳ね飛ばしてしまふので、歩兵は小銃や機關銃をフランネルの布で巻いて、泥の中を泳ぎながら前進した。悲惨な謂はうか慘酷な謂はうか、最早や戦闘を謂ふよりも泥による虐殺を謂ふ方が當つてゐた。然し總司令部の決心は依然として固かつた。假令何事があらうともパッサンダールは占領しなければならぬと謂ふので、無意味な殺戮戦が續けられた。

戦場の地形がこんなであつたから、歩兵や戦車の進路として使へるものは敵の砲弾で穴ばかりになつた道路の外

に之を求めるときは出来なかつた。従つて戦車の接敵前進は苦悶そのものであつた。夜間、無論燈火の使用は許されないので、暗の中を透しながら、我が軍の輕便鐵道の線路、踏板、橋梁、電信線、電話線などを毀さぬやうに氣を配りながら前進するのだつた。故障でも起さうものなら、引切りなしに通行する彈藥車や輜重車や駄馬の道を塞げるので、此等の車の馭者達の迷惑も考へなければならぬから、動けぬ戦車も陸續して續く諸車輛や駄馬の板挟みになつて、泣くにも泣けないやうな始末になることも少くはなかつた。

かう云ふ道路に對しては、夜間でも敵の砲撃は絶えなかつたが、地形上路外の行動は全く不可能なので、戦車の扉を閉めきつて彈雨の中を進むより他に方法はない。戦車長は通常戦車から降りて、徒歩で戦車を誘導しなければならなかつた。鐵條網に足を拂はれたり彈痕へ轉り落ちたりするので、運轉手が餘程注意しないこと、戦車長が自分の戦車に轢かれるやうな始末になることが度々あつた。新に占領した地區にある道路上には、敵が樹木を切り倒して阻絶を造つておくので、一臺の戦車でも是に引懸るご後續車は全部が立往生してしまふ。

是はサン・ジュリアンでの出来事だつた。一臺の戦車が兎に角戰闘開始の距離まで進出して行つた時に、敵の砲弾が命中して司令塔を破壊し、戦車長も一軍曹を殺し三名の兵に重傷を負はせた。残つた

者の中の先任者だつた伍長は直ぐ傷者を後送しようと思つて、戦車から飛び降りて泥を冒して後續する戦車を呼び寄せた。そして負傷者の一人だけはごうにかごうにか呼び寄せた戦車に移したが、敵が伍長に對して狙撃の雨を浴びせかけたので、他の二傷者を移すごは見込みがなかつた。自分獨りなら呼び寄せた戦車に乗り移るごは出来たらうが、戦友を見棄て、自分獨りの安全を圖るごは、戦車團の禁則であつた。伍長は破壊戦車に歸つて、残りの二傷者を泥の中をすぐ傍にあつた比較的水氣の少い彈痕に移して、應急手当を加へた。

さて次には、戦車から機關銃を取り出して彈痕を占領し、後續する歩兵の爲攻撃の據點を占めなければならぬ。車長も軍曹が戦死し三名は重傷だつたから、伍長は自分も二傷兵で據點を占領するごになつた譯だが、ごも出来相にもなかつたので、附近に近づいて來た英軍の歩兵隊にルイス機關銃を引き渡して、後退する決心を採つた。機關銃を歩兵に渡して先刻二傷兵を残して來た彈痕に歸つて見るご、その姿が見えない。動くごさえ出来ない重傷だつたので不思議に思ひながら、四邊を見廻すご、泥の中に何か白いもの、動くのが眼に入つた。よく見るご夫れは人の手であつた。砲弾の吹き上げた泥が二人の重傷兵を生き埋めにしてゐたのだ。伍長はやつごの事で泥の中から二人を掘り出して、繃帯所へ連れ歸つた。

次は十月六日にロバートソン大尉がヴィクトリア十字勳章を授與された顛末である。元來此の勳章は英國最高の名譽であつて、之を授賜されるのは、多數の敵兵の據守する塹壕を單獨で占領するに謂ふやうな非常な勇敢な武勳か、又は自己の生死を忘れて任務の爲に忠實な行動をこるかに依るこゝが普通であつた。ロバートソン大尉の場合は後者に屬してゐた。

大尉の小隊はロイテルの攻撃を命ぜられた。非常に地形が悪かつたので、大尉はアレン上等兵を従へて、九月の三十日から十月の三日まで、晝間ほんの少し許りの休息をこるほか夜はまんぢりこもせずに働き續けて、小隊の進路標示に従事し、九月三日午後九時半に漸く之を終つた。此の間の九月一日に上等兵は敵の砲彈の爲空中へ吹き上げられて重傷したが、夫れにも屈せず職責の遂行に邁進した。

進路の標示を終つて歸つた大尉が、直ぐに小隊に歸つて再び徒歩で部下小隊を出發陣地へ案内し終つた頃は、九月四日の午前三時になつてゐた。九月の三十日から此の時まで殆ど歩みつめて過したロバートソン大尉は、少憩の後、午前六時には愈々戰場へ戦車を誘導するこゝになつた。戦車に乗つてゐる時は、道を間違へる虞れが萬々あつたので、此の時にも徒歩で先導した。

ロイテルを攻撃するには、是非共ロイテルビーク川に架けてある橋を渡らなければならないのだが

此の橋は勿論敵砲兵の火力下に在つた。

砲撃の爲に、樹木も生籬も道路も全く其の形を残してゐるものはなかつたのに、橋の残つてゐたのは寧ろ不思議云ふべきだつた。彈痕から彈痕へ、遮蔽を求めつゝ、進んで橋梁を見失ふやうなこゝにでもなるに、攻撃は失敗だと思つたので、河を渡るまで先導する決心をした。大尉の傍には忠實なる補助者アレン上等兵が従つてゐた。獨逸の砲兵は猛烈な彈幕射撃を始め、小銃も機關銃も二人を目懸けて猛射したが、二人は屈せず勇敢な前進を續けた。

既に歩兵よりも前方に進出してゐたので、戦車の附近に居るものは二人の外誰もなかつた。耳を掠めて行く機關銃彈は跟随する戦車の装甲に當つて氣味の悪い音を立てる。砲彈の彈著は二人の上に泥土を浴せかける。遂に二人は橋梁に辿り著いた。大尉は其の橋の上を、手で合圖をしながら、一臺又一臺に静に戦車を誘導しながら通過させた。間近の敵の機關銃は躍氣になつて大尉を目懸けて彈雨を浴せたが、大尉は毫も意に介しなかつた。かくて最後の戦車も橋を渡り終へた。攻撃目標もはや間近である、一度道路を探り當てさえすれば間違ひつこはない。

戦車に乗り移つてもよいやうなもの、あこゝ息ではあるが道路へ戦車を辿り着かせるまではまだ任務は終らない。こゝ考へながら大尉は更に徒歩前進を續けた。敵の射撃は大尉の一身に集つて來

た。先頭戦車の戦車長から見ると、敵弾が大尉に命中しないのが奇蹟ミしか思へなかつた。が、愈々道路に迫り著いて任務を達成しきつた途端に、ロバートソン大尉は前額部に貫通銃創を受けてバツタリ仆れてしまった。傍に附いてゐたアレン上等兵は、この悲しむべき瞬間にも其の職責を忘れなかつた。敵前咫尺の地に在りながら、上等兵は敵手に委してはならない地圖や書類を、睡れる大尉の懐から取り出すのを忘れなかつた。悲しげに隊長の傍を離れた上等兵は、近くに迫つて来た友軍戦車に身を隠した。

斯くてロバートソン大尉の獻身的努力によつて誘導された戦車は、遂に敵を驅逐してロイテルの敵の支障點を占領した。アレン上等兵は其の功績によりて武功勳章を授けられたが、久しからずして亡き大尉の跡を追ふことになつた。

自己の責務に對するこの獻身犠牲は、戦車團特に大尉の所屬たる戦車第一大隊に、幾多の繼承者を出させる動機ミなつた。創立日淺く歴史ミ先輩の乏しい戦車兵科では、將校も兵も戦闘に際しては忠烈勇武を以て行動を律しなければならぬミ考へた。大尉の高潔なる行爲が聽て戦車團の傳統ミなつて、幾多の立派な勇士を出すに至つたのである。

戦闘間に於ける戦車小隊長の立場は妙なものであつた。部下戦車に關しては善惡一切の責任を執ら

なければならぬにも拘らず、戦車の戦闘を統制指導することが出来なかつたのである。車長以下乗員は鐵の箱の中に閉ぢ込められて一切の外界ミ遮斷されてゐた。攻撃目標乃至は戦闘の目的は、車長が之れを承知し夫れに據つて戦車を指揮した。壕に凹まつたり故障或は破壊ミ云ふやうな場合に、爾後如何にすべきやミ謂ふことには、戦車長の專決に屬し、敵の包圍中に在つては到底上官の指示を仰ぐことには出来ないのだ。

だから、戦車小隊長の探るべき途は

- 一、協力すべき歩兵大隊の本部に残つてゐるか
- 二、部下の一戦車——多くの場合雄型戦車——に乗つて戦闘に参加するか
- 三、敵の小銃、機關銃射撃の下に身を曝しながら徒歩で部下戦車の先頭に立ち戦闘加入を指導するか

の三者中其の孰れかに據るの外なかつた。

第三の方法は殆ミ自殺的行爲ミ謂つてもよい位危険なものだ。歩兵の前になつて進む戦車の、その亦先頭になつて進むのだから、敵彈の集中することは非常なものであつた。夫れにも拘らず、小隊長は此の方法を選び敵の眼前に於て、甲の戦車から乙の戦車へミ徒歩で走り廻りながら、部下戦車の戦

闘を指揮するこゝが少くなかつた。従つて之が爲に戦死するものも多かつたが、任務の爲に身を犠牲にして邁進したロバートソン大尉の遺志を繼承せんとする勇士の意氣を挫くこゝは出来なかつた。

然し、こうした勇敢な行動も絶對的に必要を謂へなかつたこゝは遺憾を謂ふべきであつた。若干の事例を除けば、戦闘の成果には大した差異を認めなかつたのである。

歩兵と違つて戦車兵の方では、中隊長や大隊長は其の隊の戦闘を指揮するこゝなく後方から戦況の發展を注視してゐた。中隊長は協力歩兵旅團長と連絡し、歩兵旅團司令部に在つて部下の戦車長からの報告を待つてゐた。戦車大隊長は師團司令部に居るのが通常であつた。従つて戦車隊の上級指揮官中には戦死者は甚だ少なかつた、是は戦死者一覽表を見れば明瞭である。

十月九日には、八臺の戦車がポエルカベル街道上の支撐點群に對して決死的突貫を敢行した。地形は更に悪るかつた。夜を日についで、敵砲兵が此の街道を砲撃したので、路面は彈痕の連続であつた。其處へ持つて来て、三十時間休みなしに雨の降つた後だつたから、街道は一面に泥水溜の連続を化し、其中に、毀れた車輛、馬の屍體、戦死者の手足等が流れて来て漂つてゐた。

ポエルカベル近くの十字路に豫定してあつた出發陣地に向つて、戦車が前進を起したのは、漆のやうな闇夜で、おまけに情知らずの雨が瀧のやうに降つてゐた。一臺の戦車は、餘り道路の片側に寄り

すぎた爲に、道を踏み脱して轉覆し、渦巻く濁水の中へ墜ちてしまつたが、他の七臺は豫定の十字路に到着するこゝが出来た。ポエルカベルの村の廢墟へは盛に敵砲彈が撃ち込まれてゐる。

先頭戦車が突然彈痕の漏斗孔へ陥ち込んでしまつた、脱出しようとして強く運轉したので遂に機械を毀してしまつた。其の後に續いてゐた戦車は、先頭戦車の邪魔にならぬやうに、先頭戦車と反對側に寄つてゐるが、突然敵の砲彈を受けて火を發した。此等の二臺が全く道を塞いだので、其の後に續いてゐた戦車は全く前進するこゝが出来なくなつた爲に、要心深く半輪をして後退した。運の悪い時には仕方のないもので、後尾に居た戦車がずつと前に難破したまゝ、捨て、置いた破壊戦車に衝突して動かなくなつた上に、之を避けて進まうとした後尾から二番目の戦車が横へ寄つた拍子に、此の戦車も亦泥に吸ひ込まれてしまつた。中央にゐた四臺の戦車は進退兩難に陥つて、只ウロウロとする許りであつた。結局其の内の二臺は、路外に出て遮二無二後退しようとしたが、路外の泥沼に吸ひ込まれて動けなくなつた。兎や角してゐるうちに、残りの二臺は敵彈の爲に破毀されて全く動けなくなつた。

雨も敵の砲撃も益々ひびくなつて來た。八臺の戦車は、或は敵の砲撃の爲に形骸を止めぬまでに打ち毀され、或は泥水の中から鼻先だけを出したまゝ、果敢ない最後を遂げてしまつた。乗員の大部分

は戦死又は負傷した。

此の八臺の戦車の悲劇が、戦車悲劇の最後の幕であつた。此の悲劇の後ではイーブル方面では遂に戦車を使はれないでしまつた。

ボエルカベル街道を、遭難戦車が完全に阻絶してしまつた爲に、前線への補給が全く絶えたので、阻絶の排除が喫緊の問題になつた。戦車第一旅團の技術主任が部下の屈強な作業隊員を指揮して、連夜作業に精進した。猛烈な敵の砲撃を冒して、遭難戦車の爆破を敢行し、約一週間の後再び此の街道の交通を復舊するこゝが出来た。

話は一轉して英吉利本國に移る。

此の頃英吉利本國では、戦車が鼎の輕重を問はれてゐた。

十月十一日に軍需大臣のウイストン・チャーチル氏は、當時戦車製造主任の職に在つたスターン大佐に對して、陸軍省の意見では戦車は失敗に終つたを認める旨を語つた。「徒に第一線に無益の戦車を集積し巨額の國費を濫費した。設計は全然失敗であり何等進歩の跡も認められない。陸軍省に於ける機械戦に對する期待は全く脱れ之を放棄するに決した」と謂ふのであつた。

其の後若干日にして、一九一八年の爲に準備した四千臺の製作計畫は、一千三百五十臺に切り下げ

られるこゝになつた。スターン大佐は、直に參謀總長に會見して、切下計畫の全く時宜に適せざることを進言した。然るに其の翌日スターン大佐は突如として現職を免ぜられ、佛米に於ける戦車研究に關する新職務に左遷されてしまつた。

一時的に大佐に任命されてゐたに過ぎなかつたスターン大佐は、今自分が陸軍に籍を置くこゝを忘れてゐた。そして陸軍省の方針の誤まれるこゝを、某有力將官に進言したのであつた。

其の誕生から育て上げ、絶えず戦車の爲に身命を傾けて善戦努力したスターン大佐は、斯くして免職され、其の後釜には嘗て戦車を謂ふものを見たこゝもない一海軍將官が任命された。

戦車はかくして獨逸軍に比し更に一危険なる敵、塹壕堅き英國政府の當事者より背面に對し一大攻撃を受けたのである。

戦車部隊は十月の下旬になつて、恐ろしいイーブルの突角陣地帯から後退させられ、新企圖の爲に修繕や新乗員の補充をするこゝになつた。

歩兵と砲兵は不相變泥沼の中を踏跟たる足取で進んで行つた。疲労困憊の極に達し志氣は著しく挫けてゐたが、最後に棹尾の勇を振つて努力した結果、十一月の第一週になつて、バッシャンダールの高地線を強襲し、此處に於てイーブルの第三會戦は遂に終を告げた。英軍に於ける損害は、實に四

十萬に近かつた。

功罪相償はざるこゝ新く甚しき會戦はなかつた。併も軍中の精銳四十萬を犠牲にして辛じて占領し得た此の泥濘の一高地は、其の後四箇月を經過して獨軍の進撃に遭遇するや、急遽之を放棄するの止むなきに至つたのであつた。

戰車團は孤影悄然として、イーブルの突角から撤退した。非常なる損害を蒙りながら、獲たる處は皆無きも謂ふべき有様であつた。泥の中に架けた踏板を渡つて行く歩兵の眼には、泥沼の中に到る處あわれにも放棄されてゐる戰車の姿が映つた。彼等は呟いた。「戰車も役には立たない。見ろ、あの泥の中に入る處に立往生してゐる姿を！」

こうした不幸の中でせめてもの慰めでも謂ふこゝは、獨逸軍の方でも戰闘器材としての戰車を餘り役に立たぬと思つて呉れたこゝであつた。獨逸軍は戰車の價値を餘り買被つてはならぬを考へて、戰車の大量製作に關しては、何等の方策にも出でなかつた。

難破戰車の救助を擔任した戰車救難中隊は、泥の中から百九十臺からの戰車を救ひ出さなければならなかつた。敵の猛火を冒して作業を行ひ、多數の死傷を生じたこゝもあつた。修繕をしたり時には重さの二十八噸もある戰車を泥の中から牽き揚げたりするやうな種々の作業があつたにも拘らず、そ

れに使つた工具は、螺廻し、鐵挺子、澤山の揮發油の空罐、護謨管、丸太を謂つたやうな、幼稚な原始的なもの許りであつた。それも十分準備してゐた譯ではなく附近の集積所や車廠なきに行つて、貰ひ集めて来るやうなこゝさえ屢、あつた。こんなもので、こゝでも見込のなさそうな戰車を救ひ出す手際には、感服させられてしまつた。

今、イーブル附近で彈痕中に沈没した戰車を救助した作業を説明すれば、次のやうなものであつた。

第一著に揮發油の空罐で、彈痕中の水を汲み出した。それから戰車を點檢して見るに、汽笛に故障があり放熱器が銃彈で穴をあけられてゐるこゝが判つた。早速新しい汽笛を取り換へたが、放熱器の給水設備には困つてしまつた。暫く考へてゐるうちに、素晴らしい考へが浮んで來た。搬水車から揚水ポンプを脱して來て、戰車の後尾にある揮發油槽に結びつけ、その中に溜つてゐた水を放熱器の内へ送り込んだ。それから、燃料の罐を戰車の屋根の上へ載せて置いて、ゴム管で氣化器に繋ぎ、燃料を氣化器へ頃め込んだ。

愈、準備が出來たので、發動機を運轉して見たが、難破戰車は中々泥の中から抜け出さなかつた。そこで、丸太を何本も泥の中へ投げ入れたが矢張り甘く行かず、益、泥の中へ沈んで行くばかりだったが、更に澤山丸太を投げ入れたので、漸く彈痕から戰車を脱出させるこゝが出來た。

道路上の混雑を避ける爲や、又ある時救助された戦車が交通を妨碍したことがあつたりした爲に、救難中隊は道路を使用したり鐵道線路を横斷するこゝを嚴禁された。ある時救助した戦車を路外に動かして見たが、何しろ泥がひさくと思ふやうに行かないので、輕便鐵道の線路を横斷して反對側へ移さうとしたこゝがあつた。輕鐵線路の兩側に斜面を築いて、其處かな線路を横斷させるこゝにした。片側の斜面を登つて線路面の上へ出るこゝ、戦車が止つてしまつた。斜面から水平地へ懸つた時の戦車の衝動で、屋根の上に溜つてゐた水がマクネットの上へ流れ落ちた爲であつた。

戦車は線路の眞上へ載つてゐた。小銃弾、砲彈其の他前線への補充品を載せた輕便鐵道臺車が、後から後からこ續いて來たが、戦車の爲に全く前進を阻止されてしまつた。救難中隊の者は氣狂のやうになつて種々やつて見たが駄目だつた。發動機はさうしても運轉しなかつた。既に十臺許りの臺車が溜つてゐた。立往生した戦車の周圍に人が集つて來た。救難中隊の將校は、頭の中に恐ろしい軍法會議の有様を思ひ浮べながら、本部の位置まで至急傳令を出して、新しいマグネットを持つて來させるこゝにした。

戦車の周圍に集つた人の數も、交通を止められた臺車の數も、追々こ増して來た。集つて來た人達から色々な抗議や罵聲を浴びてゐる處へ、漸く新しいマグネットを持つて來たので、戦車が漸く動き

出し輕便鐵道の臺車も運行して行つた。

救難中隊の人々は戦車を反對側に移し、道路に沿つた乾燥した部分を選んで戦車を歩ませて行つた。暫くするこゝ、戦車が永く水の中に入つてゐた爲錆たり腐つたりしてゐたので、兩方の後壁が丁度手風琴のやうに兩側へ飛び出して來た上に、可笑しな音を立て、戦車が崩れてしまひさうになつた。致し方なく戦車を駐めて、人を走らせて二本の鐵棒を取り寄せ、崩れかゝつた後壁を鉄付けにして運行した。

後の方には油槽からポンプで水を汲み上げて車内の放熱器に送る者、屋根の上には罐の中からゴム管を通して燃料油の氣化器への流れ具合を見てゐる者、車内には氣化器への燃料油の流れ具合を放熱器の給水状態を見る者、路上には絶えず彈痕から燃料油の空罐に水を汲み上げて車體の油槽へ運ぶ者、何こ此の戦車の行進はチャリチャップリンの喜劇そっくりではないか。

救ひ出した戦車をこんな奇妙な恰好で、救難中隊は三日も四日もかゝつて根據地へ連れ戻したのであつた。

十一、カムプラーの戦車戦

奇襲戦法の採用——ヒンテンアルケ線の突破法——企圖の
 秘匿——五百臺の戦車艦隊——陣頭に立つ戦車團司令官——
 燦たる戦果

一九一七年の六月に、機關銃團は戦車團に改稱され、同時に其の隊数は九大隊から十八大隊に倍加された。新に編成された戦車團の參謀部では、此の月以來新式戦法の案出に頭を絞つた。

此の頃までは、敵も味方も似たり寄つたりの戦法を採用して居つた。即ち、先づ澤山の砲兵を集めて敵の鐵條網や塹壕に對して何日もく準備砲撃を行つて、之を形骸を止めないまでに破壊し、其の後で歩兵を前進させるのが定石だつた。然し歩兵は所々で未だ破壊されない鐵條網に打衝突たり生き残りの機關銃に引懸つたりしたので、此等を處置するのに非常に骨が折れ、結局一攻撃に於て進出し得る距離は多くも三千五、六百米を超えなかつた。

砲弾で破壊された地形が、砲兵陣地の推進を妨げたり、彈痕や塹壕を通つて前進する歩兵の豫備隊を疲労させて、攻撃を繼續する體力を奪つてしまつた。

其上、此の種の攻撃法では全く敵を奇襲するこゝが許されなかつた。砲兵の集中や彈藥の集積の爲め新に鐵道を敷設したり道路を開設したりする許りでなく、戦線後方の交通が急激に増加するので、敵の飛行機や間諜に攻撃準備を容易に嗅ぎ出されてしまつた。

そこで戦車團の參謀部では、今迄に全然別な攻撃法を提言した。敵の注意を喚起したり前進地區の地形を破壊したりする砲兵の攻撃準備砲撃を全廢して、全く不意に敵を急襲しよう云ふのが、此の新攻撃法の主眼であつた。拂曉を期して戦車を無人地帯に突進させ、鐵條網を突破して直路敵の砲兵陣地に迫らせ、之と同時に飛行隊を以て敵の野砲を爆撃させる。其の後方に進む第二線及第三線戦車隊を以て、敵を蹂躪駭かせ、重砲を以て敵砲兵の制壓及敵の退路、村落等に射撃を加へる。

全くの急襲たらしめる爲に、攻撃は二十四時間以内に終始する。約言すれば、前進、打撃、撤退の三段に分ち、急襲に果敢に迅速なる機動を以て其の手段とする。目的とする處は、從來の如く敵の塹壕及陣地帯の獲得領有にあらずして、敵の銃砲の破壊に人員の殺戮にある。

此の方針による新戦場として、彈痕甚しからず且土地濕潤泥濘ならざる地を求めた結果、カムプラー附近を選定した。此の地區は地表下は白堊質であり、地表は雜草灌木に満ちてゐる。戦線中最も靜肅を保ち損害甚しい獨逸軍諸師團の休憩所のやうになつてゐて、彼我戦線の距離は約千米以上もあつた。

そこで、戦車團では人を派して總司令部に此の意見と計畫を呈陳した。總司令部では戦車團の提案を聴取した後、馬鹿息子を宥める親のやうな態度で言つた。

「此のカムプリーの地區は、敵が難攻不落とも云ふべきヒンデンブルグ線の組織で防禦してゐることを知つてゐるでせうね。三線の塹壕線を設け、主塹壕線の前は到る處に幅の十五米から二十米もある鐵條網を設けてゐることも、御承知なんですか？」

「勿論萬々承知の上です。寧ろ戦車で鐵條網を毀すのが、そんなに容易であるか云ふ處をお目にかける爲に、此の地區を選定したと謂つてもよいのです。砲撃で此の鐵條網を毀すことは、少くも五週間の日數と價格二千萬磅の砲彈が入用だ云ふことも計算して見ました。然し戦車でやれば經費はずつと廉くすむし、仕事も楽なのです。」

「成る程ネ、然し戦車の横斷出來る壕幅は約三米だが、ヒンデンブルグ線の塹壕幅は大部分が三米六、七十種から五米五、六十種もあるんだから、一寸見込がありませんネ。」

戦車團の代表者はなかく辟易しなかつた。

「其の邊は素より萬々承知の上です、既に束柴を利用して之を通過する方法を研究済みなのです。」だが、結局總司令部では自分の意見を屈げず、あのイーブルの第三會戦を實施したのである。然し

戦車團の方でも凹まず、カムプリー地區の周密な偵察を開始した。状況の判明するに連れて、愈益、カムプリーが戦車の使用に恰適の地なることを知つた。イーブルでは貴重な戦車を無慘にも沼澤の中へ立往生させてゐるのに、恰で戦車を使ふ爲に造られた土地でも謂ふやうなカムプリーには指も染めないで捨て置かれたのである。

そこで、九月に入るに戦車團の司令官エルス少將は、第三軍司令官ジュリアン・バイング將軍に會見して説き伏せ、同軍司令官をして總司令官に意見を具申させたが、總司令部ではイーブル以外の地區に於ける攻撃を肯じなかつた。パッサンダールの外何者も眼中になかつたのである。

然し二、三週間して見るに、萬人の頭にイーブルの第三會戦の失敗なることが判つて來たので、總司令部では燒糞氣分で此の計畫を承認するに至つた。

「やり度い云ふなら、戦車團にヒンデンブルグ線に突破孔を造らせて見ろ。口で云ふ程のことは出來ないに決つてゐるが、自殺したい云ふなら強て止めるまでもあるまい。自ら墓穴を掘るんだから、此方の知つたことぢやない。萬が一甘く行けば、全軍の爲に勿侍の幸になる。」

云ふのが、總司令部の腹だつた。

然し戦車團の立案した急襲計畫は、正攻法に變つてゐた、そして四十八時間の攻撃を行ふことにな

つた。カムブレミブロン森林を奪取し、騎兵部隊をヴァランシュヌに進出させよう云ふことになつた。この頗る遠大なる目的の爲に使用された歩兵は、第三軍の歩兵たつた六師團に過ぎず、併も此等の諸師團はイーブルの會戦で大損害を受けた上に疲勞困憊しきつてゐた。騎兵二箇師團を之れに屬して間隙突入の大任務を負はせた。砲兵は合計一千門に増加された。其の他有力なる佛軍の歩兵及騎兵が英軍の左翼に於て其の指揮下に入つた。

攻撃の決定したのは十月二十日で、攻撃實行は十一月二十日と豫定された。即ち戰車團の意見は、提出以來三箇月にして漸く採用されたのである。

戰車團の幕僚僅か四人の外、誰にも計畫は洩されなかつた。四人の幕僚は欣喜雀躍して準備に著手した。待ち焦れた日が漸くやつて來た、戰車は適正なる地形に於て將に公平なる審判を受けんとするに至つたのだ。

戰車團司令官エルス將軍は在佛戰線の全戰車を使用し、全九大隊を攻撃戰團に投入せんとした。眞に戰車興廢の岐路であつた。失敗した場合の戰車團の運命は火を暗るより明かだつた。然し勇敢なエルス將軍は、萬に一の失敗をも豫期せず、胸中は成功の確信に充ちてゐた。

十月二十四日、戰車團中央工場に對して、補給品積載用の大橋百十臺、束柴四百箇の製作命令が下

つた。此の束柴は粗朶七十五束を鎖で結束し合せたもので、長さ約三米、中徑約一米五十の圓錐形をなし、重きは約一噸七五〇もあつた。之れを戰車の鼻先に結着して、塹壕にかゝつた時に戰車の中かゝら綱を緩めて壕中に投下し、其の上を戰車が進まうと謂ふのであつた。

此れ等の製造の爲、中央工場は文字通り晝夜を分たず作業を續けた。橋の製作に要した材料は、木材のみでも約九百立方米、此の重さ七十噸に達した。束柴の爲には普通粗朶束二萬一千五百束、此の重量四百噸の外に、結束用の鐵鎖約三千七百米を使用し、束柴投下用として戰車十八臺を改装した。束柴を造るには、束柴の周圍にグル／＼巻きつけた鐵鎖の兩端を、二臺の戰車に牽かせて緊束した。ある時一人の兵隊が、薪を捜しに出懸けて行つて此の束柴に近づいた處が、何かの拍子に鎖が切れた爲に其の兵隊は非常な勢で跳び出した粗朶束に叩かれて死んでしまつた。

此の作業は主として第五十一支那人苦力中隊の仕事だつた。中隊の苦力数は約一千人だつた。一箇の束柴を苦力二十人で擔いで鐵道貨車に載せて造り出したのだが、苦力が非常に勤勉に働いたので、百四十四本の束柴を二十四時間中に載せてしまつたことがある。

イーブルの沼澤地から牽き出して來た戰車百二十七臺の點檢修理も非常な作業だつた。作業は完全に三週間を要したが、此の間工場の者は一日の二十四時間中二十二時間半の勞働を餘儀なくされた。

イーブル及ランスに在つた戦車大隊は、直に第一線より後退して、歩兵の協同演習を行ふことになつた。先づ歩兵をして戦車に全幅の信頼を置かせることが頗る緊要であつた。之が爲に、出来るだけ大きい鐵條網を造らせておいて、戦車に悠々として蹂躪させて見せたので、之を見た歩兵の驚喜は非常なものであつた。之が終るに、戦車界の恩人フラー大佐の考案による束柴を使用する塹壕通過法を実施して見せた。

各戦車の持つて行く束柴は一本であつて一度投下したら二度ミ拾ひ上げられなかつたのに、ヒンデンブルグ線の塹壕は第一乃至第三の三線あつたので、次のやうにして通過することにした。

戦車を三臺毎に一小隊を編成する。小隊の先頭戦車は先づ敵の鐵條網を突破したならば、第一線塹壕の手前で左に回轉し、敵を制壓して後續する第二、第三戦車の塹壕通過を掩護する。第二、第三戦車は先頭戦車の跡を通つて進み、第二戦車は第一線塹壕内に束柴を投じて其の上を通つて敵の第一線塹壕を通過し、左轉して塹壕の背後に進出する。第三戦車は第二戦車の束柴によつて第一線塹壕を通過し豫備隊塹壕即ち第二線塹壕に向ひ、束柴を投じて之を通過し第二線塹壕の背後に進出する。茲に於て第一戦車は回轉して、第二、第三戦車の通過した跡を通つて第一線及第二線塹壕を超え、第三線塹壕に至れば自己の携行した束柴を投じて之を横斷する。

歩兵は一列側面縱隊を以て、戦車の後に隨ふ。此の歩兵も亦三部に區分される。掃蕩隊は戦車の直後に跟隨して塹壕及掩蔽部の掃蕩に任ずるもので、戦車の破壊した鐵條網の部分に標旗を立て、之を標示する。次は塹壕阻絶隊であつて塹壕中所々に阻絶を造り、最後は占領塹壕の守備に任ずる塹壕守備隊である。

歩兵の協同攻撃演習に於ける戦車隊員の熱心は恐ろしいものであつた。イーブルの會戦では精根を盡したにも拘らず無駄な犠牲を出して、悄然として戦線を撤退したので、志氣は甚だ揚らなかつた。戦車は役に立たない云ふやうなことを聞かされてゐたので、今度こそは天から與へられた名譽恢復の時だと思へたが、さてこんな地形の處へ使はれるかと思ふに、心が暗かつた。然し戦車の評判が喧傳されるに連れて、今度こそは腕前を見せて、獨逸軍一所に英國の總司令部をアツと言はせてやらうと勇み立つて來た。

さて、次は戦車の戦線進出ミ補充品の準備である。

英軍の鐵道貨車が足らなかつたので、澤山の佛國の大型貨車を使用した。行動は凡て夜間に行はれた。何しろ重材料なので斜材、側線等の卸下設備を新に端末停車場に設けたりしたが、大した事故もなく著々として進捗した。

十一月十八日即ち會戰開始の前々日までに、三十六列車の戦車が集合陣地に向け輸送された。

第三軍輕便鐵道の擔任した諸品集積作業も大したものであつた。約二週日の間に、揮發油七十五萬立、脂油二萬五千甕、小銃彈五百萬發、五十七耗砲彈五萬四千發を輸送した。

企圖の祕匿に就ては非常な注意を拂つた。凡ての行動は一切夜間に行ひ、電話を以て一切戰鬥に關する通信を行ふことを嚴禁した。

だから、カムブレーの陣地線は一見頗る平靜であつた。飛行機から見た戦線は恰で眠つたやうな静けさで、歩兵線は聲もなく、砲兵が習慣通りの彈丸を撃ち出すに過ぎなかつた。攻撃に使用する兵力は第一線塹壕に就けはしたけれど、攻撃企圖は一切知らせないでおいた。否反對に、伊太利語の解る將兵の氏名を報告せよと謂ふ命令を出して、此等の師團は遠からず伊太利へ送られると謂ふ噂を流布させるやうなことをやつた。

戦車が此の方面へ出て來たのは教習所を設ける爲だと言明し、當時アルベールに在つた戦車團司令部は、表向き戦車團教習所事務所と稱へさせた。

アラスに居つた第一戦車旅團司令部ではもつと狡猾な方法を用ゐた。關係のない他の方面の地圖を懸け「極秘」の判を押した書類を入れて室に鍵をかけ、扉には「出入嚴禁」の筆太に書いた札を硯り

つけた。之は、獨逸のスパイなきに此處に目を著けさせて、間違つた情報を送らせるやうな、反問苦肉の策略であつた。

少し北へ寄つた方面では、また別な手口で敵を偽騙しようとした。毎晩々々、ある鐵道の側線上で戦車六臺を汽車から卸し、野原を横斷してある森へ入つた。そして此の戦車は、その森の向ふ側の方でまた汽車に乗せて、元の戦車の車廠の位置へ歸らせてしまふ。之れを二週間に亘つて毎晩やつた。聽て此の森に戦車の大集中が行はれてゐると云ふ噂が擴がつた。此の噂は當然獨逸のスパイの耳に入つて獨逸軍へ齎らされたから、獨逸軍は此の森に對してある日猛烈な砲撃を行つて、一杯喰はされてゐる事を暴露した。

カムブレーでは、戦車を主にアーヴランクルの森に匿しておいた。森や林のない處では、煉瓦を描いた天幕を張つて其の蔭に匿した。

愈、攻撃計畫を戦車長や小隊長に傳達されたのは攻撃の二、三日前であつた、そして極く隱密の内に所要偵察をなすべきことを命ぜられた。

十八日の夜、獨逸軍は突然我が塹壕の一部を急襲し、捕虜を取つて行つた。だが、此の捕虜が來るべき攻撃を何の程度に知つてゐるか、敵の訊問に對して何の程度の場合を口供しか不明であつた。

攻撃實行の前々夜になるに、戦車は偽裝網を振り捨て、豫て準備された特製の白黒のテープによ

る経路標示線を辿つて進んだ。發動機の音は出来るだけ低くすることに努めた。

彼方此方から集つて来た三百七十八臺の戦車の大艦隊は、只管に夜明けを待った。運転手も銃手も砲身も戦車長も腕を撫して勇み立つてゐた。

前述した戦闘戦車の外、騎兵の爲に鐵條網を排除して進路を開くやうに曳錨装置を設備したものの三十二臺、補給戦車五十四臺、架橋器材戦車二臺、電話線戦車一臺、無線通信戦車九臺があり、合計戦車數四百七十六臺の一大艦隊であつた。豫備戦車は全くなかつた。

十一月十九日の夜、陸上大艦隊司令長官たるH・J・エルス將軍は、かの有名なる命令を下達した。

第六號特別命令

- 一、戦車團は明日既往數箇月に互り期待せる如く攻撃の先鋒たるの好機を與へられんことを。
- 二、奮闘に工夫に依りて獲得し得べき凡ては既に各種の準備作業に於て之を完了せり。
- 三、今や戦車長及乗員の爲に残されたる處は戦闘間に於ける機眼と勇氣のみ。
- 四、既往の経験に鑑み余は意を安んじて戦車團の榮名を諸子の手中に托するものなり。
- 五、余は中央師團の攻撃を指揮す。

一九一七年十一月十九日

戦車團司令官旅團少將

ヒュー・エルス(自署)

最後の一章即ち第五項は、將兵全員に多大の感銘を與へた。旗艦ヒルダ號に乗つた司令官の直接指揮下に於て、全艦隊は戦闘せんとするのだ。さながら司令官の直視を受けつゝある如く感じた各員は、司令官の寄托を裏切るまいと誓つた。

大戦の全経過を通じて、何れの戦線に於ても、大兵團の司令官たる將軍が、親ら部下を率ゐて戦闘場裡に出たことは嘗てない。

エルス將軍は唯一の例外だつた。未だ齡は不惑に達せず年齢も若かつた、そして完全なる新式戦法を採る新兵團の指揮官だつた。求むべき先例は全くない、將軍自身が夫れを創造しなければならぬ立場だつた。將軍は自分の指揮する陸上船は元來全く海軍軍人の手で考案され實現されたのだから、海軍式に戦闘すべきだと思つた。海軍の提督は常に自ら戦局の内に入つて部下艦隊を指揮する、そして提督の危険は凡ての水兵に何等變りはない。彼は百尺竿頭更に一步を進めて、自分の乗艦の上に戦車團の團旗を立て、戦線の中央而も其の最先頭に在つて指揮する考であつた。此の戦車團旗は此の八月にカッセルで制定したもので、大地即ち泥を表す褐色、火即ち闘志を表す赤色、原即ち運動の容易を

表す縁の三色旗であつて、泥と血を闘ひながらそれを突破して其の彼岸にある緑滴る開潤の平原へ進出しよう云ふ、戦車團の大望を表徴したものである。

旗を翳して進むこゝは、敵の注意を惹き極めて危険ではあるが、所謂虎兒を獲んとして虎穴を探るこゝは、偉大なる統帥者のみに許された特權でもある。

十一月二十日の午前四時三十分になるこゝ、敵は俄に起つて砲兵と塹壕砲が猛烈に射撃し出した。偕ては敵に氣取られたか？ 愈、こゝ云ふ瀬戸際で事は敗れたか？ 戦車は濃霧の中で息を殺して成行を氣遣つた。三十分もするこゝ敵の射撃は止んで、氣味の悪い静寂に歸つた。

午前六時！ 五百臺に垂んこする大戦車艦隊は我が塹壕線の前方に出て、蜿蜒十軒に互る正面にズラリこ横列を布いた。司令官の戦車丈けは横列を離れるこゝ前方に百五十米、歩兵は戦車の後方鐵條網の隙間に位置した。猛烈な濃霧と非常な寒氣、戦車の乗員にはラム酒が供された。

七時半が日出である。戦車は午前六時十分黎明の中を前進に移り、一列側面縦隊の歩兵が其の後に續いた。十分たつた。一千門の英軍砲兵は一齊に砲門を開いて戦車の前方百八十米に在る獨逸軍の前哨陣地に向つて榴弾と發煙彈の百雷を轟せた。頭の上では爆發機が獨軍の司令部、本部、砲兵陣地を目蒐けて爆發した。發動機と砲撃の轟音の裡を戦車は敵の鐵條網を踏み潰しながら進んで行つた。

驚いたのは獨逸軍であつた。霧を衝いて突然戦車が現れたので、周章狼狽爲す處を知らず、武器も装具も投げ出して逃げ出した。戦車は大束柴を壕中に投げ込んだ。徐々に壕に近づきやがて壕の外岸を逆さになつて降り、次で内岸を這ひ上る内に尾部が束柴の上に載つた。無限軌道が束柴に緊りこ噛み著くので、戦車の巨軀は苦もなく壕を超えて平地上へ出た。

流石獨逸軍で苦心したヒンデンブルグ線ではあつたが、戦車は丁度子供が溝を飛び越すやうに易々こ通過した。

ある第一線塹壕の掩蔽部の内に、戦車の不意の出現に驚いて中斷された電話通信の受信文の筆記があつた。それには「警戒を嚴重にせよ。徹甲彈を準備せよ。敵は攻撃……」こゝ云ふ所で切れてゐた。更に別な書類には、既述した十八日の夜捕へられた英國兵が英國軍が間もなく急襲を行ふこゝ謂ふこゝを供述したこゝが書いてあつた。此の情報によつて、獨逸軍では豫備機關銃を守備線に就けた。然るに此の兵は、其後獨逸軍の司令部で調べて見るこゝ、更に重大なる情報を自白した。然しそれが僅かな處で遅きに失したこゝは、前記の通信筆記の中斷物によりて明かである。

第二線も間もなく突破した。敵は至る處で混亂しながら退却した。エルス將軍は旗艦ヒルタ戦車が攻撃目標に達した後、徒歩で司令部の位置に歸り、今度は電信電話によつて指揮を續けた。

攻撃は概して順調に進捗したが、場所に依つては頑強な抵抗を受けた戦車もあつた。

ラトー森林では一戦車が榴弾砲を猛烈な格闘を演じた。戦車がある角を廻つた途端に、咫尺の地から榴弾砲の射撃を受け、右側の張出砲塔は之が爲に破壊されてしまつた。打撃の爲に一旦は止つたが、幸にも發動機は差支なかつたので、運転手は其の砲を目懸けて戦車を突進させた、そして敵が二發目を装填しない内に、砲車の上に乗上げて之を踏み潰してしまつた。

マルコアンでは、ある戦車が危い處で橋の爆破されるのを防いだ。先頭戦車が重要な鐵道橋の附近へ接近した處、丁度敵が之を爆破しようとして、爆薬に電氣發火の導線を結び著ける爲飛んで来る處だつた。之を見た戦車長は爆破させては一大事と思つたので、拳銃を手にして戦車の外へ飛び出し、敵の作業兵を射殺した。

同じ村での話である。第一大隊の小隊長ウエイン大尉は、部下の一戦車に乗つて前進した。敵の第二線塹壕に近づいた時、敵の一支撐點が我が歩兵の前進を妨害してゐるのを見て、直に之に向つて突進した。間近かまで来た時に、乗つてゐた戦車に敵の砲弾が命中炸裂したので、戦車は破壊してしまつた。薄らいで行く煙を透して見るに、大尉一人の兵を除く外全員が戦死してゐた。重傷にも屈せず砲塔の孔から覗いて見るに、敵の支撐點は依然頑強に抵抗してゐる。「こいつは何さかしなければ……」

……」と謂ひながら、大尉は戦車の機關銃を脱して身に佩び、痛みを耐へながら戦車の外へ飛び出し、射撃を加へながら敵に向つて進んで行つた。大尉が血達磨のやうになつて接近して来るのを見たので流石の獨逸兵も仰天して動搖の色を見せた。猶大尉が敵の頭の上へ迫つて猛射するに、敵は半分退却し半分は降参した。此の時大尉は最早機關銃を操作し得なくなつたので、捨て、あつた小銃を拾ひ上げて退却する敵を射撃したが、自分自身も亦敵彈の爲めに頭部をやられてしまつた。

間もなく、歩兵が前進して來て擔架にのせて繃帶所に送らうとしたが、之に應じなかつた。出血が甚しくても長くは持てそうでなかつた。併し意志鐵の如き大尉は、不自由な身體で射撃を續けながら、遂に瞑目してしまつた。「獨力能く友軍歩兵を前進せしめたる」廉を以て、ヴィクルリヤ十字勳章を敘賜された。

フレスキエールの西端では、稜線の直後に位置した獨逸砲兵の爲めに、戦車は稜線に出るや否や猛烈な近距離射撃を受け、其の犠牲になつた戦車が少くなかつた。ヘイダ元帥の著述によれば、此の損害は砲兵中隊に唯一人生き残つてゐた獨逸將校が、獨力を以て與へたものであつたので、陣中の一佳話として傳へられたと謂ふことである。

ピオン中尉の指揮したエドワード二世戦車は、フレスキエール村の機關銃巢を攻撃中敵の榴弾の爲

めに破壊されてしまった。戦車長は全員に下車を命じたが、敵に反対側にある砲塔の扉が開かなかった。リチャードソン上等兵は敵に面する扉から機関銃を持つて敵弾の中へ躍り出して射撃を開始した。其他の者を従へたピオン中尉は、是も機関銃を脱して飛び出し、附近の塹壕内に機関銃を据ゑて射撃を開始した。暫くするにゴルドン聯隊の兵士が十名許り辿り著いたので、之れをも併せ指揮してゐる内に、遮蔽した敵の一機関銃からの射撃で多数の損害を生じたので、勇敢なピオン中尉は機関銃を抱えて破壊した戦車の屋根に上り、束柴の蔭に銃を据ゑて敵の機関銃を制壓した。

英軍の兵力微弱なりと見て見つた獨逸軍は、二百名の兵力を以てピオン中尉の塹壕に向つて逆襲して來たので、中尉は必死になつて漸く之を撃退した。

最早彈藥を消耗し盡したので、何しかしなければ次の逆襲を防ぐことは出来ないと思つた。中尉は部下に命じて塹壕内を搜索させた處が、獨軍の遺棄した機関銃と彈藥があつたので、ルイス機関銃を捨て、之に換へた。そして繰り返し逆襲する敵を數時間に互つて拒支してゐるうちに、シーフォース聯隊から一中隊の歩兵が増援にやつて來た。然るに其中隊長が間もなく敵弾の爲めにやられたので、ピオン中尉は代理中隊長の到着するまで、此の中隊をも指揮しなければならなかつた。

戦車に敵の砲弾が命中して火事になるに、乗員は焼き殺されないやうに車外へ出るのが一般であつ

たが、今までそれに苦しめられてゐた獨逸兵は、得たり賢しと許りに難破戦車を包圍して、脱出する兵員を殺傷し、戦車の鹵獲を圖つた。

アーヴランクールで一臺の戦車が、斯様の状況に遭遇した。敵線近く迫つた戦車に敵弾が命中して火を發するに、二百許りの獨逸兵が迫つて來た。炎を逃れようとして戦車から出た二名の英國兵は即座に殺されてしまつた。反対側の扉から逃げ出した乗員が彈痕へ身を避けるに、敵は擲彈を投じて一人を殺し其他を負傷させた。

戦車長のマクエルロイ中尉は戦車内に残つてゐて、消火器で漸く火を消し止めた。餘燼の尙濼々としてゐる中で、中尉は機関銃を以て射撃を開始し、多数の敵を屠つた。氣がついて見るに一部の敵が負傷兵の匿れてゐる彈痕へ這ひ寄つて行くので、中尉は窓を開いて拳銃で之を狙撃した。激昂した敵は突進して戦車を鹵獲しようとしたが、中尉は極力抵抗を續けるに數時間、救援歩兵の來著によつて、纔に其の難を免れた。

戦闘戦車が敵を擾亂制壓する間に、補給戦車は之に追尾して補給に任じ、無線戦車は命令報告の送受に忙殺された。鐵條網排除戦車は直に前進して、錨を使つて騎兵の爲三條の廣い通路を準備した。騎兵は前方へ進出するには進出したが、稍、躊躇後巡の色があつたので間に合はぬとこが多かつた。

十一月二十日の午後四時には、戦車戦は偉大なる成果を収めて終を告げた。十時間の間に歩兵は正面十二杆に互つて縦深に於て約九杆の前進を爲すこゝが出来た。捕虜八千、火砲百門の外多数の倉庫、酒保、野戦郵便局、病院、映畫館等を手に入れるこゝが出来た。併も之に對する英軍側の死傷は一千五百を超えなかつた。イーブルの第三會戦に於ては、同一程度の戦線進出に對して、三箇月の日子に四十萬の犠牲を要したのである。

兵力僅かに四千を超えたに過ぎない戦車團が、戦闘の容想を一變させたのだ。一九一六年の二月に、先見の明あるスウィントン大佐によつて唱導された新戦術の勝利であつた。もし高等統帥が一層早く大佐の思想實現に努めてゐたならば、如何に犠牲者の數を減じ、如何に偉大なる戦果を収めてゐたであらう！。

大捷の報を傳へたイギリス本國では大變な騒ぎであつた。教會ミ云を教會は皆鐘を鳴らして祝福した。一寸先は闇であるこゝに氣のつかない民衆は、最早戦争も山が見えたミ語り合つた。彼等は間違つて居つた、併し彼等の直覺丈けは誤らなかつた。何故かミ謂へば、此の日頑迷なりし將軍達の眼が始めて開かれて、戦勝への道を鑿開すべき新兵器が、躊躇した將軍達の眼を醒まさせたからである。

十二、カムフレール會戦餘話

村落内の戦車戦——敵中に於ける故障——停車場から戦線へ逆戻り

十一月二十日の戦闘に於ける戦車隊員の決意は悲愴なものであつた。石に嚙りついても捷利を収めて戦車の價値を示し、戦車團を解散から救はなければならぬミ、意氣込んでゐた。

戦闘員ばかりでなく、非戦闘員の意氣込みも同様であつた。工場係のパーソン中尉は氣が氣でないので、工場にヂットして居るこゝが出来ない。戦車が故障を起した場合には即ぐ様修繕してやらうミ考へて、攻撃に前進する所屬中隊の後へ徒歩でついて行つた。するミ、自分のすぐ前を前進してゐる戦車が火事になつて、四名の乗組が火傷を負ひ煙に巻かれて昏倒した。残つた戦車長が運轉手ミ二人で火を消さうミ必死の努力を續けてゐるのを見たパーソン中尉は、戦車内へ躍り込んで行つて二人に協力して、火を消し止めた。

部下四人を失つて當惑し切つてゐた戦車長に向つて、パーソン中尉は

「人が足りないで困るだらうから、乃公が變速機手になつてやらう」

ミ謂つて其の位置に就いた。戦車が前進を起して敵の砲兵陣地に接近するミ、敵の彈丸が三發飛んで

来て戦車を破壊し戦車長を殲した。残つたのは、運轉手ミ飛び入りのエキストラである工場係の中尉丈けになつた。

戦車は全く動かなくなつてしまつた。が、流石は職掌柄丈けに、中尉の努力によつて兎に角發動機が回轉する丈けの應急修理を加へるこゝが出来たので、負傷者を乗せて集合地まで運轉して歸つた。

戦車に乗つて居るのは、恰で砂の中へ頭を突込んでゐる駝鳥のやうなものだ。最も有利に指揮しようと思へば、車長でさえも命を的にして時々戦車の外へ顔を出して見なければならぬ。他の乗員に至つては砲手や銃手が、砲門や銃眼から時々チラ／＼と外部の有様が眼に入るに過ぎなかつた。此の全く外部の見えないと謂ふこゝが、耳を聳する發動機の轟音や銃砲の發射音と共に、乗員を戦場の光景や音響ミ全く隔離した。一寸先の危険も見えぬ全くのお先眞闇ではあるが、一番人を怖ろしからせる砲弾の炸裂する音も聞えなかつたし、其の上装甲によつて防護されてゐるこゝが、乗員に非常な自信ミ勇氣ミを與へた。

敵弾に對して安全であつたので、健全な戦車の内部にゐる限りは、一般に沈著を持し多少の術策を廻らすこゝが出来た。

マークIV型戦車では、二次齒轉が非常に邪魔になつた。ある戦車が機關銃の三銃ある敵の機關銃集

を射撃しようとした時の事だつたが、戦車長はサンマーミ謂ふ砲手の射撃をやり易いやうに、戦車に回轉を命じた。サンマーは眼を銃の照準具につけ指を引鐵に掛けて待ち構へてゐるが、戦車は二次齒輪が言ふこゝを聞かぬ爲に回轉するこゝが出来なかつた。

耐り兼ねたサンマーは、銃を抱えて戦車の外へ飛び出し、敵の機關銃に射撃を加へた。雨のやうに飛んで来る敵弾の中に立ちながら、サンマーは精確な射撃を續けて敵の機關銃を追ひ拂つた。

持つて行つた束柴が滑り降つて来て、戦車長ミ運轉手の視界を妨げる爲に戦車を止めて直さなければならぬこゝもあつた。こうした時には、誰か戦車の屋根に這ひ上つて行つて、斧で束柴を切り刻むのだが、何しろ敵弾雨飛の中でやる事なのだから、危険極まる仕事であつた。ある戦車では、束柴を切りに屋根へ這ひ上つた者が、續いて二人まで戦死した。三番目に出て行つたのはサイクスミ謂ふ兵隊だつた。敵の機關銃は、同じ屋根で二人まで撃を殺したので、次の者の出て来るのを待ち構へてゐた。が、サイクスは恐ろし氣もなく這ひ上つて行つて、束柴の位置を直して、戦車内へ逃げ込んだ。

既述の通り戦車團には豫備員ミ謂ふものがなかつたので、惡戦苦闘を重ねた結果、兵員が疲勞の極に達し、迎も重ねて戦場へ出て行くこゝは出来まいと思ふ程の有様ミなつた。併し豫期以上の成功に有頂天になつた總司令部では、續いて攻撃を續行するこゝに決したのみならず、豫て準備してゐるた佛

軍に對して増援を受ける必要のなき旨を申し送つて仕舞つたので、十一月の二十一日には、戦車乗員共に疲れきつた者の内から選抜の上、四十九臺の戦車をカンタン及ファンテーヌ・ノートル・ダムの攻撃に参加させなければならなくなつた。

ファンテーヌ・ノートル・ダムの村落は此の日に一旦占領したが、翌二十二日に敵に再び奪取されたので、二十三日に再度之を攻撃することになつた。此の時は敵は増援を招致して戦車に備へ、如何なる犠牲を拂つても之を確保する決心であつたから、非常に猛烈な戦闘を惹き起した。戦車は此の村落を占領すること實に前後八回に及んだが、何時も占領地の確保に任ずる歩兵の兵力が弱少な爲に敵に奪回され、戦車も遂に十一臺の破壊戦車を残して撤退するの止むなきに至つた。

村落内の戦闘は、道路が狭く視界も至つて制限を受けるので、戦車としては一番戦闘し悪い戦である。ファンテーヌ・ノートル・ダムの村では、敵は家屋の階上に蟄集して、銃弾も手投弾の雨を戦車に注いだ。敵は野砲を家の門口に秘匿して配置し、又歩兵に對しては一旦戦車を通過させて置いて其の背後から小銃及機關銃を集中するやうに命令してゐたので、戦車は背後に装置してある燃料槽から火を發し猛火に包まれるやうなことがあつた。

戦車は家屋に對し至近の距離に迫つて五十七耗砲の射撃を加へ、時には崩れる煉瓦や壁の爲に埋め

られるやうなこともあつた。殆んき全戦車が最後の一發まで彈藥を使つてしまひ、中には搭載してゐた銃砲全部を破壊された戦車もあつたので、終には銃眼や出入口等を開け放して拳銃戦を交へたことも少くなかつた。全く凄愴の極みであつた。

ある戦車は故障を起して停つた。敵は得たりに許りに飛び出して來た戦車を包圍し、全く咫尺の距離に迫つて砲門銃架などの隙間から内部を射撃して大部の乗員を負傷させ、

「降参しろ、降参しろ」

と叫び全く手の下しやうもない状況に立ち到つた。右腕を負傷した戦車の射手は左手で射撃を續けたが、敵が銃眼の下に入つてしまつたので、機關銃の射撃は何の效力もなかつた。こんな状態で戦闘を續けること四十五分、戦車長が死者狂で發動機の調整に努めたお蔭で、總て發動機が回轉し始めたので、辛うじて敵の重圍を脱することが出来た。

こんな悪戦苦闘が到る處で演出される有機だつたのに、此の日の戦闘では全く歩兵の來援を期し得ず、戦車相互に増援し合つたことが多かつた。

ある戦車は村の通りの中央で敵の砲彈を受けて火を發した爲に、乗員は扉を開けて車外へ飛び出した。幸にも別の戦車が之を認めて救援に來たので、戦車長は敵の猛火を冒して部下の乗員を救援戦

車に移したが、自分は敵弾を受けて殞れてしまった。救援戦車が動き出した時に移乗した乗員は自分の戦車長の居らぬこゝに気がついて

「車長殿はさうしたんだ」

と叫んだ。銃手が銃眼から覗いて見るに、車長は血にまみれて地上に倒れてゐた。勇敢な銃手は戦車の止まるのも待たず地上へ飛び降りて車長を目懸けて走り出した。附近の家屋にゐた敵の狙撃兵も機関銃も走る銃手に銃口を向けて射撃したが、彼は其の間を潜つて車長を背負つて戦車へ戻つて来た。規定の八人の乗員さえやつみ入れる戦車へ十六人乗つたのだから、全く身動きも出来ぬ有様だつた。十六人の内十一人が負傷してゐた上に一人は既に戦死して床上に横になつてゐる。

此の戦車の機械も具合は餘りよくなかつた。放熱器は焼けてしまつて、車内は蒸汽が一杯になつた。負傷しない砲手は全部が二門の五十七耗砲に集つて、腕の續く限り射撃したので、熱い車内は火薬の血と油の臭で鼻もつまる許りだつた。戦車の装甲からは敵の射撃の爲に火花が散り、戦車から十米に離れてゐない家の窓口から射撃する徹甲弾の破片が舞ひ込んで来る。面を刺す鉛の飛沫を避ける爲に手で顔を被ふのも餘り度々のこゝでやりきれなくなつた。乗つてゐた者の蒼白な顔は血で眞赤になつたが、十六人が床上に臥すこゝも出来ないの、身をかくす方法もない。空気が汚れて来て呼吸が

第七 圖



敵は戦車の屋根で這ひ上つて来た

しくなり、負傷者は苦悶の呻吟を續け、唯戦死者のみが悲哀も苦悶も一切を忘れて床上に瞑目して横つてゐた。

鮎詰になつた十幾人の生命は偏に運轉手の上懸つてゐた。彼は慎重な運轉を續けた。既に銃砲弾を消費し盡した此の戦車は、友軍の戦線に向つて弱々しい歩みを續けて塹壕も間近になつた其の時に、唸りを立て、飛んで来た悪魔が屋根をくゞつて飛びこみ、戦車の真中で炸装したのである。

同じ日の夕方このこゝ、一戦車が非常に優勢な敵の爲に包圍された。敵は戦車の屋根に這ひ登つて排氣管を壊して擲弾を投げ込んだり、穴を云ふ穴、隙間を云ふ隙間から小銃を撃ち込んだ

りした。また地上から近づいて来て銃眼から出てゐる戦車の機関銃の銃身を引き卸さうとした。何しろ眞の闇の中なので戦車の中からは外は一切見るこゝは出来なかつた。電燈を点けたり扉を開いたりしやうものなら、光が漏れて敵に発見されたり手榴弾を投げ込まれたりする虞があるので、それも出来なかつた。

全く策の施しやうがなくて困つてゐた時に、戦車長は不圖甘いこゝを考へついた。運転手に耳打ちするに、運転手が右側の變速機手に「齒輪を中立にしろ」を後を振り向いて合圖した。戦車は運動を起してグル／＼に輪乗りを始めた。驚いたのは戦車の周囲や背中についてゐた敵兵であつた。飛び立つ蠅のやうに逃げ散つたが、戦車に踏み潰された者が多かつた。

こんな場合にも自分の戦友を見捨てないのか、戦車隊の不文律であつた。戦車が破壊して動かなくなり乗員が撤退の止むなき場合には負傷者は背負つて後退した。假令跛でも戦車の動く限りは、勿論戦死者をも載せた儘で、戦車を後退させるこゝを努めた。

戦車團の記録中には、戦友の爲に自分の身を忘れて、擔任の責務を果し異常な苦痛を耐へた云ふ様な例は多々あるが、次に擧げるのは最も顯著なる一例である。

第五大隊のスミスと謂ふ一兵の、自分の任務を完全に遂行し全く自分を忘れて戦友の爲を圖つた行

爲は、全く騎士道そのものであつた。此の兵の健氣な態度は、將來戦車團の立派な傳統を爲すべきものである。

ムーブル附近の戦闘に機關銃手であつた彼は、戦車の内部の鉛の飛沫の爲に負傷したが、よく射撃をし續けた。その内に半時間ばかりするに、戦車の乗員の一番嫌がつてゐたこゝ——敵の砲弾の命中——に遭遇した。重ねて負傷した彼の今度の疵は重傷だつた。戦車の内部が火事になつたので、乗組員は車外へ逃げ出す外に途はなかつたが、戦車は既に敵前約三十米に迫つてゐた上何も身を匿すやうな地物もなかつたので、退却しようとしても皆敵弾の爲にやられてしまふに定つてゐた。

僥倖にもつい近くに一つの弾痕があつたので、全員が其の中へ逃げ込んだ。此方からは敵の方は見えず只音が聞える許りになのだが、敵の方からは此方がよく見えたので敵は旺に射撃を送つて來た。避難乗員は地面にびつたり抱きついて居たが、瞬く間に死者二、傷者三を出した。残つた者が戦死を装つて身動をしないのであるに、獨逸兵は全滅したのだと思つて射撃を止めた。

是から先がスミスにまつては、恐ろしい苦悶の時間であつた。非常な重傷で痛みがこてもひきかつたが、彼は唇を噛んで一語も漏さなかつた。敵まで僅か二十米ほゞしか無いので、うめき聲でも立てれば、再び猛射を食ふこゝが明かだつた。自分は深傷なのでもう長くも保つまいが、戦友のこゝを考

へる。一語を漏らしてもならない場合だった。

こうして齒を喰ひしばつた儘死にもまざる痛さを耐へる。こゝ實に五時間に及んだ。耐へ難い痛みの爲に、一分が、一秒が、非常に長く思はれた。額から糸のやうな冷汗を流しながら、彼は肉も通れさばかり唇を噛んで一語も漏らさなかつた。

彼の努力は無駄ではなかつた。遂に戦友の命を救ふこゝが出来た。夜になる。戦車長が俯ふやうにして友軍の歩兵隊に辿りつき、歩兵の助けを借りて全員を弾痕から後退させた。今度はどんな大聲を出して呻吟しよう。自由であつたのだが、スミスは最早聲を出す力さえ無くなつてゐた。そして暫くする。聲も立てず身動きもせず遂に黄泉の客となつた。彼に授けられた勳記には

自己の異常なる激痛を忘れ只管に戦友の安危のみを考慮せる行爲なり。
認められてゐた。如何なる墓誌銘も之に優るものはあるまい。

十一月二十日の大捷は全くの總司令部の思ひも及ばざる程度のものであつたので、之に應じて戦果を十分に擴張利用する丈けの準備が整へてなかつた。騎兵は間もなく鐵條網と機關銃の爲に阻支されて、爾後の前進は全く不能となつた。

十一月三十日には、獨逸軍が大舉逆襲を敢行して、英軍から捕虜一萬と銃砲二百を奪つて行つた。

此の時、連日の戦闘に疲れきつた戦車隊は、恰も休憩地區へ後退せんとしてゐる處であつた。戦車は將に汽車に載せようとする間際で、彈藥や燃料を積んでゐたものは一臺もなかつた。その戦車隊が、午前の十時に急遽出動の命令を受けたのであつた。

大急ぎで萬端の準備を進め、午後零時四十分になる。二十二臺の戦車が先づ戰場に向つて進發し、其の後に少し遅れて十四臺の一隊、午後二時には更に他の二十臺が出發した。斯くして午後四時には合計七十三臺の戦車が敵に向つて進撃し、獨軍の逆襲阻止に努力した。

戦車は其の翌日も引き續いて参戦して、近衛師團及徒歩騎兵と共に、遂に敵の逆襲を喰ひ止めた。思ひも寄らなかつた此の不期戦に身命を抛つて働いた戦車は是が終る。冬營休憩地へ引き揚げた。

十三、大退却と戦車

ロシアの崩壊——獨軍の大攻勢——退却の掩護——ホイッ
ペット戦車

カムブレー會戦の直接的結果として現れた事の一は、此の年七月に一時中止と決定された戦車隊を九大隊から十八大隊に擴張する計畫の承認されたことだつた。

一九一七年の十二月及び翌一九一八年の一月の二箇月間、各大隊は休宿地に集合して冬期訓練に努め多くの將兵が新にトレルボルトに設けられた根據地に派遣された。トレルボルトは英佛海峡を見晴らす氣持のいい處であつた。此處で戦車の將校は小難しい海軍用の大型羅針盤の教育を受けた。戰場から歸つて再び學校の机に向ひ、對數表を首引きで、難しい公式をひねくつたり、正弦餘弦に悩まされたりした。

戦車の中は暇だらけなので、そんな羅針儀も皆鐵の爲めに干渉を受けて誤差を生ずるから、分畫を正しく讀算するには規正を怠ることは出来ない。地上にテープで大きな八角形を描いて、戦車の軌跡を其の各邊に平行させながら周圍を運轉して行くのは、中々難しい仕事であり、又節氣弁の操作は頗るデリケートでなければならなかつた。八角形の各邊上に於ける時の羅針儀の分畫を讀算して一表をなし、之れを戦車内に備附けて運轉手に使はせた。眞北に向つて進む時には磁針の北々東に向つて運轉するに云ふやうにするのだつた。

羅針盤規正のもう一つの方法は、浮室の下へ鉛筆の心ほどの小さな磁石を挿込む方法だつた。然し分畫の讀みを精確にする爲には磁石の長さを精密に算定しなければならぬので、此の方法は甘く行かなかつた。

此の状態は二月まで續いたが、二月になるに獨軍の攻撃に備へる爲めに、戦車隊は戦線の近く後方に招致された。露西亞が崩壊した爲めに、獨逸は東方戰場から百萬の兵力を火砲三千門を西部戦線に招致し得るこゝになつた上、丁度米國軍が佛蘭西へ上陸し始めたので、獨逸としては、米國軍の大舉して到着する以前に、増加した自己の兵力を以て攻撃を行ふであらうこゝが明かであつた。

英軍の防禦陣地は前方陣地帯と主戦闘地帯に分かれてゐた。前者に於て敵の企圖妨害を攻撃の延滞を圖り、後者に於て本戦を交へんこゝするもので、陣地帯の縦深は約六杆に亘り、極力此の地帯を保持する計畫であつた。

陣地線の後方は、村落の廢墟、砲彈に掘り返された原、荒廢した塹壕の跡等茫々數杆に亘り古戰場たる荒れ果てたソナム河の流域が展開してゐた。鬼哭愁々、戰士の亡魂を、頽廢を、錆びた鐵條網を、腐蝕した軍裝品に埋れてゐた。

戦車團自身としては、戦車隊の全力をプレーの一地に集結し所要に應じて何れの方面へも進出し得るやうに要求したが、總司令部では、カムプレーの大捷を謂ふこゝはあつたもの、未だ眞の戦車の用法を悟り得なかつた爲めに、宛實に百杆に亘る正面に分置する如く命令した。是によるに、當時の準備した戦車数は重戦車三百二十臺、ホイットベットの戦車五十臺であるから、戦線約三百米につき一臺